

(題字松陰先生筆蹟攝大攝影)

大正十三年十二月發行

# 校友會雜誌

第貳拾參號

山口縣立萩中學校校友會

報德以心

此 事 不 終。	此 日 難 再。	報 德 以 心。	天 地 大 德。
此 身 不 息。	此 生 難 復。	復 恩 以 身。	君 父 至 恩。

松陰



圓	天	上	爲	蓋。
方	地	下	爲	輿。
俯	仰	不	同	踏。
卽	是	君	子	居。
— 松 陰 —				



學 び の 園

松 方 公 の 話

特別會員 古 川 啓 藏

王政維新の大業が、薩長兩藩の力に由りて成りしことは今更云ふまでもない。従て明治大正の功臣に薩長出身の方多きは、必然の結果にして、今日まで國葬の典を享けられしもの九人ある中にて、皇族と公家との方を除けば、他は薩州と長州との出身者のみなり。今からお話をなさんとする松方公は、云ふまでもなく、薩州出身の方にて、今より九十年前、仁孝天皇の天保六年、鹿兒島の城下なる一小士の家に生れられ、幼時家計頗る困難にして、具さに生路の辛酸を嘗められしが、年長じて藩侯の弟、島津三郎久光公の従士となられ、こゝに一定の扶持にありつかれぬ。當時久光公の御側役に大久保一藏（後の利通公）なるものあり、公はその誘掖輔導によりて漸次出世せらるゝことゝなれり。幕末のことは姑く措く。明治三年に至り、公年三十三歳の時、始めて中央に出で、大藏省に出仕し、茲に明治政府の財政に映掌することゝなり、爾後公の地位の上進するに伴ひ、公の財政的手腕はいよゝゝ發揮せられ、遂に明治中興政府の財政經濟の基礎は、公の力によりて確立せらるゝに至れり。明治功臣の中には、或は政治に、或は軍事に、赫々たる功名を立てられしものありしが、公の勳功はそれに異なり、財政經濟の方面

に屬し最も地味なる事業にてありしなり。以下簡單に公の財政上の勳功の一二を擧げて、時間の許す範圍に於て、お話しをなさんと欲するのである。

公の財政上の勳功の第一は、明治初年以來横流せる不換紙幣を銷却して兌換制度を樹立し、以て財政經濟の基を鞏固にせられしこと是なり。そも維新の當初に於て、明治政府新に成立せしも、その財政は誠に貧弱にして、恰も學に成れる一書生が、新所帯を持ちし如くにて、何等金穀の儲へとはなかりしなり。而も爲すべき事業は山の如く重なり。こゝに於てか、越前の人由利公正なるもの、發案に由り、巧に紙幣を發行して、之が通用を民間に強ひたり、所謂太政官札なるもの是なり。然るに當時人は政府の存亡を疑ひ、且は從來の藩札に懲りて、之が授受をなすを厭ふの有様なれば、政府は之を憂ひ、或は己の威力を以て之が通用を強ひ、或は忠愛の情に訴へて之が使用を勧めたり。元來紙幣はその背後に之が身代りに立つ所の、所謂正貨なるものありて、始めてその信用を維持すべきものなるに、當時にありては、かゝることは、望み得べきことにはあらざるなり。されば紙幣の價值は甚しく下落し、紙幣一圓にて銀貨三十錢の價に通用せりと云ふ。されども、その後東北地方戡定し、ついで廢藩置縣の舉ありて、全國が新政府の下に統一せられ、政府の威力の増進と共に、之が信用も高まるに及び、紙幣の用途も漸く廣まり、之が價值も次第に恢復せんとせしが、明治十年に至り、西南の役起るに及び、政府は之が征討の費用に苦しみ、再び紙幣を濫發せしかば、その結果は靛面に現はれ、紙幣の暴落を來し明治十四年には銀貨一圓に對し、紙幣は一圓八十錢の割合となるに至れり。一面に於て紙幣の暴落は、物價の昂騰を來し、物價の昂騰は、貿易の輸入超過を惹起し、官民共に之に困しむこと甚しかりき。此

の時に方り、廟堂の上に於ては、國會開設遲速の問題について、論争甚しく、大隈重信は尤も急進論を唱へ、英國風の政黨政治を樹立するの説を立て、伊藤、山縣、大山等の薩長諸公と意見を異にし、遂に明治十四年十月、廟堂の中より排斥せられて野に下れり。この變に際し大隈公の後を受けて、大藏卿兼參議の職に上りしは、實に松方公にてありしなり。是より公の財政的手腕は、遺憾なく發揮せらるることとなり、公は早くも幣制改革の意見を立て、當時社會に横流せる不換紙幣を銷却して、之に代ふるに正貨を身代りとする兌換紙幣を發行し、之に由りて紙幣の信用、價格を恢復し、正貨と紙幣との價格の差異を除去すると同時に、一面には物價の昂騰を制し、輸入超過の逆勢を轉換せんことを企てたり。かくて十五年十月には日本銀行を創立して、之に兌換紙幣發行の特權を與へ、兌換紙幣の發行と同時に、從來の不換紙幣を回收して之を燒棄し、又横濱には正金銀行を建て、領事館を倫敦、巴里、紐育等の大都市に設け、以て海外貿易の發展に資し、我が輸出貿易を奨励して、正貨吸收の法を建てたり。蓋し我國は金銀の産額甚だ少く、貿易に由りて正貨の吸收をなし、之を貯蓄して紙幣を發行するの準備金となすの外なければなり。かくて明治十八年末には、日本銀行の發行せし兌換紙幣は、八千八百三十四萬餘圓に達し、之に對する正貨の準備は、四千二百二十六萬餘圓となり、從來の不換紙幣は全くその跡を絶つに至れり。よりにて十九年一月一日より兌換紙幣の正貨交換を開始することとなりしが、今や人民は、全く政府を信用し、却て正貨よりは紙幣を用ゐるを便となし、正貨の交換を請求するもの甚だ少く、以後紙幣は正貨(當時の正貨は銀貨なりき)と並用せられて、その間、厘毛の差なきに至り、所謂兌換制度は、こゝに全く確立せらるることとなり。これ公が明治十四年十月、大藏卿に就職せられて以來、五ヶ年

間の苦心によりて成りし勳功の著大なるもの、一なり。

次に公の勳功の著大なるものの第二は、金貨本位制の採用にありとす。これは公が明治二十九年九月内閣の首班に列せられし時に、彼の清國の償金を回収するの好機會を利用して決行せられたるものなり。前に述べし如く、明治十九年紙幣を正貨に交換するに方り、銀貨を以て之を爲せしことは、以來事實の上に於て我國は銀貨本位の國となりしことなり。然るに銀貨本位の國にありては世界市場に於ける銀塊の相場の高低するに従ひ、物價の變動甚しく、從て貿易上に與ふる悪影響は一通りではないのである。之れに反して金は銀に比してその價格の變動甚だしく、物價の標準を定むるには、最も適當の性質を有するを以て金貨本位貨幣となすことは一國の財政經濟の基礎を鞏固にする上に於て、尤も必要なることにて、歐米の先進諸國に於ては、既に實施せらるる所のものなり。これ公が決然として金貨本位制を採用せられし所以にして、當時金産年額僅かに四五十萬圓に足らざりし我國に於て、日清戰爭に基づく清國の償金を回収するの好時期を利用せられし次第なりとす。かくて公は從來の償金回収法を改め、金塊の輸入によりて新金貨の鑄造をなさしめ、以て從來の一圓銀貨の引き換へをなし、明治三十年十月一日より着手し、三十一年七月三十一日まで完了せり。而して新金貨は、純金の目方二分を以て價格の單位となし、之を圓と稱し、その種類を二十圓、十圓、五圓の三種となし。補助貨は一圓銀貨を廢して、五十錢、二十錢、十錢の銀貨と、五錢の白銅貨と、一錢、五厘の青銅貨とを以て之に充て、紙幣は更に金貨を正貨とするの兌換券に改めたり。かくて我國は明治三十年を以て金貨本位の國となり、歐米の先進諸國と伍して益々貿易の利を競ふに至れり。之を要するに、明治大正の聖代に於ける我國家の財政經濟

濟の基礎は、實に公の力によりて確立せられたるものにて、帝國の今日の隆昌を來せるは、實に公の力與りて大なりと云ふも過稱にあらざるなり。されば我々國民たるものは、今日公の國葬の大典を擧げらるゝに際し、公の國家に貢獻せられし勳功の一斑を偲びて、公に對する感謝の念を拂ふべきは、國民として當然爲すべきの本務なりと思惟するのである。(了)

### 秋 興 八 首

特別會員 安 藤 紀 一

これは唐の杜甫が夔州に居つて都を思ふ詩で秋の景に感興した趣向で有名なものである。

玉露凋傷楓樹林、巫山巫峽氣蕭森。江間波浪兼天湧、塞上風雲接地陰。叢菊兩開他日淚、孤舟一繫故園心。寒衣處處催刀尺、白帝城高急暮砧。

〔解〕秋も暮近く楓も露に色づいて巫山も巫峽も物淋しい(第一第二句)江の水増して波高く湧き邊境殺氣が満ちて地上まで曇る(第三第四句)この地(第五第六句)寒さの用意に處々で裁縫を急ぐらしいそれは夕べに白帝城の高い處から衣摺つ音が聞けるのでわかるが此身には衣をくれる人もない(第七第八句)

夔府孤城落日斜、每依北斗望京華。聽猿實下三三聲、奉使虛隨八月槎。畫省香爐遠伏枕、山樓粉堞隱悲笳。請看石上藤蘿月、已映洲前蘆荻花。

〔解〕白帝城の上より夕日を見日の暮れると北斗星の方を目標として都の方を望む(第一第二句)峡中の猿の聲に哀を催し嚴氏(上級の官人)に従ひて此地に來た目的もあだになつた(第三第四句)たよる人なき故再び天子に近侍することも叶はず病身枕に伏し悲笳の聲をきいて山の樓に隠れる(第五第六句)見る内に月が石上の藤かづらに映り川の洲の蘆の花にまでさしわたる(第七第八句)

千家ノ山郭靜朝暉、日日江樓坐翠微。信宿漁人還泛泛、清秋燕子故飛飛。匡衡抗疏功名薄、劉向傳經心事違。同學少年多不賤、五陵衣馬自輕肥。

〔解〕朝日のさす山里の静けさは江上の樓の日日のよい眺望である(第一第二句)夜通し魚を取る漁人も我身の如くさまよひ巢を求め燕は却て落着き處がある(第三第四句)昔匡衡は天子に逆うて上書して功名が多く得られず劉向は經書を世に傳へても功業が立たず吾身も志を得ざること之に同じ(第七第八句)

開道長安似奕棋、百年世事不勝愁。王侯第宅皆新主、文武衣冠異昔時。直北關山金鼓震、征西軍馬羽書馳。魚龍寂寞秋江冷、故園平居有所思。

〔解〕開けば都は争亂で是までの色々の事變から此先々の事を考へると甚悲しい(第一第二句)王侯の邸は皆もと住みし人は居らず新しく替つて文武官の衣冠も回紇吐蕃などの人が入りて風俗が變つて居る(第三第四句)北の國境は回紇の爲に戦があり吐蕃を征する爲の兵の徵發で急報書が走るやうである(第五第六句)吾身は淋しき秋江に魚龍の潜める如くで昔長安平居の時を思ふ(第七第八句)

蓬萊宮闕對南山、承露金盤霄漢間。西望瑤池降王母、東來紫氣滿函關。雲移雉尾、日繞龍鱗識聖顏。一臥滄江驚歲晚、幾回青瑣點朝班。

〔解〕昔吾が居た時の都は盛であつた仙宮の如き立派な御殿が終南山に對して仙人の銅像が高く聳わてゐる(第一第二句)時々天子(玄宗)が華清宮の温泉に行幸せられ帝王の雲氣が都の外の函關にまで満ちてゐる(第三第四句)己も御殿で雉尾扇の開く間から天子の御顔を拜んだこともある(第五第六句)今は此滄江の邊に臥して歳晩に驚きつ、昔の朝官の列に居りしことを思ひつゝある(第七第八句)

瞿唐峽口曲江頭、萬里風烟接素秋。花萼夾城通御氣、芙蓉小苑入邊愁。珠簾繡柱圍黃鶴、錦纜牙樯起白鷗。迴憶昔年可憐憐歌舞地、秦中自古帝王州。

〔解〕この瞿唐峽の秋を見て萬里も隔てた都の曲江の秋を想ひやる(第一第二句)御殿より曲江までの行幸道の中の花萼樓で御兄弟を集めて遊ばれ曲江の芙蓉苑は安祿山亂後は御遊もやんで邊塞の如き物悲しき景になつたであらう(第三第四句)簾は玉で柱は黃鶴の模様の縫取物で包であり曲江の舟のあたり白鷗が立つなどの面白い景もあつた(第五第六句)元來長安は昔より帝都で歌舞など盛なる處であるが俄に變つて來たのは何故であらうが(第七第八句)

昆明池水漢時功、武帝旌旗在眼中。織女機絲虛夜月、石鯨鱗甲動秋風。波漂菘菜、沈雲黑、露冷蓮房墜粉紅。關塞極天惟鳥道、江湖滿地一漁翁。

〔解〕昆明池は漢武帝の時の造作で今に帝の旗が見ゆる(第一第二句)池に銀河や棚機の織場などの實が残りて今は月が照すのみ又石造の鯨も淋しき秋風に鱗甲の動くのみ(第三第四句)池のまこもの實が黒く集り蓮の花も衰へて落ちる(第五第六句)高山連る處鳥の通ふ道の外に道なき程の蜀に漂泊し江湖

到る處便なき一漁翁となりてゐる(第七第八句)

昆吾御宿自<sub>レ</sub>透<sub>レ</sub>進、紫閣峰陰入<sub>二</sub>漢<sub>一</sub>陂。香稻啄<sub>レ</sub>餘<sub>二</sub>鸚<sub>一</sub>鵝<sub>レ</sub>粒、碧梧棲<sub>レ</sub>老<sub>二</sub>鳳<sub>一</sub>凰<sub>レ</sub>枝。佳<sub>レ</sub>人拾<sub>レ</sub>翠<sub>レ</sub>春<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>、仙<sub>レ</sub>居同<sub>レ</sub>舟<sub>レ</sub>晚<sub>二</sub>更<sub>一</sub>移。綵<sub>レ</sub>筆昔曾<sub>レ</sub>干<sub>二</sub>氣<sub>一</sub>象<sub>レ</sub>、白<sub>レ</sub>頭吟<sub>レ</sub>望<sub>レ</sub>苦<sub>レ</sub>低<sub>レ</sub>垂。

〔解〕長安の南山の分脈昆吾や御宿などの中の紫閣峯の北麓の漢陂といふ水は佳景である(第一第二句)そのあたりに鸚鵡が稻粒を啄み又桐の樹があつて鳳凰でも棲みさうである(第三第四句)吾も曾てこゝに春遊して摘草をした或は舟を泛べて日暮まで慰んだ(第五第六句)かく面白く遊んで文詩を作りて天子の御意を引き得たが仕途久しからず今は白頭を垂れて詩を吟じつゝ空しく都を望むのみ(第七第八句)

右八首の中には左の感情が含まれてある

故郷を思ふ

朝廷を戀ふ

古を思ふ

世の變化に驚く

胡兵の入寇を憂ふ

小人國政に當

るを憂ふ

風俗の亂れるを嘆く

物の盛衰を感ずる

詩の本旨を離れて唯その一部の句を種々の適當なる場合に用ゐて一義をなすを斷章取義といふこの詩を讀んでもこの斷章取義の心得を實行するのが文學上の働きの必要の事である。



## 文の林

文林は相變らず學中休暇中の宿題(小品)を掲載する事にしました。

### 暴風の夜明

第一學年 長谷川 保

ふと夢から覺めて、急に床からはね起きた。あたりはまだ薄暗い。きよろ／＼周囲を見廻すと、急に、井戸端の方に、闇を破つてギーギート、水を汲む音が聞える。それと同時に、ゴーゴート、物凄い風の音がした。氣持は餘りよくないが、立つて、障子を静かにあげると、急に、強い風が、私の頬に吹き附けて來た。向うの藪の竹は、まるで、弓のやうに曲つてゐる。一面の廣田には、緑色の波が際立つて見ゆる。昨日まで、生々として葉を軋ばしてゐた豆も、今は互に頭を垂れて、蓮の大葉も、今朝は、もう跡形もなく、皆碎かれて居る。

あゝ、この有様を眺める農家の人、は如何な心持であらうか。

### 雨降る日

第一學年 島屋 與一

雨は嫌だ。朝起きて見ると、僕の嫌な雨が、しとしと降つて居た。「又雨か」と、思はず言つた。午前には、しとしと降りであつたが、午後からはもうざあ／＼と降り出した。雨は嫌だ。僕の好きな運動も出來ず、二十日に定めて置いた運動も出來ない。胸中はむしやくしやする。「嗚呼嫌だ」と、かう言つた。時に、新聞を見ると、日本國中、到る所、雨乞をして居ると云ふ事が書いてあつた。「又雨か」「嗚呼嫌だ」と云つた事は、いつの間にか忘れて、「雨よ降れ／＼。しつかり降れよ。稻を太らせ、しつかり降れよ。」と言ひ出した。

### 坊主頭となつて

第一學年 山田 只夫

昨夜床屋へ行つた。刈り終つて立つと、鏡に、



變な頭が映つた。「あ、恰好の良い小僧さんだ」と。と理髪屋が言つた。僕は、何だか、馬鹿にされた様な気がしたので、直に出た。夏の事であるから、空は晴れて、星は點々と光つて居る。涼い風が頭に當つて、形容し難い程、氣持が良い。歸ると、兄さんが笑はれるので、直に、床に就いた。床に就いて、頭を撫でて見る。時々、ボウーと蚊が来てさす、それから、朝、小學校へ行つて見ると、宿直の長弘先生の頭も、僕の仲間になつて居られたので嬉しかった。

### 忙しい酒屋

第一學年 大野 重一

暑中休暇が来た。僕は郷里に歸ると、祖父様は酒屋、父上は農夫の仕事をして居られた。僕は、直に、酒屋へ行つて見た。其後は、毎日酒屋に行つて、僕の従弟等と、朝早くから勉強し、また將棋をして色々遊んだ。正午頃になると、人が酒を買ひに来る。僕は、遊びを止めて酒を量り、従弟は錢の事をし、毎日此様な事で、夕方が一番忙がしかつ

とおかしい。

### 今と昔

第一學年 藤井 史朗

六十年前に死んだ人が、今の世に生れかほつたら如何に驚くであらう。昔は、馬、駕籠で道中したのに、今は、汽車電車、自動車が出来、昔は、飛脚で用事を傳へたが、今では電信電話が發明されて、千里が比隣となつた。昔の行燈が電氣燈とばかり、天狗だけの術と思つたのが、飛行機で、何人も空を飛ぶやうになつた、昔と今を比べれば天と地との差である、大名武士の往來に、「下に下に」と唱へると、百姓町人は土下座をして居なければならなかつたそうだが、今は、四民平等で、そんな事はない。寺小屋といつて、寺の坊さんが先生をした時は、後の世に小學校が出来て來ようとは誰も思はなかつたであらう。

### 撮影

第一學年 宮原 進

やつとの思ひで、寫真屋に行つた。二階に案内

た。僕が居らぬ間は、内の人々が酒屋の仕事をして居られたが、僕等の手傳で、樂であつた。「あ、學校が始まつたら、吾々はさぞ忙しいであらう。」と云はれた。僕は、其の言を聞いて、もう少し休暇が長がければと思つた。

### 始めて制服をつけた時

第一學年 岡田 勝

一日千秋の思ひで、待つて居た制服が出来た。さて着て見ると、何だか恥かしくて、外へも出でかねた。それに、皆の人が、「好い服だ」と言つて冷かすので、いよゝゝ恐入つた。顎が窮屈で、腰の邊がふわ／＼して、非常に心持が悪かつた。人の居ないのを見計つて、戸外へ出たが、極りが悪いので、首を垂れて急いで行く、一足毎に、靴がキユウ／＼と鳴る。靴にビシヤリと泥水がかつた。しまつたと思つて、拭はうとすれば、後から上級生が来る。見せふらかすと見られては一大事と思つて、拭く手を止めて急いだ。着ぬ内は着たかつたが、着て見ると中々心配であつた、今思ふ

される。寫る大きさが手札形ときまる。「先づこちらへ。」と云ふ。レンズの前に立つ。ちいつとレンズを見つめて居ると、限りなく、不安の思が浮び出る。もじ／＼する體つきを、寫真屋が直しに來た。思はず、胸がどき／＼する。「では映りますよ、と云はれると、あわて、體が軽くふるへた先づこれで良いと思ふと、急に氣拔がする。

### 僕の弟

第一學年 岩本 頼夫

僕の弟は、今年二歳である。僕が休暇で歸宅した時、始は、僕の顔を見ては泣き見ては泣き、見上げる度に泣くのが、何時となく馴れ、僕の後を追ふやうになつた。それと言ふのも、僕が弟を愛する故であらう。僕は、弟をおんぶして走ると、兩手を擧げて、あゝと大聲を立て、善ぶ。其の様が何となく可愛くなつて來る。それで、僕は、弟の成長するのを、何よりの樂みとして居る。僕は遠く離れて居ても、弟の事を考へると、その姿が目の前に髣髴として浮び出る。

## 蚊

第一學年 武居好次

夜讀書しようとする時、蚊がさして、痒くて困る。耳のあたりに、ブーンと飛んで来て、顔と言はず、手足と言はず、何處となくさす。其の度毎に、痒くて堪らない。なにも、蚊になぞさされるものか」と、氣を張つては言ふもの、やはり、蚊には、閉口して仕舞ふ。今この文を作つて居るが、一字書いては蚊を逐ひ、二字書いては蚊を逐ふので、うるさくてならない。文も、上手に作れない。蚊を逐つた其の時はよいが、又直に來てさす、痒い。ブーンと耳の側に飛んで來た。蚊屋の中へ入れば、眠氣がついて、自然と眠つて仕舞ふであらう。

## 宮市天満宮參拜

第一學年 徳久正敏

七月廿六日、山口の親族を訪問した。廿九日、宮市天満宮參拜を思ひ立つた。午後五時二分の汽

車は、蟲の聲が繁く聞える。向ふの方から岩武明治君の吹くのか、明笛の音が、邊の總てを解はす様に、高く低く、稻田を渡つて來初めた。やがて、木魚の音はふつと止んで、耳に入るは、唯蟲の音と笛の音である。あゝ日常、塵埃の中に蠢動する都會人に見せたいのは、此の月、聞かせたいは、あの明笛の音。と思ふ内に、笛の聲は、益々妙曲に入り、月は、いよ／＼牙を渡つて居る。

## 三分間

第一學年 山一市生

「アラッお母さん」と、私は軽く叫んだ。お父さんが吸はれる煙草の火が、螢の尻の様に、ボウツと光つて、其光で、につこと笑つて居らつしやるお母さんのお顔が、ぼんやりと薄赤く見わた。それから、コツンと音がすると、煙草の火は、火鉢の中に轉がつて、すぐ消れた。お父さんも、お母さんも、無言である。天井を、鼠が急がしく駆けた。後は、又静けさが暫く続いた。遠い所でも犬の吠ゆる聲が聞える。忽ち、バット電燈が點い

車で出發して、夕方、三田尻に着いた。驛前の道を進んで右折すると、朱塗の社殿が見えた。大鳥居に着いた頃は、薄暗くなつたから、そこで一拜したのみで、附近の旅館に泊つた。翌朝、更めて參つた、鳥居、石段、樓門、拜殿、皆清浄である。千疊敷の壁間には、額や、縣下小學生の清書が掲げてある。後の神苑からは、防府町、及び附近の村落、連亘せる山々、瀬戸内海を一目に見渡される。昔菅公は、此の酒垂山に上つて、四方の景色を賞せられたとか。實に佳い景である。寶物殿に入り、暫く寶物を觀覽して、午前十時二十七分の汽車で、山口に歸つた、愉快であつた。

## 静かな月明の夜

第一學年 岩武照彦

夕食を待ち詫びて庭に出る。黄金の盆の様な、初秋の満月は、臙に霞んだ長澤臺を離れて、秋天に昇り、煌々と光を空に放つて居る。前の老松は黒く長い影を、稻田の上に引いて、家の方からは木魚の音が、たんと／＼と響いて來る。庭の木立か

## 大ヶ峠の隧道

第一學年 柳谷菊一

今汽車は、大ヶ峠の隧道の中へ、勢よく、勇しく、汽笛を鳴しながら、這入つて行つた。中は眞黒であるのに、電氣が點かない。其の上、向ふの窓の二つ三つが開けてあつたので、其の爲に、煙は／＼と這入る。乗客一同は、皆、愚痴を言つて居る。始め、隧道の中へ這入つた時は、隧道の口から、少し明りが差して居たが、汽車が進行するに従つて、明りが次第に消れてしまつた。暫く人々が、が／＼と言つて居ると、間もなく、汽車は、隧道を出た。人の話を聞くと、八分餘りも經つたと言ふことである。

## 合格の喜

第一學年 兼田英一

入學試験成績発表の日は、いよ／＼今日だなど思ひながら、僕は、朝飯を、何時よりも早く済し

て、中學校へと急いだ。行く／＼も、胸には、色々な事が湧出した。合格だったら、どんなに嬉しいだらうか。もし不合格だったら、宅に歸へて、何と言はうか。小學校に行つて、恩師に、どんな顔で遇ふ事が出来ようか。中學校に近づくほど、僕の胸中は走馬燈の様にかはつて居た。學校に行つて見ると、最早、數十人か來て居た。さてもと駈附けて見れば、思ひの外に、僕の名前は、直ぐに見つかつたではないか。此の時、僕の喜は、言語に絶して居た。之と言ふのも、皆、小學校で教を受けた諸先生の賜であり、又、父母の恩である。僕は、深く之を感謝した。

### 机

第一學年 作 間 謙 治

僕の所持の机は、明治四十二年に造つた古机である。材は、杉の木で、上が黒く塗てあり、随つて、よほ光澤がある。兄さんや、姉さん達が、随分使はれた机である。この机には、墨や、インキ、小刀の傷が、澤山附いて居るが、此の机こそ、

僕の成功の一部分を作つてくれるのである。さうすると、此の机には、悪戯をしてはいけない事が分る。僕は、此の机が、僕に、「勉強せよ」と云ふかの様に思はれる。それゆゑ、之に向ては、専心勉強しなければならぬといふ氣が興つて來る。僕は此の机が軽いから、到る所に抱へて行く。僕は、今後、此の机から、多大な恩を受けるであらう。

### 樂しかつた時

第二學年 古 澤 利 夫

長いと思つて心を安めて居た夏休も、十日過ぎ二十日過ぎ、今日々々と言つて居る内にはや後十日と迫つた。焼き盡す様な酷暑、毎日二階で耐へた。今日も亦晴天だ。暑さを我慢して一時間ばかり宿題を練習し、靜かに頭を上げて廣い海原に目を注いだ。遙かに右手の晴空を恨めし相に、雨の雲を戀して居るかの様にうち眺め、更に目を轉じて海面を見れば、少しの波も見せない。唯海上をそよ吹く微風に、岸にのみ小さな音を立て、居

る。小舟に身を乗せ灣の中頃まで漕いで出たのは、それから半時間も経た頃であつた、微風に顔を撫でられて、唯一人舳に腰を据ゑ、舟の流るゝまゝに遊んだ。貧富苦樂も忘れる。鏡の様に靜かな海で何の氣もなく漂うて行く。海底は魚の遊び場所だ。藻の林の中を縫うのが手に取る様に見える。海上の晴日は海の底も同じだ。海の魚も今頃は夏休みに相違ない。五六種の魚が藻の中を見え隠れして居る。やはり楽しいに相違ない。一時間ばかり無意識に遊んだ。太陽は尙止まず輝いて、水面に其の影を印して居る。不圖頭を上げれば、何時か中央よりすつと西方に姿を傾けて居た。立ち上つて櫓を手を取つた時は、思はず我に甦つた。そして靜かに梶を海岸へ向けた。

### 失 敗

第二學年 伊 藤 昇

第一學期本試験の前日の事は、僕の二學年中に於て一番の失策だつたと思ふ。それは僕の外二三の友人と海へ出、楽しく遊び疲れ、河傳ひで歸る其

の時、凡そ私の膝のあたりまでつかつた頃であつた。突然「アツ」と叫んで、どうしようもいた。それも其の筈、足の裏には大きなビール壺の破片が刺つて居た。「踏み抜き」と叫んで救を求めた。幸に背後に居た二人の友が僕を抱けて、草原まで連れて行つてくれた。鮮血は氣味の悪い程流れ出、あたりの芝を眞赤に染めた。同時に僕は何か心配になつて來た。それは明後日の試験の事であつた。醫師は「奇麗に療治し學校に行かぬ方がよい」と云つた、が然し、大切な時である故、僕は學校に出る事とした。却つて試験中は幸か不幸か、思ふ様に勉強が出来て嬉しく思つた。

### 夏 の 夕

第二學年 辻 永 勝 明

風呂から上つて、露を踏みながら、堤の上を歩んだ。ポチャリ／＼と水の音がする。蛙が驚いて水の中に跳ね込んだのである。少し行くと又ポチャリ／＼、續いてポチャリ／＼。向ふ岸には蒔いた様に多くの螢が光つてゐる。

それが露深い草に映る度毎、柔しい光が浮き立つ。ふわりとその中の一つが飛び立つた。大方村の方へ遊びに行つたのだらう。やがて彼方で捕つた捕つたと言ふ聲がする。又こちらでもする。あの螢は捕られたかも知れぬ。川を越して廣い青田から、涼しい風が吹いて来て、川岸の蘆の葉をさら／＼と鳴らした。あたりは次第に暗くなつて、川向の家の燈火が、ちら／＼と見わたした。

### 蒸し暑い日

第二學年 山根芳郎

日ははや西山に半身を隠し、彼方の松樹の間にどざれ／＼に見ゆる。法被を著た職工や、手拭を頭にした女が、いかにも樂しげに吾家をさして、語りながら急ぐ。樂しい夕飯の食卓に向つた。お父さんの額は汗でびつ／＼よりだ。いつもの通り手拭を濡し、籠の中に入れて食卓の側に置いた。おもての簾は一寸も動かない。嗚呼蒸し暑い日だ。庭の涼み臺へ出た。弟も妹も驅け着けて来た。庭の隅の柳の木も微動さへしない。臺へ轉んでゐる

燒の空に急ぎ、夕暮を告ぐる遠寺の鐘淋しげに聞ゆ。下りかけたる夜の帳、今益々下らんとす。

### 雨

第二學年 板垣禮作

六時、夢現に起上つて書齋の窓を開けると、小雨を含んだ冷かな朝風が、スツ／＼と頬に吹きあたつた。その冷さ、心持好さ、流石に眠い眼も急に生き更つた。

どんよりとした灰色の空には、墨繪の様な後山が僅に姿を現し、薄墨色に描かれた山々は、遠く朧げに浮んで居る。絲條の様な小雨は、すが／＼しい稻田の緑を一條毎に増す。

「絲雨の飛ぶや燕と十文字」

雨中を横ぎつて眞一文字に燕を結ぶ雨、共に幽雅な趣を現して居る。落ちては碎け、碎けては復た落ちる軒漏る雨水の滴二滴、只に景趣の美を増すのみでなく、我等をして或る一種の教訓を與へてゐる。

ど、お父様がおいでになつた。お父さんと一日の出来事などを話してゐると、突然何かふんとうなつて僕の足に止つて羽を休めた。一打と思つて手を振り上げたところ、又ふんど何處へか飛び去つた。貴い血を別つてやつて惜しいことをした。庭の柳の木も籠も、相かはらず一寸も動かない。嗚呼蒸し暑い日だ。

### 田舎の夕

第二學年 三浦彦八

太陽ははや西に没せんとし、夜の帳は今や下らんとす。農夫も畦道傳ひにて、鋤鍬等擔ぎて我家へと急ぐ。今年の早にて、赤くなりかけたる稲の穂も、夕風にそよ吹かれ、音楽を奏する聲も明に聞ゆ。……彼處に一煙、此處に一煙、何れも夕食の爲めの火ならん。今迄天地覆へらんばかりに騒ぎ遊び居たる子供も、今は蜘蛛の子を散らしたる如く一姿をも認めず、唯田の中にて鳴く蛙の聲靜に聞ゆるのみ。彼處に一點此處に一點、燈火の數多くなり、蝸の聲鳴き止み、鳥も共に火照りたる夕

### 夏の月

第二學年 大村武一

晩夏の日には疾うに西山に落ち、夕陽名残を留めず。涼風橋上を訪ふ。西天には白銀の半月淡く掛つて萬物を照らし、高く渡る風橋畔の松の頭上を掠めて、かすかに音立つるも淋し。緩かに流る、川の面には、水銀の波紋消えては出で、出でては消ぬ、流るかと思へば留まり、銀魚の嬉々として戯るが如く、二三の小舟川の中流に浮ぶ。家々の屋根草々の葉末には、露滋げく置き、銀砂の如くきら／＼と光る。川邊の家、垣杉などは暗く流れに影を寫せり。夜は次第に更け、橋上の人既に減り靜寂は身にしみ、霧起りて川を蔽ひ、遂に身邊を包む。二三の鷺うちつれて行く。この景色に別を惜しみつゝはや家路を辿る。はたと虫の聲やみ復單調の音起る。

### 汽船に乗りて

第二學年 詠村洋

ボーと一聲を残して、汽船は靜かに澤江港を出

帆した。空には一点の雲も無く、澄み渡つた好天氣。然し波は少し高かつた。「ガチャン／＼」と云ふ音と共に、汽船は愈々スピードを増して海上を滑り出た。甲板から海上に目を注ぐ。船の先から湧き出でる白い泡雪の様な潮は大波小波となつて、混々湧き出で来る。間もなく通港に到着した。棧橋の上では静に釣糸を垂れて居るもの、荷の積み換へをする者様々だ。十分程経過し、名残り惜しい汽笛の一聲を残して出帆した、外海へ出ると洋々たる中に長閑な白帆を高く張つて走る。數隻の漁船、色々の形を成せる鳥、海上廣しと飛び廻る鷗の群、時々海月が頭を出して、ついでと船の側を通る。あゝ何と心持よき大海原よ。はや萩の指月山も目前に聳え立つて居る。

### 残暑の夕の感

第二學年 峯岡良文

長いと許り思つた夏休みも、残り僅かとなつた。日中の暑さを洗ひ流した様に、朝夕殊に涼しさを感ずる事が出来る。最早學校も間近に始まる

け、金色に、紅に彩られてゐる。中にも積雲は火の如く、大空の總ての物を焼き盡さんばかりに輝いてゐる。此の眼もさめんばかりの美しさを見、僕は「あゝ自然は何と云ふ無限の美を持つて居る事であらう」と一人で呟やいた。其の時カア／＼と二三羽の鳥が鳴きつれて北方に飛んで行つた。

### 夕立後の景

第二學年 赤木弘

雨はやんだ。雨前のむし暑い氣持は何處へやら、今はさつぱりした。黒雲はいつしか去つて、太陽はもとの様に明る照り出した。活々とした人の網引く掛聲や、蟬の啼き聲も喧しく聞かれた。山々の霞は剝れる様に去り、緑の雄姿は次第に濃くなつて来る。八月下旬の冷氣を帯びた風が、僕の頬を撫でては去る。其の氣持は到底海邊に住んでゐる人でなくては、味ひ難きよいものである。遙の海上には早や白帆が、繪の様に浮び出でゐる。子供が二三人泳いでゐる。雨後は萬物皆活氣

のだ。楽しかつた暑中休暇も過ぎ去つたのである。夕涼みに出て居ると、蟲の音楽が聞ける。自分には小學校時代二三の學友と蟲捕りをやつた。蟲は秋を賑かに飾るものだと思ふ。しかし思へば今は故郷を隔たる事十數里の地で勉強する身だ。故郷に別れを告げる時が目前に迫つたのである、と思へば楽しくある筈の蟲の音楽は、別の曲を奏する音楽にしか聞けない。しかし、復た思つた、遠地に遊學する心強さを。

### 夏の夕立

第二學年 池上武夫

晝間の水泳に疲れた體を、涼み臺へ横たへて、ふんわりと浮いた雲を眺めてゐる間に、太陽は段々と遠ざかつて、早西北の山上にある。そうして晝の働きに疲れたのか、淡い光を投げかけてゐる。雲も太陽が戀しいのか、自づと後からついて行く。暫らく眼を閉ぢて、うつとりとしてゐた。ふと思ひ出して眼を開けば、あゝ何たる壯觀よ、大空の總ての雲が折しも沈まんとする入日の光を受

### 驟雨

第二學年 吉田豊

を帯びて見ゆる。惡魔の様な黒雲、むく／＼と東に涌き出たと思ふと、忽ち空一面に擴がり、今迄照りつけてゐた太陽は影を隠し、山風は颯然として樹を吹き巻いてゐる。その一瞬間ばかりと一閃、次いでごろ／＼、大粒の雨は雹の如く凄じく落ちてきた。四方の山々いつの間にか薄黒色に掻き消され、推し寄せてくる白雨の進行が目に見ゆる。雷はごろ／＼と鳴りしきり、閃く電と共に車軸を流す様な驟雨。降る。鳴る。光る。今にも天地が滅するかの思はれた。此の大降の中をてんつきを持つて川に走る氣樂者も居る。暫くして、夜の明ける様に四方が明るなつて、雷も遠く彼方で聞け、太陽は現はれた。見る内に地面を流れる水が止つた。風が吹きたびに、庭の青松の葉がばら／＼と散る。蜘蛛は巣を繕ひ、鳴き止んでゐた蟬が、再び梢で鳴き出した。

夏の朝

第二學年 木村好男

鶏鳴曉を報じ、夜の暗黒は刻一刻と薄らぎ、果ては我が平和な村落が眼前に開けた。私は徐に寢床を起き出で、朝の散歩にと出かけた。野邊の芒は、葉末に規則正しく美しい銀玉を置き、鎮守の森は霧立ち籠め、其の間に松、杉等の常磐木の隠見する趣は、實に繪の如き美觀である。新鮮な大氣は私の面に迫り、私の心をも快活にした。

寢覺の牛を引連れ行く男の子、桑手籠を片手に持ち、唱歌唄ひつゝ家路を急ぐ少女子。嗚呼!!!實に働く身は希望に満ちて居る。私は此の天然の美景に酔うて、いつまでもいつまでも茫然として佇し、時の経過するを知らなかつたが、日光が面を照すのに、はつと我にかへり、惜しくもそこを立ち去り、吾家を指して歸つた。

夏の海邊

第二學年 兒玉玄太

晝食もそこ／＼にして友人と打ちつれ、餘り遠

一同は俄に緊張して、中には手帳を出した人もあつた程であつた。話の進むにつれて、當時の我が防長軍が義の爲に如何に奮ひ立つたかが、非常な感激を以て語られた。殊に少年が年齢を詐つて迄、兵士になつた事等一同感じ入つた。「男ならお槍かついで」云々といふ當時の流行唄も尊く感ぜられた。

水車

第三學年 横山剛熊

長の早敷に、谷川の水は非常に減つた。勢のよかつた水車も、キイ／＼と、さも息屈さうな音をして、今にも止らうかとして居る。常なら四日目毎に廻り来る見張番も、非常に廻り遠くなつた。やつと今日廻つて來た。川上の小石を除くやら、水車に油を指すやら種々の手當をした。然し減水した爲、又止らうとする。丁度牛馬の怠る様だ。怒つて打つた處で返事もなく、却つて壊れるのみだ。見張番は考へた末、車の廻り工合に早い遅いのあるのに氣附いた。そこで早い方の反對の側に

くもない小路を傳つて小高い岩の上に出た。

先ず前を見渡せば、今日は天氣も良く遠く見渡され、一点の雲も無い實に良い天氣だ。海の中程の所の孤島に小波が當つて、さながら晝の様である。右の方には、帆船が今江崎港目がけて走つて居る、海には一つの島も無く、白い鳥が高く低く飛んで居る。其の向には、田萬川が帯の様に流れ、下には白砂を盛つた長い濱の上に、十余人の赤銅色の子供達が、体を横へて遊んで居る。

今までは風も雲も無かつたが、急に向ふには瘤の様な雲が出て、蒸し暑くなつた。

まごゐ

第三學年 仙波武

六人は卓を圍んで、談話の始まるのを待つた。座敷では重苦しい沈黙が続いて居る間、小雨はしばしも止まず、庭の八角金盃に音を立て、滑らかな苔にしみこむ。總てが非常に静かで、話を聞くには都合がよい。やがて、某氏は地圖を運んで、今日は四疆戦争に就て話をして見たいと言はれた。

石を附けた。今度は早い方は石の重みで少し遅く、遅い方は少し早くなつた。止りさうな水車は勢を回復して、難なく米を搗き始めた。見張番は愉快さうな顔をして去つた。

夏の一日

第三學年 濱村伸

旭の光りが障子に差し込む頃、家を出て裏の畑に行つて仕事を始めた。だん／＼暑くなつて來た。ベツトリ汗にまみれてゐるシャツが體を揺る毎に、ぼたり／＼背に當つて、温い生臭い氣がむら／＼と肌の間を流れて來る。むかつくやうな悪臭が鼻を衝く。僕は暫く手にした鍬に凭れて、目や口に流れ込む塩辛い汗を拭うた。粟粒の様な汗が、胸一面に拭うても／＼續々後から／＼湧き出して來て、一つ寄り、二つ合ひ、静かにほろり／＼胸を幾條となく流れて居る。それが水落の邊から、時折劇しく心臓の鼓動に搖られて瀧の様に流れる。遠く近く油蟬の焼きつく様な聲を張り上げて啼くのが聞える。もう晝だ。

まづい料理でも、今日は美味しく食はれるだらう。

### 船中にて

第三學年 大永金太郎

嗚呼、楽しい夏休みは終つた。再び萩の空を望むことゝなつた。私は見島汽船上に立つて、靜かに想をめぐらした。思ひ出せば休暇中の色々な事件が、さながら走馬燈の如く頭の中を回る。楽しいお祭りや、榮螺取りの面白さなど、思ひはそれからそれへと移つてゆく。やがて、ボーと云ふ汽笛と共に船は進行し初めた。「さらば故郷よ」と私はしばしの別れをつげた。次第に遠ざかつて行く故郷の地を眺めてゐる中に、いつしか船は仙崎と中間まで來た。波は大分高くなつた。風光明媚な青海島や、仙崎、澤江もすぎ、漸く萩に近づいて來た。模糊たるお城山も段々濃く見ゆる様になつた。今まで船酔ひの爲め船室に伏せて居た人も甲板に出て來た。ボーと著陸を報ずる汽笛が鳴つた。

### 驟雨

第三學年 永富五郎

生暖い風がさつと顔をなでたかと思ふ間に、大粒の雨が、一ツニツ乾き切つた瓦を、氣持よくぬらす。急いで、縁側に乾してあつた水泳服を入れ、書齋に來て見れば、雨ははげしくなつて、しぶきは容赦なく机上にとびかゝる。前の路からは、けたましい自轉車のベルの音が聞える。暫くあつて西北の空が次第に明るくなり、雷鳴も稍靜り、雲は何知らぬ顔に去つて行く。雨後のまぶしい日光は、橙の梢を照し、金銀珠玉を掛けたやうで、恰も、クリスマスツリーを見るやうである。次の瞬間、吹いて來た風は、此の美しいツリーを、惜氣もなく破つてしまつた。憎らしくもある。此の風は夏にしか得られないで、涼しく、然も一種の快感を抱せるものだ。

### 夕焼の海

第三學年 野稻清定

一日友人と海水浴に出かけた、終日泳ぎ疲れて

いざ歸らんとして海の彼方を見た。空から海にかけて火の海のやうだ。水天髣髴の中に目の覺める様な緋の雲が一筋、朱盆の如き夕陽を一吞にせんとして居る。僕は思はずあつと感嘆の聲を漏らした。すぐ傍の友の肩をゆすつて、無言のまゝ海の彼方を指さした。友人も此壯麗な大自然に見とれて無言だ。眞紅の光を受けて魚鱗の如く、黄金の如くに、小波の磯に碎くる音のみだ。なんと壯麗な、そして麗しい景色だらう。傍の岩上に立てば、赤幕をはりつめた水天の界が、吾等も磯をも腹に抱き込む様に見える。一刻々々赤の刷毛で彩られて行く。やがて千變萬化限り無き夕焼に別を惜しみ歸途についた。

### 夕立

第三學年 川津文雄

見るからに恐ろしい怪獸の様な黒雲が頭上に擴つたかと思ふと、早大粒の雨がポッ／＼降り出す。「ヤッ來たな」と云ふ間もなく、電光一閃「ピカリ」と光つて、雷鳴ゴロ／＼と猛獸の吼ゆるが如く、

沛然として降り來る大雨は、恰も瀟の様である。雷鳴は益々高く、雨は益々烈しく、其物凄き光景は、殆ど形容の言葉もない。果ては天地も覆へるかと、一種の不安に堪へない。此の如き事しばしにして、忽ち雨晴れ、雷鳴止み、雲散じ、輝然たる太陽がサツと光を放つと、忽ち多床山の中腹に虹がかつて、恰も神橋の様である。

### 夏休を迎へて

第三學年 吉賀一夫

いつも夏休になると、始めて蘇生の思ひで、一学期間の疲を醫するのである。私は自宅通ひで、何時も暖い父母の慈愛のもとに起臥してゐるのだから、舟車の便をかり、故郷へ歸る事もない。あの優しい指月山のはゝむ所で、二三の友人と共に夏休中の事を計畫した。翌日其友人と舟遊びに出かけた。澄み渡つた阿武の流を漕ぎ下り、峻嶮目も眩む鶴江臺の背後へ出た。磯の香をかきながら紫色の島々や、白帆の走るを友として幾時間かを過した。中台から狐島へついた頃、風が宿替へ

をした爲、舟が動揺し初めたので、内心戦々兢々としてゐた。友人は皆思ひ／＼に泳いだ、私は病氣の爲、只新鮮な空気を吸うて満足してゐた。その内に工場の汽笛が鳴り出したので、瑠璃の波に浮ぶ島々や、其他の物に、一別を告げて歸路についた。かくして夏休の第一日を過した。

### 汽車の中

第三學年 宮崎三郎

い、と汽笛が高く蒸暑い空に響いて、長蛇の様な列車は、煤煙を吐きながら徐々に動きた。車中を見まわすと、皆暑い様な顔をしてゐる人々である。

子供を抱いて胸をはたけてゐる母親、袴を穿き鬘甲縁の太い眼鏡を掛け、白い筋の二本這入った帽子を被つてゐる高等學校の生徒、真白い服を着た紳士らしい人、法被を着た色の黒い目のギョロギョロする土方風の男、中には朝鮮人の白い着物の連中も二三人見えた。

汽車は山と山との間や青田を右に見たり、或は

大川を横切つたりして猛進した。

### 或る朝

第三學年 中原吉秋

遠い現實の世から誰か呼んで居るのが、今夢の國に横はつて居る僕の耳にかすかに聞えて来る。次第に聲が近づく。とう／＼醒めた。襖の外に人が居る。そつと入つて鼻を摘む。寝た振りをして居ると又摘む。「ワッ」と大きな聲をすると驚いて逃げた。ちよつと舌を出して又寝ようとする。名物の蠅が教練を始めた。口や鼻と所嫌はず小さな足で蹂躪する。藩園から露出してる足には五六疋も居るらしい。郵便が来た。續いて朝鮮人の魚屋が来る。「奥さん菜つ葉」とあぶなつかし日本語で支那人の野菜屋が来る。こん度は素敵に流暢な日本語を話す奴だが支那君かな、朝鮮君かなと思つたら、日本人のW君が遊びに来たのだつた。飛び起きて「御早ふ」あまり早くもないせ」と先づ一本やられる。鶉が鳴きながら飛んで行く。

### 登山

第三學年 小原美紀

八月十日、豫ねて約せし友数名と鐵割山に登りぬ。午前六時、草鞋脚絆の服装にて家を出づ。此の日天氣清朗満天拭ふが如し。約束の場所に行けば、既に友は全部揃ひて我を待てり。相語り、相歌ひつゝ、森にかゝれり。左に折れ、右に曲り、半里にして大焼原に出づ。談笑の裡に金目ヶ平も後になり、これより道狭り、坂益々急に、疲勞を覺ゆるに至れり。道なき道を辿りて不老溪の瀧に出づ。仰げば數十尺の上より白布の垂れたるが如く、落ちては碎け、碎けては散り、霧顔面に飛びて心氣の爽快いはん方なし。益々歩を進め、遂に頂上達せり。眺望俄に開け、東は六島、西は油谷灣まで一眸の裡にあり。此處に於て辨當を喫し、互に得し植物を示し合ひ、遂に蒼然たる暮色を踏みて家に歸れり。

### 朝の魚市場

第三學年 新谷活助

魚市場は仙崎の北端で、僕の宅の近所に在る。朝五時頃に行つて見ると、魚を賣りに行く漁夫達が多く魚をかついで、元氣よくやつて来る。買ふ人は賣る人よりもすつと早く来て待つて居る、待つて居る間がや／＼何か魚の相場の事や、色々な世間話をして居る。するうちにせるものが出る。蟻がたかる様に人々が押し合つて集る。買ふ人は自分が安い魚を買はんとして後からあせつて居る。賣る人は早く賣つて歸らうと思つて後から押し合ひ、せる聲や買はんとする聲が、さながら蟬の鳴く様である。魚を賣り終ると、次第次第に歸つて行く。集る時は忽多くなり、去る時は忽少なくなる事は丁度蟻と違はない。せり終つた後は不思議なほど寂しい。

### 魚釣り

第三學年 時澤信

緑滴る竹藪の蔭で、清い流れの厚東川を前にして、二人の老人風の者が、何か小聲で囁きながら、辛抱強く川の中を見つめて、佇んで居る。一人は



「何うです今年は鮎も少くなりましたなあ」と云へば、他の一人は「さうです、此の頃は魚も少なくなつて、困つて居ります」と云ふのを聞くと、二人共釣を業としてゐる者らしく思はれる。前には、二三本の釣竿が立てゝある。一人は、少し釣れたと見せ「さうなら御免」と云つたまゝ立ち去つた。残つた一人は、話相手もなくなつたから煙草を吸ひ始めた。日は既に西山に傾いた。入日は川に映つて水を紅に染めた。その内に残りの一人もあゝもう暮れたと、つぶやきながら、釣道具を持つて歸つて行つた。

## 西瓜

第三學年 中澤銀市

母が丹精して作つた西瓜が熟して來た。妹が籠に二三個もいで來た。土をよく洗つて切板の上に載せた。ブスリー齒切れの善い音を立て、二つに切られた。中の實もこぼれんばかりによく熟して居る。小さい弟の奴「うれた〜」と手を打つて喜んで居る。それからそれへと西瓜は小さく刻ま

て世の中から葬り去られるではないか、之畢竟克己心の缺乏せる故である。されば克己心が吾人の前途を支配すると言つても敢て大言ではあるまい。

## 心友

第四學年 永見眞人

人、心友無きは恥なり。然らば心友とは如何なる友を言ふか。即ち、互に道を論じ、異見氣に入らずとも恨みず、尤めず、打明けて和順し、苦樂を共にし、富貴貧賤をば心に挟まず、常に和ぎ、常に忘れず、死に臨むとも遠ふまじき友なり。世人或は言ふ、斯くの如き友は到底求むる事能はず。何たる愚言ぞ。其身道を好まば、遠方よりも道の友來る。况んや近きをや。藝を好めば藝の友來り、文を好めば文の友來る。其身心友を得んと欲すれば、己又人に心友の道を盡さざるべからず。故に、心友を得る能はざるは、畢竟、其の人の誠の至らざるなり。何ぞ心友を得る事能はずと言はんや。斯くの如く、心友は求め得べくして、又得ざるべからざるものなり。吾人は、之によりて智を磨き、

れた。先より眼を張つて見て居た一番未の妹は、一番小さい體をして、一番大きな切れを取るが早いか、矢庭にむしやふりついた。水が搾る様になら〜と流れる。如何にも旨さうだ、食ひたひなあ〜喉がぐ〜云つて居る。

## 克己

第四學年 松浦兼三郎

「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。」それは克己には大なる努力と、忍耐と、勇氣とを要する。従つて克己は精神修養中の最大難事である。吾々が飽くまで己に克たんとすれば、そこに煩悶と苦痛が起る。この煩悶苦痛を解決せんとする時に、精神が琢磨せられ、人格が切磋されて行くのである。されば又克己は總ての精神修養の基礎と言はれよう。國民にして克己心なければ、只安逸に流れ文明は退歩し、國力は疲弊して遂には亡國の恨を永く弭むるに至らなければならぬ。又吾人の生存中の種々なる艱難や、誘惑に打ち勝つことが出來ない時は、生存競争の落伍者とし之によりて徳に進む様心掛くべきなり。

## 日本青年の覺悟

第四學年 藤田小太郎

髪々乎たる文明の發展は流るゝ水に似て止る所を知らず。然るに、我が帝國は記憶尙新なる昨年の九月、天の下せる一大警鐘、一府六縣に響き、一朝にして十數萬の同胞を失ひ、百億の國富を灰燼に歸し、文明の進歩これ又遅れぬ。前古未曾有の震災後未だ一年に満たざるに、彼の米國は移民法案を實施し、間接に國力の挽回を沮止せんとする。此の内憂外患、加ふるに輸入超過、人心の動搖は相擧りて國運を益々危殆ならしむるの感あり「天の將に大任を其の人に下さんとするや」云々と絶叫せし大賢孟子の如く、我等青年は今や社會善導、國運恢復の大任を委任せられしなり。宜しく現代の健男子は意を國産の増進に止め、實力の養成充溢を圖り、大いに刻苦奮勵し、以つて狂瀾を既倒に回さざる可からず。我等の前途は遠く希望は大なり。勉め日本青年よ。

## 健康

第四學年 多田利雄

健康を失ひて、始めてその貴きを知る。世には何よりも健康に勝るものなし。富も、地位も、名譽も、健康の前には、實に微々たるものなり。されど健康者は、さまで健康の貴きを覺らず。徒に富に名譽にと汲々たり。憂ふべし。病院の白きベッドに、瘦せ衰へし身を横へ、西の方、沈み行く陽を送りては、我が身の不幸を嘆きつゝ、死の境の間近くなりたるを感せし時、嗚呼かゝる時の心や如何。かくまでに非ずとも、懊々として樂まず、世の人に伍し活動出來ず、靜かに病を養ふ境地にある人察し見よ。

貴きものよ、汝の名は、健康なりと叫ばざるを得ざるなり。得たきものは健康なり。げに有つべきは健康なり。

## 反省

第四學年 厚東重雄

人は神に非ず、誰か過無きを保せん、其の過を

んば、廣き社會の中に孤立せるが如し。朋友は善事あれば互に喜び、不幸あれば互に助け合ひて慰む。我が身外に在る我なり。されば良き友を選びて交はらざる時は、己も亦惡風に染りて、終には身を亡すに至らん。仕合せ好き時にのみ來り諂ふとも、一旦不幸に陥るか、見向きすらせざる者は、品位卑しき友なれば、能く注意せざるべからず。朋友の間には信義を失はざらんことを要す。信義なきときは、互に疑ひ、交情は次第に冷却すべし。されば、我々は信義を固く守りて、永く親しく交はらざるべからず。

## 眞の男子

第四學年 有美邊

熱しきつた夏の太陽は其のあらゆる精力を傾け、しかも一日として缺ぐ事無く大活動を續けてゐる。見よ、其勢を。あらゆるものを焼き盡さんとする。肉躍り魂躍る。然るにどうだ、下界を見よ。萬物死したる如く生氣無く、息通はぬ土瓦に至るまで暑さに喘いでゐる。萬物の靈長と誇る人

知りたる時は、之を改むるに憚かるべからず。然れども未だ知らざるの過あるを如何せん。自から良として行へる事も、或は他を損ふ事無きを保せず、又自ら踴したりと思惟する事も、或は未だ足ざるものあるも計り難し。自ら過を知り、自ら足らざるを知らんと欲せば、宜しく反省の徳を積むべし。人は能く他の缺點を見出すとも自己の缺點を見出す事少し。自己に缺點なく圓滿完全の人格ならば人皆我に従はん。人の我を非難し、我に背くは我に何等かの缺點ありと知らざるべからず。常に反省を愛に致さば蓋し完璧の人たるに庶幾からん。「ロック」は云はずや、教育讀書は紳士良友の創造にして、而して反省力は完璧の人を造る。然り教育讀書に依つて得たる人格は未成品にして、之に加ふるに反省の力を以てせば完璧の人格たるを得べし。

## 朋友

第四學年 國弘三郎

人には朋友なかるべからず。人にして朋友なく

間が「暑い暑い」と勞れ切つた軀體を横たへてゐる有様は何たる意氣地の無いことだらう。汝男よ、汝は少くとも一個の男子だ。暑さ何。突破せよ。そして汝は汝が信ずる走路を突進せよ。艱難に堪へ、苦痛を忍び、缺乏に堪へ、誘惑を避け、以て男子の本懐をのべる。何たる愉快ぞ。「勇躍せよ。突破せよ、斷じて休むこと勿れ。其れ汝男なればなり。」

記憶せよ。ロマン、ローランの青年への教訓を。

## 自己を信じて

第四學年 岸音熊

自己の正しいと思ふ道を、強い信念を持ち、自己を凝視して、歩むとき、人は眞に人間の生活を知らることが出来る。己を深く信じ、それに依つて自らを慰むとき無限の歡喜と、絶對の力を感ずる。外物に使役せられない人、即ちそれは己を信する人である。自己の歩む道が、淋しければ淋しい程、苦しければ苦しい程、己を信することに依つて、云ふに云はれぬ心強さと、喜びを感ずる。

自らを信じようとして信ずることが出来ず、慰安を求めて出来ず、遂に人々は随落して行くのである。

### 改過論

第四學年 竹内六郎

吾々は人間である以上決して完全無缺なるを得ない。故に處世上幾多の過失が伴ふのは當然だ。然し之は矯正や修養に依つて、高尚な品性となり、教訓となつて立派に補はれてゆく。故に過失は改過によつて初めて有意義化してゆく。過失は決して恥ではない、之を冒して何の刺戟も無く普通の氣分であられる事が恥だ。人は輕少な過失から社會の信用を缺き、遂には排斥せらるゝに至る。此際最も恐るべきは、其爲に自己を賤しく思ふ事だ、斯した時に自分を益々尊くする事が出来れば、夫は本能的改過心の漲溢する時であり、此上もない結構な事柄である。智識才藝は人の價値を左右すると云つても、斯した改過によつて暗い自己を眞實に近づけんとする者があればそれ程尊く偉大

(梅雨のある日の夕暮に)

### 忍耐論

第四學年 田村義雄

孟子曰く、「天の將に是の人に天任を降さんとするや、必ず先づ其の志を苦め、其の筋骨を勞す」と。眞なる哉此言や。試みに過去の歴史を顧みて、彼の拔山倒海の大業を成就せし偉人傑士を見よ、一人として千苦萬難を忍ばざるはなし。彼の韓信の胯下に於ける、張良の橋上に於ける、何れも皆凡人の克ち得可からざる艱苦を忍べるなり。人或は言はん、「成功は天運なり」と。何ぞ其れ愚論なる。天の徳を萬人に分與するや平等を以つてす、いかで安閑として逸遊荒醉する輩に天助ある可き。忍ぶ者は救はる可し。英雄豪傑唯忍耐あるのみ。吾人天下に大業を成さんと欲する者は、須く忍耐の徳を養ふべきなり。

### 花と月と

第四學年 中津桂三

爛漫たる百花、皎々たる明月、何れを世人の多

なものはない。

吾々は本能的改過心の湧く人と成りたい。

### 梅雨小景

第四學年 大島政輔

午睡から覺めたボンヤリした頭に夕暮の濕り風が快よく吹く……。朝からの梅雨があるかなきかの様に降りつゞいてゐる。庭の蜘蛛の糸に小さく白い寶石を結び、躑躅の紅の花弁にルビーの輝きをみせて……。庭石の蕨苔類はジツトリと露を含み、觸れば緑の滴が進み出さうだ。平たい葉が結ばれた露の玉の重さに堪へかねてバサリ／＼と音をたて、夕暮のしゞまに空虚を思はせる様にひく。淡灰色の空に今夕暮の暗さが一様に溶け込んであたりはほのぐらい……。フハリと一葉の枯れ葉が音もなう蘇苔の上に……。よき夜を暗示するかの如く……。静寂と静寂との夕暮は私の心を和やかにして呉れた。久し振りに思ひきり深く濕つた空氣を吸ひ込んだ。うれしさの溢れた胸の中に……。

く賞で愛するにや。花を賞する者は、早く自己の立身を祈り、斯の如く美麗なる錦衣を纏ふことを望み、月を賞する者は、夙に心靈の淨化を望み、斯の如く明朗透徹の精神を養はんことを思ふ。花ありて其の美麗なるを知り、月ありて其の清明なるを知る。されど月に群雲の覆ひあり、花には狂風の吹き來るなり。人生も亦然り。絶世の美人も、紅顔の美少年も、瞬時の後、遂には哀むべき白骨と化す。されど花は吹く秋風に葉を散し、積る白雪に枝折られたりとも、それを凌ぎて再び錦と争ふ華麗の花となり、月も亦黒雲を避けて、元の皎々たる明月となるに、彼の美人美少年は再び歸ることなし。花と月とは寧ろ人に勝りて清く美しきものならずや。

### 帝都復興に就いて

第四學年 松井利明

一週年は來た。十萬の生靈と、五十億の財富を灰燼と化した帝都大震災のこの記念すべき一週年に際して、國民は一層彼の民風作興の詔勅を服膺

し、緊揮一番速に復興事業の完成を期せなければならぬ。而して復興事業の第一番として、地盤研究は最も必要な事柄で、將來をも顧みず危険極る石造建築物を流行の如く無闇に建てる事は、確實に地震の被害を大とするではあるまいか。然れども復興の原動力は財力である。財力無くしては如何なる理想の帝都をも建設する事は出来ない。然るに帝都の人で震災前以上の華美を装ふこの事を聞く。かゝる事が事實であつて市民が虚榮柔弱の人間であり、腐敗墮落の底に沈滞して居るとすれば、それは果して眞の意味に於ける復興と言ひ得ようか。物質的、外形的の復興よりは、精神的、内容的の復興は、眞の堅實なる帝都復興に缺く事の出来ない必要條件である。須らく我々國民たるものは、奢侈安逸を戒め、質朴剛健を以つて國力の挽回を務めなければならぬ。

### 現代の青年と意氣

第四學年 山 田 明

若人の胸に渦巻く、情熱の血汐は意氣なり。そ

る。病を得ては醫藥を求め、社會を作りては共存同榮を叫ぶ。彼の精神的或は肉体的勞働をなすも或る程度迄は自己保存の本能より來ると云ひ得る。積極的に自己の身心をより健全ならしめて、此の本能を満足せしめんとする慾望が、体育を發達せしめた主因である。故に此の本能に基く体育は眞面目であり、眞劍である。

競技の如きも体育の一部である以上、娛樂と云ふよりはむしろ必要缺くべからざるものである。決して遊び事ではない。故に苟くも競技をなす者は、眞面目に合理的に行ふべきである。要するに、体育は、健康を増進し以つて本能を満足せしむると共に、又精神的、肉体的、活動の基礎を構成するに必須なものである。

### 東方を指して

第五學年 三 島 文 平

國際間に信義が確立されず、力を本位とする外交が行はれる現代に於ては、時に一國が他の國家に對して、平然侮辱を加へる場合もある。併し、

の血湖即ち意氣の結晶は吾人青年なり。されば吾人に於て意氣無くんば安んぞ青年といふを得んや。諸子よ！試に左手にて波打つ胸を抑わつ、廣漠たる天壤間に於て一度沈思黙考せんか、必ずや諸子の胸底を深く深くわぐるものあらん。それは現代青年の發刺たる意氣の衰退せしことなり。實に彼等青年は日々意氣衰へ、徒に文明病に罹り、藝術宗教の神聖を叫ぶと共に、似而非藝術家、似而非宗教家となり、一步一步と情落の淵に進まんとしてあり。されども彼等は文明の美名の爲に如何なる點に歸着するやを知らず。憐むべきは現代の青年なり。凡そ意氣なき青年は自ら滅ぶ。故に青年の意氣は國家社會に影響する事甚だ大なり。されば愛する青年よ、汝は強き意氣もて己の甲冑となし、世の凡ゆる罪惡を打破し、尙進んで眞理の海に臨まれん事を祈る。

### 自己保存の本能と体育

第五學年 山 本 馨

人は自己を保存せんが爲めにあらゆる手段を取

不正義は永久に通るものではない。

その國に對して反感を懷き、怨恨を結ぶ國家は、逐次に増加し、遂に侮辱を加へた國家は、夫等に依つて峻烈な制裁を受けて倒れるのが、最後の運命である。蓋し獨逸はその好標本であらう。

吾人は、今獨逸の轍を踏んでゐる、某國を見出す。傲慢で、國際的訓練に缺けてゐることは、獨逸に過ぎてゐるのを見る。

我等は、今彼の侮辱に對して、恐を抱く必要は毫もない。今は只内容の充實を計ればよい。彼の蒔いた種は、何時か彼自身が刈らねばならぬ時が來るのである。

### 努力と運命

第五學年 中 塚 俊 二

人間の思慮を超越し、人間の方で解決の出來ない問題が起つた場合に、神に祈り佛に願つて、禍を轉じて幸福にしようと思ふのは、人間の弱点で仕方がない。しかし「神は自ら助くる者を助く」で、唯運命にばかり任せて、何等自ら努力せな

つたならば、神の力も佛の恵も、効果のないものである。自己の努力に依つて、自己の運命を開拓して行つてこそ、初めてそこに神佛の加護があるものである。棚にある牡丹餅も、それを食べるには自ら立つて之れを取らねばならぬと同様に、運命は天にあれど、其を開拓するものは各自の努力に待たなければならぬ。即ち人間一生の成敗は、單に運命の力のみではなく、努力の如何が、より大なる結果を齎らすことを知らねばならぬ。

### 吾人の抱負

第五學年 大谷正信

悠々たるかな天地。遼々たるかな古今。此間に生を受けたる吾人の抱負、豈狭小にして可ならんや。吾人は須らく未知の世界を開拓し、人類社會に一大寄與をなすを以て其の抱負すべきなり。蓋し太古に於て、希臘人は、己が文藝學術を世界諸國に傳播するを以て自ら任じ、埃及人は年々ナイル河汎溢後、田畑整理の必要より幾何學を發見せしは、吾人、歴史を繕きて既に知る所なり。又

世に於ける、獨逸及佛蘭西を見よ。即ち前者は自國の應用化學を以て社會に貢獻し、後者は新思潮及藝術を傳ふるを以て各使命としつゝあるにあらざるや。人生は短しといへども、事業は大なり。吾人豈に世界的の抱負を以て、大いに努力せざるべけんや。

### 妄に成功を求むるなかれ

第五學年 佐伯義治

近頃の青年は、よく成功〜と言つて無暗にあせつてゐるが、人生の成功なるものは、必ずしも其の願望の通りに行くものではない。何れもその人の備へた精力の、強弱大小に左右せられるものである。唯漫に成功を急いでも、人生は賭博のやうなものではない。所謂成功すべき素あつて成功し、發展すべき因あつて發展するものであるから、他人の幸運を羨やんだり、徒に僥倖を待つてみたり、左様な空な遣方では駄目である。眞の成功は必ず勤勉と熱誠とが、常に吾人の身の上に伴つてゐると言ふ事を忘れてはならぬのである。

### 將來の萩

第五學年 吉田勇

四峠内の合併に依り、大萩の基礎定まれり。然れどもこは寧ろ遲きの感あり。萩の地は歴史上の關係よりするも、新萩町の區域は、實質上既に萩なりき。峠内合併は一形式改革の如く思惟する者あるも、そは新しき大萩を作る基礎なり。今や正明市線は延長して萩に及べり。他の諸線も數年ならずして完備せば、交通の碍外に置れたる感ある萩町は、一躍して交通上の要路となり、尙日本海の荒波を防ぐ事を得ば、萩は日本海岸の良港となり、一衣帯水を隔つる朝鮮支那連結中心地たるべし。我國の大陸政策上、其の翼は當然民族を同じくする彼方の大陸に伸ばさざるべからず。せば、萩町が海陸共に有望なる地たることは明なり。されば將來の萩町は、此等の點に鑑み、民衆の自覺に依り、輿論の作る大萩町たらざるべからず。

### 質實剛健と國民野營團

第五學年 橋本士郎

貧弱なりし我國の、維新以來瞬時にして一等國に列し、其間幾多の大戦に勝ち、繁雜なる外交問題を解決せしは、そも何に依るか。質實剛健の氣、國民の胸裏に横溢したればなり。實に一國の盛衰は、國民元氣の消長に關する事大なりと云ふべし。我、今夏、國民野營團に加り、此等精神の養成には此舉に如く者無きことを痛感せり。炎天の下、六里の坂路を往復するに、約五貫の裝具武器を荷ひ、飲料とては一個の水筒あるのみ。三千尺の高原に於て、蕙の上に臥し、粗食を攝り、有益なる講演を聴き、壯烈なる演習を行ふ。實に絶好の擧なりき。今や太平洋の怒濤犬吠岬の巖頭を嘯み、西比利亞の寒風益々猛烈ならん。此の時に當りて、吾人此等の精神の愈々旺盛ならんことを欲す。而して之を養成せんには予の體驗せし國民野營に如くものあらしと思ふ。

## 成功と奮闘

第五學年 松浦 正

凡そ、人が奮闘舞臺たる此の世に生れ、驚天動地の大事業を成さんと欲せば、奮闘を第一要義とせざるべからず。若し、夫れ、奮闘する事なからんか。進歩なく、競争なく、社會の落伍者となり、所謂生くるも猶死せるが如くならん。之に反して、多くの競争者に打ち勝ち、優秀なる地位を得たる人は、奮闘に奮闘を續けし結果なり。尾張の中村の一農家の子に生れし秀吉が、天下の政權を掌握せしも、幾多の困難辛苦と奮闘せるが爲なり。若し奮闘せざらんか。光輝ある青史の頁に飾る事を得ざりしは明かなり。獨り秀吉に止らず、古來の英雄偉人が、名を竹帛に垂る、事を得しは、皆奮闘の賜なり。斯の如く、奮闘は成功の最高手段なり。元氣旺盛なる我等は、不撓不屈斃れて後己むの精神を以て奮闘せば、何ぞ事の成らざる理あらんや。

## 青年の元氣

第五學年 田中 松一

國家興亡の因は、青年元氣の盛衰に存す。潑刺たる雄々しき元氣の發する所は、金石をも溶解すべし。彼の明治維新の大業も、萩の天地に發したる青年志士の元氣の結果に外ならじ。試に活眼を開きて、社會の状態を見よ。今や我が國は、未曾有の大震災によつて、三大強國の位置をも失し、入超將に入億圓ならん。然るに國民未だ自覺せず。輕佻の風、浮華の習、漸く生じ來らんとす。國家の前途、眞に憂慮すべきものあり。

元氣ある青年よ。起て。起ちて而して、質實剛健の風を興し、進んで世局匡救の負擔を分かち、以て聖旨に對揚すべきなり。嗚呼、國家の興亡は、青年元氣の盛衰に關す。努めざるべけんや。

## 慾望

第五學年 河邊 芳太郎

人類は、慾望有りてこそ生存し得るのである。

殊に慾望は、我等青年の生命とも言ふべきものである。慾望は支配すべきで、決して支配せらるべきものではない。過度に發育し冗枝を生じた場合は英斷もて之を切取り、又萎縮したら、營養物を與へて、見事な果實を得べく努力すべきである。古來の英雄豪傑で、大なる慾望を持つて居りながら、之に囚へられて、破滅を招いたものが随分ある。ナポレオンや豊臣秀吉の如きはこれである。之に反して、徳川家康の如きは、過大の慾望を制して成功したものである。彼にても海外雄飛の如き大慾望は持つて居た。併し之を制する理性があった。故に三百年間己が子孫は榮わたりたではないか。

慾望は大に持て。而して之を制する人となれ。

## 運命の開拓

第五學年 三元 堯

世には金殿玉樓に呱呱の聲を上げべく運命づけらるゝ者もあり、又一枚の檻樓すら身に纏ひ難く運命づけらるゝ者もあり。後者果して其境に満足

すべきか。否後者は必ず運命を動かさん事を企つべし。是即ち運命開拓の原動力なり。生活上運命として諦むる事も、或程度までは必要なる事ならん。然れども、徒らに運命を過信する者有りとせば如何。其人には必ずや、努力、發展、向上の精神無からん。

向上發展無き人生に、幾何の價値をか認め得べき。何等生存の意義無きに非ずや。

是の如く論及せば、我々生存上缺ぐべからざる者は運命の開拓なり。運命の開拓、そこに人生の努力あり。眞意義あり。發展向上の一道亦そこに存するなり。

## 現代青年論

第五學年 田北 泰

今や、我が美しき三千年の歴史は、某國に依て凌辱せられた。眞に國家を愛し、正義を尙ぶ青年の、當に大覺醒すべき秋である。然るに或る一部の青年は、徒に自由自由と呼び、放逸に流れ、現代青年と自ら稱し、得意然として居る。斯くして

いかでか、帝國の將來を雙肩に擔ひ得られよう。國家の盛衰は、一に其青年の覺悟如何に依ると云つても過言ではない。この九鼎大呂よりも重大なる責務を、如何にして果し得るか。唯、潑刺たる意氣と、純潔の精神とを修養するにあるのみである。自由放肆を去り、着實に且專心に學に力むべきである。大正の復興は、吾人青年の雙肩に掛るべきを自覺し、徒に惡魔の宣傳に迷はず、偏狹なる舊思想を棄て、平和と人道とを尙愛する大國民の心を以て、復興に向つて勇往邁進すべきである。



### 防長教育會貸費生

大正十三年度防長教育會貸費生にして本校出身者左の如し。

京大經濟科	河村宣介
五高哲學科	石津照璽
東大機械科	藤村六雄
京大哲學科	柴田美稻
六高文乙	内山誠
山口高商	來島勝男
神戸高工電氣	津田嚴男
商大専門部	伊藤貞一

### 防長教育會貸費生

大正十三年度、防長教育會貸費生人員表	
大學	二五
高等學校	二五
實專高師	一三
計	六三

## 英文欄

### “BON - ODORI”

By Makoto Nagami, 3:4.

There have been two kinds of the ‘Bon’ festival dance in our village since the olden times. One is an ordinary dance like that of any other part of the country, but the other, I think, is one peculiar to our village. This is the origin of the ‘Bon-odori’ which was told me by my parents.

About one hundred years ago a terrible epidemic like small pox spread all over the village, and a great number of the villagers fell victims to it one after another. So the wise men of the village decided to make an invocation to their gods. They, therefore, assembled all the inhabitants in the grounds of the village-shrine. Then they took an oath to the gods, that they should dedicate a dance to the gods on the All Souls’

Day every year until three remained but one tree on the mountains of the village.

Since the villagers have never broken their oath, and of course, the village has been kept clear of all epidemics. So every year on the fixed day a number of men and children take part in this ‘Bon-odori’. They meet in the premises of the shrine, and the latter take their round, small bells, and the former their drums, to which they dance. The children have on their backs hoops made of bamboo, to which many pieces of paper of various colours are tied. Then the men begin to beat their drums and the children dance and leap around them ringing their bells. When the ‘Bon-odori’ comes to an end the crowd of people contend for the pieces of paper, which are believed that any one of this village who wears the paper around his neck will recover from his illness. At the time when I was a primary school boy at my native place I used to join this dancing and enjoy myself.

## THE OBLIGATION OF THE JAPANESE YOUTH

By Kanessaburo Matsume. 4:3.

In consequence of the European War, Japan became a creditor nation at one bound and new riches cropped up here and there, with the result that people at large have been led to the evil manners of luxury, indolence, and fickleness, the idea of the wrong democracy was prevalent with great force.

As the War had scarcely come to an end when those enterprising men became bankrupt, the labour question, the question of unemployment, and agrarian problems have come to the front in rapid succession. To make the matter worse, the great quake and fire disaster took place suddenly in the Kanto districts with Tokyo as its centre, which greatly affected Japan's national wealth and caused the popular sentiments already endangered by the War to go on

from bad to worse. Such being the case, who should be responsible for the onerous task of saving our country from such a regrettable state of things? Of course, we young men must take the duties upon ourselves. In accomplishing this mission of ours we must endeavour to retrieve the lost virtues of diligence and assiduity; give up the extravagant style of living, and encourage the habit of thrift and saving among the people, and thus enrich our country to meet the demands of the times.

As for the "thought" question, we should investigate the substance of any thought and not make a mistake in the choice, while we ought to have confidence and self-respect, which can keep up and exalt the proper and worthy thoughts of the Yamato race. Japan is favoured with an invaluable spirit of her own, which makes her a glorious and powerful country, where people are very proud of the line of Emperors unbroken for age eternal.

For the purpose of improving the present griev-

ous condition of Japan, we young men must take the lead in the work of reconstruction of our Empire and urge our fellow-countrymen to their self-awakening. Such is our duty of the moment.

## THE JAPANESE SPIRIT

By Yoshio Tamura, 4:1.

As England has the English spirit and America the American spirit, so Japan has the Japanese spirit, and even our primary school children apprehend what the Japanese spirit is. Loyalty and patriotism are the exhibition of this spirit, and the invincible army of Japan is full of this spirit, so the most trained soldiers of any other country cannot stand against our army, and so other nations have come to be afraid of us, and say Japan is the most wonderful empire.

But, to our regret, this Japanese spirit has begun to decline little by little of late years, and

we can see the tendency that foreign people are going to despise us. This means that the Japanese spirit is rusted away and has lost its bright lustre.

The prices of daily necessities have risen out of reason and the excess of imports increases more and more, which proves that the Japanese are very idle and luxurious, such an idle people could not be blessed with peace and prosperity.

If such a state of things as this should last long, the Japanese Empire, in which the Imperial line has continued for thousands of years without interruption, and there is not an equal in the world, would be destroyed by any other nation.

So we young people, first of all, must encourage industry and try not to be luxurious, and exert ourselves not only to sustain but also to exalt the Japanese spirit.

Let us cast our eyes over the world, and we can see that the European as well as American nations are extremely thrifty and industrious, as a result of



the great European War, and they have a fervent idea of bringing about the prosperity of their respective country. While in Japan in the Orient, owing to the little profit made in the time of war, very indolent and luxurious habits have begun to be prevailing and thanks to it, what was gained in the time of war has been all lost, and the Government has been compelled to raise big foreign loans, besides, last September the great earthquake took place in Kanto and the country suffered a great loss. But in another point of view, this national calamity may be an alarm bell for the sleeping Japanese.

At this time of need we must work hard to regain the Japanese spirit which is doomed to rust away.

If such a state like this is left alone, a very different aspect of relations between Japan and foreign countries would come off, then our glorious empire might be trampled under their feet. To free ourselves from such a disgrace it is our duty to improve this deplorable condition of the country.

Grandson like the apple of her eye, implored the doctor with tears to allow her to nurse the poor little thing at home instead of sending him to hospital. "No" was the blunt reply. It sounded to me as if he were a devil.

My brother's case being of an infectious nature, I had to stay away from school the next morning. I felt very sad. My legs carried me towards the hospital very slowly. I was quite lost in thinking of my little brother suffering on his sick-bed in the hospital. It was approached from our house by a long winding path under the interlacing branches of orange trees.

The old hospital was surrounded with the pine trees, through which the glimpses could be caught of the broad, cool verandah that ran on each side of the building. Silence reigned over the place and not a sound was to be heard.

I never wished to see my mother's pale face, for she was attending on her sick child there, and I was afraid of asking about the patient's condition. My eyes

So for the sake of our Emperor and our country, we must make great effort as much as we can, bearing in mind the motto of "simplicity, and sturdiness", on which is based the principle of education of our school.

### MY BROTHER'S DEATH

By Otoguma Kishi, 4: 2.

One day in the latter part of July, my beloved little brother of three years of age played merrily during the day, but towards the evening suddenly began to cry loudly. Little did our parents dream that he was attacked with a terrible malady. As it became dark, his cries got dreadful more and more. He grew so feverish that his face glowed redhot.

At last the doctor was sent for. When he began to examine his patient, we sat around the doctor with breathless interest to listen to him. He coolly declared that my poor brother had to be sent to the isolation hospital. My grandmother, who kept her little

were filled with tears from which I could not refrain. I did not want my sad look to be seen by my mother, because it would grieve her more. Nor did I wish to see mother in great sorrow and poor brother in pains. After all I decided to retrace my steps.

After three days my brother passed away. At the sad news I lost my senses, and I did not know what happened while the funeral ceremony was held.

Before long a little tomb was raised at the foot of the hill near our abode to the memory of my little brother, who was born in this fleeting world only to experience the afflictions of life.

Ten years have just elapsed since my younger brother's death, but I have never passed the cemetery without sitting down and weeping in front of the little tomb, nor shall I forever.

### WILL IS EVERYTHING

5: 1 Masanobu Otani.

Is there any who does not wish to do something

and to be somebody in the world? Almost every one prays to gods that he may succeed. But for a few who attain their objects, there are hundreds who fail losing interest in life. Then, will a man's aim be a dream or a vision after all? No, the failures lack effort armed with a strong will. The iron will is the most valuable virtue that can be got only by struggling when things are difficult to be done. Rank and money can never buy this treasure. But once got, it affords us to get any thing we wish to have in the world, or accomplish any task, however hard it may be. On the contrary, without a strong will we can achieve nothing, because the weakminded will give up their enterprise on their half way.

What is a strong will? It is a force of venturing to do any hard task. Such virtues as diligence, patience, practice, continuance and self-control are nothing but its actual sides. But for these virtues, a man's life would end in a failure.

"The root of accomplishing a thing is an iron

will", says an author with authority in his work. This remark teaches us how we should foster our strong will. The story of Robert Bruce give us a vivid and precious example in the line of the will. Had he not learned to have a strong will, he might have fallen ill or died of grief when his fate was trembling in the balance.

In this era of Taisho, those who have this iron will are only to be honoured and respected, for so long as the Japanese possess this virtue, our empire will be the most powerful country in the world.

### AN ASCENT OF MT. ISHIMAKI

5:2 Saburo Takiguchi.

One summer morning he got up very early with an intention of climbing Mt. Ishimaki, which stood on the northern skirts of his native province. He had on a jacket, boots, and gaiters, and a stick in hand. Across a stream washing the foot of the mountain, he proceeded to climb his way upwards. After a few minutes'

at the top of Ishimaki-Yama.

What a magnificent view it commands! In front the mountain range of Chugoku silently runs, now high and now low, never showing its termination. In the rear, the great ocean lies brilliant reflecting on its mirrorlike surface the strong light of the summer sun.

But the ocean tenderly embraces the land as if fondling. How sublime and peaceful!

He was reminded of Taira-no-Makado, who once had made an ascent to Mt. Hiei and made up his mind to conquer the whole country. He was now able to understand well this hero's way of thinking. Being inspired by the transcendency of the scenery, he felt himself enlightened and becoming greater. He was entirely absorbed in thinking, so that he could not tell how much time he had spent there. A gust of sudden wind awoke him from his meditation. He saw threatening black clouds here and there in the western sky, momentarily growing large in size and speed. He descended the mountain and hurried home.

ascending he found a Buddhist temple, the gate of which was followed by an avenue of tall straight-stemmed cypresses that were the noblest in appearance he had ever seen. Behind the temple a forest of the same trees expanded towards the ridge. The path in the darkened forest became steeper and steeper and his foot-steps felt heavier and heavier, he perspiring almost all over the body.

Coming out of the forest he found himself in a clear open space which was about twenty feet square, where the path ended, tall trees and thick bushes surrounded him. He was at a loss for a while, but at last decisively pushed into the bush on his right hand. While he struggled his way through bushes about an hour, a deep valley suddenly presented itself under his feet. No trees were there, but green fresh grasses covering the space and up towards the hills behind. His destination the summit was now visible, but it was far away in a high place. Step by step, slowly and steadily, carried him higher and higher and at last he stood

## A SCENE IN THE TRAIN

5:2 Takao Takeuchi.

"Take good care of yourselves!", said a young mother from the outside to a boy and a girl in the train, who stood near my seat. There was not a seat left in the car, but the girl managed to seat herself. The boy was obliged to keep standing. He vaguely cast his eyes upon the young men who had taken all the seats of the car, and then upon his mother on the platform. She was anxiously looking at her pets.

At last the train started leaving the screaming of its steam-whistle and their mother together behind. The tender figure standing lonely and looking with anxiety after the car did not leave my brain for long.

The girl, who was dressed in smart foreign clothes, perhaps seven or eight years of age, was a blessed daughter with apple-like cheeks, so rosy and lovely.

The boy-her elder brother, about eleven or twelve, wore a Japanese dress and a broad-brimmed straw-hat that set the boy off to advantage. The girl, leaning

against the chair just opposite to mine, raised her large eyes and saw her silent brother, who returned a glance to her, but spoke nothing. And after a while reservedly he turned his charming, attractive face to me and smiled a sweet smile. I could not help making a seat for him.

"Where are you going?" I asked. "To Taisha," answered he in a low voice. At times they looked out of the window towards the distant mountains, as if rejoicing at the approach of their destination. At last there came in sight the main entrance of the great shrine, magnificent and sublime, glaring in the glorious summer sunset.

## LABOUR

5:3 Teisuke Ake.

"Labour is sacred," this is, I am told, one of the American spirits and I think that is a maxim holding everlasting truth.

Now that we live in this world as a member of the society, we must do something to perform our duty.

do without the other. And thus they both are standing on a level in this society. They should be respected on equal terms.

There is one sort of people who are to blame most. They are those who waste their time without doing anything though in robust health, or living on the wealth left by their ancestors. They are laçilli, as it were, injuring the system of the human beings. The more they increase, the more uneasy becomes the harmonious states of the world. It is a matter of regret that such people, many in number, are found in a certain class of the nation.

This fact adds to our duty one more burden: we must endeavour to persuade them to abolish their way of living and do something in their possible way.

At the conclusion of my dissertation, let me again declare that any labour which is necessary for the existence of mankind, is sacred and bears its own dignity.

Despise not labour, appreciate labour, respect labour. We do not live to eat, but eat to live—live to work for the realization of a nobler generation.

Moreover, it is due to our ancestors' labour that we are enjoying our lives as the lord of the creation, and so we are under obligation not only to add something to their great work, but also to hand down ours to posterity. Then what is the method of carrying out this part of ours? Labour is the one and only way and there is none but that.

By labour I mean here mental labour as well as muscular. Consequently labourers are those who labour mentally or physically contributing something to the culture of mankind. In this sense, officers and officials, scholars and authors, manufacturers and merchants, even ministers and premiers must be labourers.

It shows, in my opinion, irrational development that special class has a hold upon the social organization: it is not desirable the capitalists can do whatever favourable to their own interests, but still less desirable the working class (I mean in an ordinary sense) has too much influence as is seen now in Russia. These two are each doing its own part in its line and one can not



雁のおこづれ

廣島高師より

同校 香川 義 信

校友會から本校の模様を知らせよとの御註文を受けましたから、思ひ出すまゝ、を秃筆に托して書くことに致しました。

廣島驛から宇品又は御幸橋行き電車に乗りますと、廿分位で高師前といふ停留所に着きます。その直前になんとか落ち付きのあるライトレッドの校舎が見えます。

これが古い歴史を有して居る私等の學府です。校舎こそ新しくないが、學校の設備は遺憾なく整つて、特に最も重要な圖書館と、理科的設備は大いに優れて居ます。又教授もこれに劣らず、大概洋行歸りで、帝大教授の資格者も少くありませんから、思ふ儘にその専門に進んで研究することが出来ます。

校友會事業としては、講演、陸上競技、野球、庭球、蹴球、短艇、水泳、劍道、柔道、弓術等の諸部があり、又此れを離れて生徒自身が教師と戴いて種々の方面に渡つて事業を起してゐます。例へば丁未音楽會、軍事研究團、乘馬俱樂部、非歌人會、繪畫同好會、童謡會等があります。

入學後一年は普通寮生活を送ることになつてゐます。寮は生徒の自治制で、上級生を選んで總務にし、寮各般の事務を處理して居ます。室は六人を收容し、一人宛机と椅子とを附與してあります。又娛樂機關も完備してあります。其の外雜貨品、學用品、菓子、料理品等の賣店や理髮店も校内にあります。市價より安く、便利で經濟的であります。

入學試験に就いては規則書をお求めになれば解りますから、それ以外に感じたことを少し書き添へてをきます。勿論中學卒業程度であります。他校のやうな無理に六ヶ敷の問題は出ないやうです、その代りに數學等は時間の割に多くの問題が提出されま

す。それかといつて至つて平易な、ありふれた問題でもません。兎に角眞面目に教科書を勉強しておけば充分です。それから試験の及落は勿論、総点数の如何に依りますが、特に志望學科に必要な課目をよくやつておく必要があります。例へば文科一部(國漢科)志望者は、國漢の採点が他の何れの課目より多いからであります。要するに近頃教育の普及が發達して、學校の増設に伴つて、益々中等教師の必要を感じるやうになりました。入學試験に於て他校に比し、入學率の高いのもそれを知る一端になりましょう。又他校に比し、最も僅少な學費で充分研究が出来、更に進んで帝大に入る受験資格がありますから、御希望の方は勿論、家庭に事情ありて、他校に入學の出来ぬ御方は進んで御入學せられんことを希望致します。

東京商大より

同校 弘 中 勝

入學後日尙淺きが故に、學校の内情もよく分りませんので、充分なる事を御知らせする事が出来

ません。只私の知り得た範圍で、少し御話致します。昨年の大震災で、校舎は圖書館と化學教室を除いたのみで、他は凡べて灰燼に歸しました。今はバラック校舎でやつてゐます。震災後一ツ橋には本科と専門部が残つて、豫科は郊外の石神井といふ處に移りました。然し早晚本科専門部も郊外に移るといふ事です。豫科のある所は少し不便な處ですが、都の雜沓と塵埃を離れ、武蔵野の緑の草樹の間に在つて、遙に富士の雄姿を眺める事が出来ます。一橋の方には運動場と見るべきものはありませんが、石神井には廣い運動場を有し、庭球、野球、ホッケー、ラグビー、A式蹴球、競技、バスケット等の設備があります。此以外に運動部にはボート部があります。此の外雑誌部、音楽部、馬術部、辯論部、山岳部、弓、柔、劍道部等があります。又一橋新聞なるものを發刊して、各科の連絡をとつて居ます。最後に私は諸君の中で若し商大に志す方で、將來商業方面に立たんとする者は、商學専門部に御入學なさる事を御勧め致します。商學専門部の方で實際問題に多く當る様で

す。然し之は私の愚見に過ぎませんから、誤つて居たら御許し下さい。

### 同志社大學より

全校 岩田芳夫

再び諸君の爲に本紙に於て秃筆を動かす事を無上の光榮とせねばなりません。入學試験なり卒業生の事に關しましては、極めて斷片的ではありませんが、昨年の誌上に書きましたので、本年は學校の模様を書きまして聊か御參考に供したいと思ひます。

何だか高商と言ひますと、同志社大學とは全く別箇のものかとも考へられますが、矢張り同じ構内にあつて校舎は全然別ですが、同じく基督教主義に依つて教養されてゐます。吾高商部は専門學校令に依るものですから、學友會雜誌等も大學部とは全然別に發行し、又運動各部も殆んど全部獨立なし、着々好成绩を擧げてゐます。基督教に歸依するか否かは全く自由ですが、同志社生徒たる爲には、基督教の何たるか位は研究しておく可

きです。只今は創立日尙淺く、設備も未だ不完全ですが、學風は全同志社を通じて非常に眞摯です。授業時間は一年の中學出身者は三十一時間、同じく商業出身者が三十時間、二年は三十五時間、三年が三十六時間で可成り鍛わられます。教師の總べてが吾々を紳士として取扱ひます故に、非常にその間が圓滿です。以上は甚だ放漫なものです。幾らか御參考になれば幸甚です。終に諸君の御健康と御勉強を切に祈ります。

### 商船學校より

全校 守田吉光  
石丸孝一  
堀 斌

其昔花の大江戸の浮名を流した隅田川が渺茫たる東京灣に注ぐ所、バラックながらも、帝都の咽喉を扼して氣高くも男々しく聳ゆるは、そもいと頼しき我が商船學校である。

其處では世の羈絆を脱して、遠く太平洋より吹き來る潮風に、雄々しくも海の子として育まれつ

因に十二月の春季募集の際は、御校其他お問ひ合せの方に必らず入學案内を送ります。

### 神戸高工より

全校 津田嚴男

、元氣溢る、四百の若人が、未來の大船長、大機關長を夢みつゝ、青春の血の高鳴りを感じてゐるのだ。海を受する若き友よ、月清き海上にて遙に母國の空を仰ぎつゝ、朝に氷山浮ぶ北極の海に遠く吠ゆる白熊の聲を聞く時。夕に波靜なる南洋の椰子の葉蔭に、土人の吹く角笛のメロデーを愛する時、悠久なる自然の聲に我がネブチューンの胸に抱かれて、限りなき思ひを辿り得るは、我が商船學校の學生にのみ授けられたる賜ではあるまいか。

一國の文明は海上より來る。我々若き海人は、此の文明開拓の先驅者となるのだ。皇國を愛するの士よ。己の頑丈なる體軀、己の強固なる意志を誇る者よ。海の讚美者となつは如何。

附言

本校に對し少しでも入りたいと云ふ希望をお持ちの方で、學校の様子が委しく知りたいと思ひの方があれば、個人的に三名の中、誰かの名宛に學校内としてお問ひ合せ下されば、出來得る限り委しくお知らせします。

入學後四月の終りの事であつた。「皆さんの銅線のレジスタンスを計算なさい」と洋紙を配布してくれた。後から聞けば之が試験ださうで、試験を物々しく豫告しないで、不意打ちをくらはずのが校長さんの主義ださうな。その上、一ヶ月一回もあるのだから、中々油断は出來ず、従つて教室でレクチャーもよく聞き、豫習復習も非常に眞面目でやるので、勉強のエフィエンスは至つてよい。自然に生徒は自覺して來る。さて我高工の踏つてゐる土地に就いて、延元の昔に溯つて見るに、此處は楠氏に取つて非常な縁のある所で、此等の事が暗々裡に我等に及ぼす影響は甚大なものである。學校内にはイングリッシュ、スピーキング、ソサイエティも、乗馬クラブも、ハモニカやバイオリン部もあつて、何れへでも入られる。(乗馬ク

ラブは缺員がなければ入られぬ。野球や庭球も無論で、汽關室の側には、プールの設備もあり、夏が来ると欲するまゝに飛び込まれる。二學期の始、此處で關西の中等學校の競泳大會が行はれた。神戸は御承知の如く、商工業の盛な點に於て、大阪に次ぐ所、先に高商の東に出現するや、非常な發展をなし、今や又西に當り、我高工は三階建の雄姿を高く現はした。今に世界に雄飛する時は来る。來春初めて卒業生を出しますが、此處を見込んで、我校内をくゞらむと希望するもの至つて多く、受験員も全國第一(高工として)に位してゐる。名に負ふ須磨浦、明石を近く控へ、前に聳ゆる鷹取山の峯よりも高き理想もて、あの眞白なテムニ―にかゝるアンテナの基に、ハンマーをふり、モーターを動かす快さを想像してくれ給へ。私は諸君の一人でも多數が我校目がけて突進あらん事を切望する。

陸士より

同校 池田謙三

からではありませう。彼の軍縮は日露戰役の際臨時に過剰に養成した將校を退役せしめたるに過ぎない事を了解あらんことを希望致します。

廣島高校より

同校 杉丙三

我々は今年新設されたばかりで、木で云へば今萌の出たばかりの芽であります。此の新しい學校に最初に席を置いた私共にとつては、多少なりとも之を御紹介すべき務があると思ひます。

木の芽に伸びんとする強い生命力があると同じく、學校にも充實し發展して行かうとする意氣が溢れて居ります。総てが創造であります。廣い所に新築の校舎のみ立つて居た時は、何の意味も力もありませんでした。此の四月に二百の生徒が一度集るやそこに一つの強い力が生じて來ました。それは各自の自覺と決心による、造り出さんとする熱烈な意志の力の團結して現れたものだと思ひます。理想に進まんとする希望と創造せんとする意志とは、等しく我校生徒の胸に満ちて居

本校は赤坂離宮の近くにある市ヶ谷台にあります。此の地は舊尾州侯の邸宅のあつた所で、土地高燥老樹鬱蒼として奥深く、帝都の汚塵を離れた尙武の別世界であります。國民の楨幹たるべき將校を志望せられる者は、第一に身体強健で、飽くまで強い意志の持主であらねばなりません。ですから自分は軍人に適するや否やと云ふことを冷靜に考へられた上受験する、が良いと思ひます。入校して二三年も経て退校せねばならぬことも屢々です、唯、パンを求むる爲に軍人になると、其曉に於て屹度人格的價値を失ひます。校内生活は軍隊生活を少し緩和したもので、土曜日には何時も郊外に陣中勤務に行き、夜間にわたることもあります。其の外には一切行軍といふものはありません。各學年毎に三個中隊に分れ、全國より優秀な將校(中、太尉)を選抜して生徒を訓練します。入學試験には數學と英語をやれば充分であります。古來は軍人を輩出した地にも拘らず、近來火の消いた様に志願者の激減したのは實に寒心に堪へないのであります。多分過般の軍縮の誤られた噂

る所であります。日尙淺く別に特色はありません、只この創造自治の意氣のみが今我校の生命であります。勿論そこには不便があり、幾多の困難があります。併しそれだけ我々青年にとつて愉快な事ではありませんか。而して総てが自由で自治であります。いまはしい因襲に束縛されたり、醜い舊例にひきづられたりすることはありません。併し自由であり、自治であるだけ非常な責任が要る譯です。だから生徒も先生も皆自己の責任を自覺して非常に眞面目であります。

學校を擁する廣島の土地も決して悪くありません。廣島は水の都會であり、靜かな都會です。そして學校は三篠川が海に入る所、宇品に近い廣々とした所に在ります。前方は美しい繪の様な瀬戸内海の佳景が開けて居ます。この還境の中に學んで行くのは恵まれたことと思ひます。運動部及其他各方面に今や段々活躍せんとして來ました。これには非常な困難努力を経て來ましたが、なほなすべきことは之からです。どうか自ら創造し建設せんとする意氣ある人は來て下さ

い。共々集つて立派な校風を作り、美しく堅固な文化の樓を築かねばなりませんから。今秋中出で福田幹雄氏と私と二人居ります。私共二人は、新しい道を進まんとする人々が、諸君の中から多數來られるのを待つて居ります。

### 一 高 より

同 校 横 山 幸 生

赫灼たる歴史と光榮とに彩られた我校は、その本領を皆寄宿制度に置く。八寮に籠る一千の校友はその誇を剛健と素朴、野趣と奔放とに保つ。而して是等は向陵をして天下の覇たらしめた特質であり、氣魄である。混濁の世に卓立し、然も時世の木鐸を以つて自任するもの、之彌生ヶ岡に蟠居する健兒だ。昨秋曠古の大震災は、向陵をも席捲した、我正門に對立して寮生渴仰の的であつた時計台、並に之を擁する本館は(僕は知らないが)龜裂を生じて、可惜爆破の已むなきに至つた。今殘礎空しき本館の雄姿を想見するのみである。數年後に當校は駒場へ移轉して、新向陵を建設する筈

### 六 高 より

同 校 青 木 弘  
内 山 誠

拜啓 秋色既に濃く、燈火親しむべき頃と相成り候處、諸兄には益々御奮勵の事と存じ候。この時に際し懐かしき母校の空を思ひつゝ、當校の近況御通知申し上げ候。

當校は明治三十三年の創立にて、校舎は煉瓦造りにも鐵筋コンクリートにも無之候へども、神祕に富める操山を後に控へ、深緑變りなき松並木の奥に聳れ、青年の心身訓育場として、將又學びの庭としてふさはしき感致し候。校内には運動の方面は勿論文學、美術、科學、宗教等あらゆる方面の會有之、我々の個性を發揮せしむるに努め居候。先生、生徒の間も殊に親しく、校内の設備もよく整ひ居り候。

現在萩中卒業生は、寺田、伊藤、山中、三浦の四先輩に、我々二人都合六人に御座候。受験につきては、別にお知らせの程は無之候へど

である。我等は過渡期にある。故に美しき傳統の擁護てふ重任を果さねばならぬ。

向ヶ岡の籠城は來るべき社會の奮闘の前提である。而して夢の如き生活、巍然たる自治寮、それが如何に愛着と追懐とをそゝるだらう。現在こゝには僕一人だ。孤劍突撃といふ状態だ。懐しい諸君の來り應援せられんことを切望する。我校の入學試験は競争激烈ですが、辟易しないで征服して下さい。教科書と参考書一冊(之は判断され、ば不用な科目があるかも知れぬ)を咀嚼すれば、大丈夫だと思ひます。問題は一見變挺子であつても組織的に解けば、案外容易でせう。勇氣と大膽とを以て一高を突破して下さい。

武香陵頭秋月高く懸れば、想は此の媒介物に依つて直ちに故山に馳せて行く。恰も母校山口に於ける大勝を聞いて喜欣雀躍、郷里に對する思慕は彌々深まる。さらば諸君の御頑健と御勇闘とを祈つて擲筆します。

も、一に數學、二に英語、暗記物の順にて、數學の問題は數はたとへ少なくとも、正確に、暗記物は要點のみ簡單に、記する事必要かと存じ候。英語は單語を譯すよりは、全文の意味を取る事肝要にて、本校にては往々他校に見るが如き「こんな語を知らぬ様では駄目」だどて點を殆んど與へぬが如き事は無之候。

受験者の數は毎年少く、來年も少からんと存じ居り候。餘り志願者數の多きにより驚く事は無之候はん。流れ清き旭川に程近く、綠したたる秀山の靈氣に育てられ、或は一葉の端艇を操りて、遠く難波に、四國に遠漕し、或は娛樂の館にクラス會を催し、或は六稜寮歌の調を後樂園の下に漂す。親しき六稜の學びの庭に御入學あらん事を望み居候若し校内の事情細く御知りになりたき方にはいづつにも御問合せ被下度候。

### 五 高 より

同 校 野 村 久 一

森の都、萩をそのまゝ大きくした様な町、之が

私共の一番初めの、而かも最も氣持よく感じた印象でした。之は學校が、市の中心を離れておる故もあるでせうが、幾百年かの昔より、城下の地として生れ、工業地としてよりも學問の中心地として、商業地としてよりも政治の中心地として、育まれ、純朴な氣に養はれて來た点が、萩と全く同じであるからだと思ひます。然し其の半面に於て維新の初、長崎と同時に、他に率先して、歐洲の文化を研究した地である云ふ事を忘れてはなりません。兎に角、私共は、第二の萩に來た様な氣持で、然かも幾多の先輩が、残して行つた立派な歴史と、美しい同情の下に樂しく落着いて勉強の出来る事を、感謝しております。何處よりも恵みの深い南の國、美しい歴史に飾らるゝ龍南の地、其處には、紅の血にもゆる一千の青年が、阿蘇の偉大を、其の意氣の象徴として、樂しく愉快に學んでおります。現在此の集ひの中に、私共萩中の薰陶を受けた者が十五名おります。之を學年別に記せば左の通りです。

三年生、吉武惠一、上野玉市、篠原智雄、竹内

リストかも知れない。然し印度のあの深遠な哲學もかうした自然に對する驚異の眼に初り朽ち得ない偉大な藝術もかうして生れて居る。東光寺の山麓から何時も見下して居た松陰の胸には確に何物か宿つて居たに違ない。

人の湖に揉れ湖と共に流れ行くあはれな者よ、吾々はあまりに賢くあまりに智慧があり過ぎる。小さい小供が小供なるが故に解き得る問題を大人なるが故に解き得ない皮肉なパラドックスを畫いている。

懐しい萩中の皆さん!!私は今何のために何を書いているか解らない。「學校の有様を」と云ふ依頼に對してこんなつまらない事を書き流して居る。然し如何に自分の學校を美しく書き立て、も入つて見れば直ちに解る。そんな虚偽な言葉に依つて重大な皆さんの第一歩を誤らせたくない。

がうして書いて居る間にも過去の印象が段々鮮やかな追憶となつて私の胸に顯れて來る。こんもりと繁つた志都岐の山を如何に深い暗い幽鬱な嚴肅さを以つて眺めた事か。その下に學び得た吾々は確に幸福であつた筈だ。「自然は人間を産む」。これは確に眞理であらねばならない。

私か今中學校の生活を回顧すると同じく將に龍南を去らんとするに當り私の胸深く残り得るものは何か。それは同じく自然だ

忠雄

二年生 井町勇、藤田昇、下村定儀、岸隆吉、鈴木勳、大山殿

一年生 益田致義、益田篤、田坂遼次、倉重達郎、野村久一

日は西の方、金峯山に懸つて、阿蘇の雲煙を紅に染める頃、長い長い影を白川の面に漂はせて、遠く母校の空を望む時、懐きの情に堪へず、ひたすら、かうした剛氣朴訥な雰圍氣と、厚い厚い同情の下に、學ばんとする同志の、益多からん事を希つております。

五 高 より

同校 吉武 惠 市

忽ち暮れて往く秋の黄昏に下宿の窓に凭たれてぼかんと郊外を眺めて居る時、あたりは段々と薄いで華かな空の姿を消して了ふ。そしてぼくと煙つた森の都から三つ四つ二の淡い燈が目に残つて來る。

自然の變化をかうしてぼつと靜視した時何時も感傷的な氣分に充たされて何らか考へたくなる。それはつまらないセンチメンタ

叫ばなければならぬ。雄大な男性美のシンボル阿蘇を負ふ熊本、そしてぢみな滋味を持つ緑に覆はれた森の都。此等を想ふ時に私は何となく嘗ては水火をも辭せなかつた血と涙を一げい胸に秘めた英雄の面影を見出すには居られない。

五高龍南はかうした滋味の中にはぐくまれて居る。素直に剛毅に水納にそして眞面目に靜に眞理を求めんする者のみ意義ある所である。何等美しい飾りもあやも持たない。従つて存在せんとする者には適しないかも知れん、然し眞に生きんする者は確に何物かを獲み得るであらう。

三 高 より

同校 木原 秀 雄

洛東神樂丘の古びた水色の校舎で、今此拙き筆を運ばせてゐます。吉田山の麓から同じあの懐かしい志都岐山の麓で、日々、勉強に、運動に餘念なき諸君に、此神樂生活の一斑を御知らせするさいふこは、ごんごんに懐かしい故郷の追憶を馳らすことにてせう。(中略)

本校の學科は六十点以下が注意点で、五十点代なれば、全科目の三分の一までは、職員會議に乗らないのです。文科で落第するやうなことは、病氣の外餘りないやうですが、理科の乙などには随分あるやうです。學年の初に缺員がある場合には、試験の上で轉科、轉類が出來ます。ですから理科に入つた人が、自分の才能は理科に適せぬと認められた場合には、文科に轉することが出来るのです。



教授には、私の知つてゐる文科の一部でも、獨語の片山、林、佛語の折竹、英語の安藤、矢野、國文の阪倉、歴史の那波、中村の諸教授があり、其他河田、太宰の二講師などがあります。いづれも人格者で錚々たる學者達ばかりです。これ等の人々の、蘊奥を極めたる講義の外に、時々國家に關しての、或は社會問題に關しての卓論や、暇遊學談などは、どれだけ私共に生きた智識を與へるものでせう。さうして多くは先輩ですから、生徒をよく理解してゐますし、自然本校の沿革や、大先輩などの話が出ることもあつて、其の度毎に、私共の胸は、いやでも高鳴るのを覺えずには居られません。これは、京都に學ぶといふことが、比較的他の地よりも、名士學者の講演などに接する機会が多いこと、共に私共の幸福に感じてゐるもの、一つです。

三高生たるもの、夢寐にも忘るゝことの出来ないものは、彼の對一高との野球戦でせう。

單なる技術の争でなく火の出る様な、男の意氣と意氣との戦、自由と自治との争であります。

あの野球があるために、赤旗を取つて神楽原頭に起つたことがあるが爲に、どれだけ私共三年間の生活に、感激と、光輝とを加へるものでせう。

あの勝利の夜の光景は、どうして忘るゝことが出来よう。あゝした感激は、一生の中幾度経験するものでせうか。又一度神楽生活に入つた者は毎年五月一日の夜を忘るゝことは出来ないでせう。此日は創立記念日で、運動競技、假裝行列の催や、寮各室の裝飾などがあつて、澤山な人出で、京都三名物の一ださまで、いふ人が

り拙文のこゝろ、諸君の参考資料に供することには到底不可能事ですが、一應愚感を次に述べて見ませう。

抑本校は明治廿四年第一回卒業生を出して居りますが、明治卅八年に到り、始めて今日の如く高等商業學校となり、それより以前は山口高等學校と稱して居つたのです。爾後本校の卒業生は現今實業界其他の方面に活躍しつゝあるものであります。御承知の如く本校は全國高等商業學校中上席を占めて居まして、それが爲め入學志願者も年を追うて増加して居ります。本校生徒教育の主眼は滿蒙支那各方面に雄飛活躍せんとする者を養育するに在るので、特に之が爲め支那語は勿論主として支那經營の方策に就いて研究し、或は教授して居ります。之れが特殊の機關としては、支那貿易科なるものを設けて居ります。元より創設以來日尙ほ淺いのですが、微々たるものであります。之れが他に比して驍然頭角を現はして居るのは、支那方面の經濟状況を、經營方針を將又金融貿易並びに各民族の活躍振りを研究して居るのであります。此は他の高商に未だ其設置を見ないのであります。加之本校は毎年數回東亞經濟研究なる雑誌を發行し、一般生徒の参考に供してゐます。如此本校が支那を研究の主題として居るのは、地理的關係から然らしめたものと考へる事が出来ません。

以上本校の歴史と、其方針の大略とを述べましたが、次には現今の状況を少しく詳細に述べて見ませう。先づ本校の生徒採用には試験を行ふのです。勿論特別入學をするものもあります。之は朝鮮、臺灣、支那方面の人が入學するため、特に設けられたのであります。尙ほ無試験入學を許可する制もありますが、然し大部

あるほどですが、その夜のこゝろです。星が三つ二つ、愛宕山の上に見れる頃から、篝火を焚いた校庭で、全校コンパが開かれます。かの野球戦に敗れた翌年のこの夜こそ、實に悲壯その物です。篝火に照らされた各自の憔悴な面持、太鼓の轟、熱狂の叫、血涙の迸。晝の華やかさから、一轉したこのシーンは、何人か涙なくして、目撃することが出来ませうか。新入生も此夜初て、衷心から三高生としての責任を感じて、思はず拳は握られ、熱き感激の涙の、頬に傳はるのを禁じ得ません。

此の日から幾日もたない中に、應援團が組織されます。運動は此野球部の外に、蹴球、庭球、水上、陸上、柔道、剣道、弓術馬術の各部があつて、何れも相當の強味を持つてゐることは、新聞紙などにて、御承知のこと、存じます。

又、エスヘラント語、社會問題、哲學、劇、音樂などの色々な研究會を作つて、各自がその研究に熱心になつてゐることも、時に斯達の大家を招いて、専門の智識に接します。私共の研究には、充分の満足を得て呉れる圖書館も校内に在つて、午前八時より午後九時まで開放してあります。

寮は可成古いものですけれども、希望者百名ほど入舎を許してゐます。(下略)

### 山口高商より 同校 來島 勝男

此の度何か参考となることを書けよとの御命令を受けましたも少し難く、遂に此にペンを走らすことになりました。もごよ分は試験の成績に依つて、其の採否を決するのであります。其試験科目の程度は中學卒業、又は商業卒業の程度で之を行ふのです。例年の如く、本校の受験者は僅に千數百人を越ぬまして、昨年度に本年の如く、入學歩合は約一割で、全國専門學校中最も入學難を感じ、従つて其競争の激烈なことは云ふ迄もありません。而して試験場は二ヶ所で行ふことになつて居ります。其れは本校と京都とに於て同時に施行するのですから、何れでも便利な所で受験する事が得策であります。

もう試験期も残り百五十日もないくらいになりました。本當にお忙しい事だせう。次に少しく私の経験しました事を簡単に述べて見ませう。幾らか諸君の参考になる事があるかも知れません。一言で以つて言ひますれば、學校にて習つた事を十分に會得すること、勿論之が基礎となるもので、之れを充分にしてさへおけば、大體の難關は突破するに大した苦痛を感じないのであります。賢明なる諸君は、日夜孜々として御奮勵なさつて居る事と存じます。讀書に親しむ時が到來致しました、此からが正しく勉強時期なのであります。

次に本校の入學試験状況を述べませう。當校に於ては特に英語、數學、國語を主とし、之に暗記物が附屬するのです。此の暗記物たるや、年に依つて異ひまして、明年は何があるか判然致しません。苦し定まりませうれば直ちに御報達申します。英語に於ては、今迄の試験に依りますと、長文を出してアンダーラインの施せる箇所を譯せしむるのであります。故に之を完全に譯さんすれば、

全体を隈め了解することが必要であります。試験官の話に依りますと、往々俗に云ふ敵から棒を出したといふ風な答案があつたようですが、之は勿論前後を了解せず、早合點して不覺を招致したのであります。譯し方は寧ろ直譯よりも、意譯の方が歓迎せられて居るのであります。書取は日本人がするので、分り易くあります。此は諸君の不斷書取りをなさる場合の如く、例の三讀主義を取つて居ます。此に少し御注意願ひたいのは、文章中カンマや、ヒョリオッドなどは、一向云ひません。單に其の全文の終りに試験官がフルストツプと云ひます。諸君御承知の事と存じます。或る者は正直にフルストツプと綴つて出したといふ滑稽な話があります。

次に數學は必ず整頓し亂雑にならぬ様にせねばなりません。珠に幾何にあつては、圖を明瞭に且つ大きく書くのです。文字を明瞭に書く事は一般を通じて有益でありまして、然し競争場裡に立つて優勝せんとする者の忘れる事のない事でありまして、次に國漢ですが、この中に作文が課せられ筆を以つて書かせるので、勿論文句の巧拙、思想發表の熟否等に重きを置きますが、然し又文字の正確誤謬なき事は、間接に其の採點に影響を及ぼすものであります。兎に角何れの學科にしても、丁寧に書く事でありまして、之最も肝要な、最も考ふ可き事と思ひます。さて目出度く此の試験にパスしますと、櫻花爛漫として咲き匂ふのどかな四月中旬に入學するのです。最初一年生は特別の事情の外は寄宿舎へ入舎せしむるのであります。其の主要なる目的とする所は、將來社會に出て、雄飛せんとする者をして、共同生活に馴

致せしむる様に仕入れるのであります。然しなから寄宿舎に居ても、何等苦痛を感じません。殆ど自由に共同生活を營んで居ること云ふ方が穩當でせう。寄宿舎の費用としましては、月に廿圓で、之れに少しばかりの小遣あれば十分で、通學しても之の餘り大差はありません。世間あれば本代其他雜費を充す事が出来ます。

次に日常の學科は、諸君が本校の總規定を御覽になれば判然と知する事が出来ます。就中外國語は英語を主要とし、一週八時間教授して居ります。その中外人が二時間、會話なり其他の事を教へて居るのであります。之に次いで第二外國語がありまして、之には支那語、佛語、獨語、露語で、此の内何れなりとも一語を選択せしむるものですが、然し英語を以つて第二外國語とする事が出来、一週三時間教授して居ります。就中支那語は前に申しました如く、本校の特色ともす可きものにして、實用的のものとして、多數之を學んで居ります。將來我國民の發展す可きは果して何處でせうか。僕を以つて之を言はしむれば、正しく支那滿蒙を措いて他には有りませぬ。將來有爲のヒジニスマンとして、重大なる國勢を雙肩に荷ひ、大いに皇國の爲めに貢獻せんとし、隣接の大國に活躍せんとする者は、須く之を學ぶ可きであります。其の外數種の學科があります。此に諸君にお勧めしたいものは筆記の練習であります。以上申しました諸學科は、概ね筆記で、ノートに之を書くもので、入學當時未だハンを以つて之を練習しない者に取つては随分と骨折れることでありまして、諸君暇の時、練習なさらんことを切に切に希望して止まない所でありまして、

次には本校の設備に就いて簡単に云へば、次の様であります。

本校に於て特筆大書す可きは、圖書館の設備の完全に近き事であり、全國專門學校中有數の藏書校で、生徒の自習に裨益する所甚大なる者があります。校舎に就きましては、遺憾とする点がありますが、然し其れは古いだけです。此の度改築の業に著手して居りますので、近き將來に於ては、立派になることを信じます。以上種々と愚考を述べましたが、猶ほ御不審の點が御座れば、何時なりとも御知らせ下されば、成る可く檢べてお答へ申します。諸君の多數本校に御入學あらんことを最後に切望致します。

大正十三年度第一學年入學者狀況

尋五	尋卒	高一	高二	計
修了	修了	修了	修了	
志願者 四	一四七	克	酉	二八三
受験者 二	一四三	亥	丑	二七四
合格者 一	八六	酉	七	一三六

大正十三年度、第一學年入學志願者中、阿武郡内小學校にして五名以上を出したる學校狀況左の如し。

校名	志願者	受験者	合格者
明倫	八四	八四	四一
椿東	三〇	三〇	一六
白水	九	九	五
椿西	七	七	四
越ヶ濱	五	五	二
大井	一〇	一〇	四
生雲	五	五	二
福川	九	九	四
三見	九	九	二
育英	九	九	五

(四月三十日以前ニ入學取消ヲナシタルモノハ算入セズ)



藻 鹽 草

▽ 修學旅行記 △ 萩——福岡

五月七日。雨

大正十三年五月七日午後八時、天意ながら此の行を阻むかと思はれる様なごしや降りの中を、旅装甲斐々々しく濱崎の商船會社に集合。

本来なら正明市まで徒歩で行くのであつたが、幸か不幸か雨故に船で行くことになつたのである。但し中津江先生と小崎、中山の兩君だけは一足先きに仙崎へ先發す。

八時半に入港の客の船は九時になつても入らない。漸く十一時過ぎ汽船が入つた云ふ。が併しちつとも通船を出す氣色がない。

會社側では、外が眞暗でそれに風雨が烈しく危険であるから、こても通船が出されない。明朝四時まで待つて呉れよの事だ。これでは全く明朝七時正明市發の列車に間に合ふ見込みはない。が何とも

致し方はない。やむを得ず一同福澤酒店の二階へ上つて寝る。五月八日。雨後晴。その内時は経過する。たうとう朝まで待つたが更に時間は延長されて八時半。此に於て一行は發動船に交渉してやつと乗せて貰ふことにした。五時半二艘の發動船に分乗する。そして漸く同四十五分駒田、井村、郷田の諸先生の指導の下に修學旅行の途に就く。

金子 乙 助

吹く風に、梢の紅葉、ゆらめきて、夕日かゞよふ、ぼぶら美し。なよよかに、垣穗に寄りて、咲き出づる、姿やさしき、こすもすの花。幼兒の、笑むをし見れば、しばし我、神のみ國に、ある心地する。千町田の、末立ちこむる、夕霧に、ほの見わわたる、里の燈火。

海上は頗る無事平穩、發動船は圓い環を吐きながら勢よく海上を滑つて行く。一時間も経つた頃三見沖に來たが、すこし波にうれりを生じた丈で、其れも大したことは無く、却つて船の動搖は

面白い位であつた。鐵道線路たるべき道路も見ぬ、追ひ追ひ文明の恩惠の手が我が萩にも近づきつゝあるも嬉しかつた。折々降り來る雨には少からず弱らせられたが、それでも移り行く船の景色面白く、七時三十分頃仙崎灣に入り青海島の奇勝も遠くながら眺め、七時三十八分仙崎上陸。直ちに

いよ／＼九州に來た。僕等の元氣は益々盛に、一同の顔には歡喜の色が漲つてゐる。大里驛近くのサクラビル、キリンビル等夢酒製造會社の澤山な瓶は一寸珍らしく、八幡の製鐵所の巨大な煙突、しかも數多い——やはり其處が八幡の八幡たる所以で成程と點頭された。

金子 乙 助

あめつちの、なしのまに／＼、生れ出でし、神代ながらの、景色雄々しも。雪と散り、玉と碎けて、流れ行く、水の姿の、面白きかな。仰ぎ見れば、岩の眞柱、神さびて、天そ、り立つ、切籠切窓。岩のさる、苔の衣の、中たちて、たぎり落ちくる、白糸の瀧。水分けて、底し探らば、夜光る、玉も出づらむ龍宮の淵。(以上五首長門峽にて詠める。)

正明驛へ向けて出發、八時二十分着。軽く朝食を終へ、少憩の後九時三十八分發の列車に乗り込む。パタニーと扉がしまる。ヒューと汽笛が鳴る。いきなり汽車は發車する。等しく腰を下して申し合せた様に窓外を見る。山送り、川迎へ、野來り、丘去り、街現れ、村消ゆ、森羅萬象矢の如く飛び來り、電の如く飛び去る光景は一々記憶の暇なく、正午厚狭驛に乗り換へて下関に着いたのが午後一時半、直ちに聯絡船に便乗し門司へ急ぐ。流石は關門海峡だ。我が國の門戸だけあつて、天を掩ふ煙突の煙と、大小千差萬別おびただしい船舶、林立せるマストは其の商業の隆盛を語り、絶え間ない汽笛の音は其の商業の殷阜を表白するものである。驚異の眼を見張りつゝも、やがて再び車上の人となり門司驛を三時十分發す。

直ちに旅館高島屋に至り一先づ旅装を年生さ宿り合せた。暫くして夕食に空腹の舌鼓を打ち、十一時迄市内自由散歩を許された。一同絡々として出て行く。九州第一の大都會たる福岡の夜の景色も美しく、大厦高樓、目もまばいばか

りに電燈で彩られた街の明るさ、仁丹、補助足袋等電氣應用の廣告は我々田舎者には珍らしいもので、福岡の市街の賑さを裏書きするに十分である。

福岡は何となく、感じのする所である。就中道路の完備せる點は街路の清潔と相まつて、何よりも優れて氣持よく、電車でも餘り揺れない。正明厚狭間の汽車より却つて乗り心地がよい。

十一時前後就寝。晝の疲れが徒に斬聲のみ高い。(有美邊記)

福岡——熊本

五月九日。晴天。

午前六時である……朝露が目に見えてだん／＼となくなり、町並の屋根の上に勢のいゝ五月の太陽が反射し出した。私達は甍つた様に宿の前に整列した。大地をうつ電車の響をうき／＼する足裏にほのかに感じながら……

箱崎八幡宮。午前七時。此の旅最初の電車を箱崎行に選ぶ。應神天皇のお祀りしてある八幡宮に参詣するのだ。社前には例の有名な箱松が初夏の陽を浴びてみづ／＼しく輝いてゐた。駒田先生の説明に耳をかむける。

松原を縫うて海岸に出る。靜に遊戈してゐる舟や、のどかな島影

實のならむ、時はいつかも、民草に、あだ花ばかり、咲き匂ひつゝ。(浮華の風)  
鵬の、猛き心を、外國の、船に残して、逝きし君はや。(金子重輔君)  
行く先は、なほ程遠し、心して、撓まず進め、朝な夕なに。(教へ子に)

金子乙助

平和なみどり色の森などの美しくい海の景色にしばし見惚れる……

水族館に入る。大小數多の魚が嘴／＼泳ぐ様を見てゐるご何だか胸づまる様な氣持がする。水族館だといつても、裏には珍らしい鳥獸も居て私達の目を喜ばせてゐた。

大學病院の高い壁に沿うて東公園に赴く。立正安國論を説いて萬丈の氣焔を吐いた傑僧日蓮さ、長くも十善の玉體を以て國難に代らん遊ばされた聖帝龜山上皇さの二巨像を拜して後大學校構内を見學する。暫くして、西公園に向ふ。

電車に乗て先づ光雲神社に参詣する。社は黒田氏の祖廟である。空裏を握りしめつゝも高價な、美くしい、兩側に並べられた博多人形に目を惹かれる。時間が切迫してゐるので、呑氣な博多灣の美景を速しく横に見、倉皇としてひき返す。

博多市の見學を終り、十一時五十三分市に左様ならして、いよ／＼第二日のコースに入る。

博多を出て少許にして水城に差しかゝる。つまらない石標が一本立つてゐたきり……

夢ばかりの單調な平野を汽車までが睡むさうに走る。時々顔をつ

き出して自分の睡を覺す。倦怠と單調な内を汽車はひた走りに走る……

いろ／＼な意味に於て、見たいと憧れてゐた有明の海が見え出したのは汽車が萬田附近に來た時だつた。(萬田は三池炭坑の重要な一部)汽車の走るにしたがつて海上の景色が展開して行く。島原半島が霞に包まれて見ゆる。往時の事を運想してゐる内に。汽車は肥後平野に入り海と遠ざかる。倦怠が又襲つて來た。……

熊本——栃木

いさをしの、光輝く、優勝旗、立て、歸れる、今日ぞめでたき。

朝夕に、倦まず撓まず、いそしみし、効は今日ぞ、現れにける。(以上二首山口體育大會にて我校の優勝せしを祝して詠める)

道のため、立てし勳の、高ければ、雲の上まで名ぞ聞ける。(人の叙勳せられしを祝して詠める)

金子乙助

午後三時三十分、熊本着。八十哩の行程を終へてなつがしい大地を踏む。

……「阿蘇の火山灰で出來た様な都市」熊本から受けた第一印象だ。すべてがゴツ／＼とした感のする市だ。譯で暫く五高の人々を待つ。車馬の輻輳する態を見ながら……

約一時間の後。私達は五高の先輩に導かれて熊本城を見學した。非常に疲れてゐた身には可なり負荷だつたが、城より市街を見下した時は、實に何とも云へない氣持だつた。……夕暮のよい陽が、晩春の物憂い夕霧と交錯して全市を染みみどりの道路樹に散れて、夢の様な、美しい傳説の都市を現してゐて。下から見た熊本さ、上から見た熊本さは所謂天地の差異が認められた。

午前三時起床。四時十分一行老松旅館出發

先輩五高生數名の先導にて熊本驛に向ふ。町中尙寂として人影なし。四時四十五分驛着、五時車上の人となり宮地に向ふ。汽車は靜なる曉霧を破り、蒼茫たる平原を進む。一時間餘原水驛に達す。右方遙に阿蘇の諸山屹然として聳じ、其の裾野は茫漠として眼界の外にあり。立野より汽車は一度進行し、徐々に外輪山の中へ進む。急湍あり。瀑布あり。谷盡くれば原、原盡くれば林、奇勝絶景數ふるに遠なし。坊中驛に着す。熊本出發より三時間餘。下車し暫く休息。繪葉書登山杖等を隠し記念スタンプを捺す。人員點呼の後、八時出發。愈登山の途につく。中腹までは處々に茶店ありて、登山者に便を興ふるこゝ甚大なり。七八合目より人家無く草木なく、見上ぐる所一面火山灰に掩れ、硫黄の香

深ひ来る。下敷すれば外輪山は屏風の如く峙ちて四周に迫り、裾野には三三五五馬の戯れ遊ぶを見る。十時半頃山頂に達す。頂上には摺鉢形の噴火口あり。其の深さは幾百尺なるかを知らず。地底より起る蒸々たる響は、恰も百獸の呻くが如く、濛々立ち上る水蒸氣や、瓦斯の盛なること、到底筆舌のよくする。こ能はざる壯觀なり。

雄大が、凄愴が、將又壯嚴が。杖を停めて佇立すれば、目は勞を忘れ足は疲を忘れ、躊躇居を移して去ること能はず。北部工業地帯を離れて此處に到れば、げに仙境に遊ぶの感あり。西に向へば、烏帽子岳右に、杵島嶽中嶽高嶽は相並び、根子岳恰も露の齒の如く聳ゆ。蓋、阿蘇は世界屈指の大活火山にして、杵島岳、烏帽子岳、中岳高嶽、根子嶽は阿蘇の五嶽と稱せられ大阿蘇の中心なり。五嶽の南北に阿蘇谷南郷谷あり。之所謂火口原にして、黒川白川は此二谷を貫流し立野に合す。二火口原内人口數萬を包容し、西北七里、東南四里その規模の壯大なる實に世界第一。最高峯高嶽は

### 浪のたゆたひ

中津江延彦

わだつ海の沖の重浪のたゆたひに一ゆれゆれて  
今ぞ日の入る。  
夏の宵や大わだつ海の波頭碧くひかりて崩るゝ  
か見ゆ。  
山なみの頂のあたり飛ぶ雲のあかきも消ねて秋  
の日の入る。  
ちぎれちぎれ雲のい行きの險しくて海鳴すなり  
秋更けし頃。  
大わだのわだのみな底ごよもして鳴りのさびし  
き冬の夜半かも。

### 朽木——下關

——萩

五月十一日。小雨  
五時起床、黎明の薄雲は低く、千里も長くた靡いてゐる。洗面後喫飯す。

「愈々、歸途に着くのだ、何となく物淋しい、然も緊張した気分が全身に漲る。七時半。宿屋前に集合。點呼の後、立野驛に向ふ二三名の五高諸兄も同行される。名残惜しげに見送り、躊躇しつ

、進むこと四十分餘、驛に着す。驛前に約四十分憩ひ、八時五十分、乗車す。

絹糸の様な小雨が降つて、時々、吹き来る風の爲に窓を打ち、淋しい幽かな音を立てゝゐる。十分の後、汽笛勇しく汽車は立野驛を發す。吾々は遂に歸途についたのだ。雨は漸次烈しくなつて来る。

窓越しに霞む彼方を眺むれば、火口丘は巖然として、遠く吾等を送る如く屹立し、霞と紛ふ噴煙は此處彼處から濛々立昇つてゐる。また、舊噴火口中を走りつゝあるかと思へば、古の噴火當時の有様等想像されて、自ら戦慄するのを感じる。

汽車は進行し、景は移る。時々響くけたましい警笛に、あやししく胸を驚かしながら、孤村孤村を過ぎて行く、汽車は愈々進み、三里木を過ぎ瀧田口に着す。

雨止む。吾々を送つて來られた五高の生徒諸兄と汽笛と共に別れる。吾々の爲に餘程の斡旋をされた事を諸兄に感謝し、併せて諸兄の幸福を祈る。

### 犬吠の海

中津江延彦

犬吠の海つらくらし空くらし沖つ岩根に浪たゞ  
ひかる。  
犬吠の小波大濤うねり濤磯もどまろに砕けては  
散る。  
久方の天のそぐへゆはろばろに浪のうねりの續  
く海かな。  
岩が根をどまろ鳴らして大海にやそいかづちは  
荒れ狂ふなり。  
散り散らふ浪の沫にひた濡れて大海の果の異國  
を憶ふ。(排日のアメリカを)

一面霧に包まれて、雨中の景色は、おぼろげながら汽車の進行につれて夢の青や、菜の花の黄を迎へ、小徑を右に見、茅屋を左に見、笠笠を着て畑をうつ人などを望めば、水郷の春を思ひ合せ、興趣が湧く。

猶進みて久留米、水城等を経て博多に着す。時正に二時五十分、朝立野を出で、から、早や六時間、そろそろに疲労を感じる。瞬間々々に前に見た景を後に送り、箱崎、海老津等を過ぎ、遠賀川に至る。汽笛と共に鐵橋を渡り、吾等は一刻々々と門司に接近して來た。

沖の片帆に残る夕陽も、いつし霞の中に、其姿を包まれ、汽車の進行につれて、段々、幽かに消れて行く。  
薄暮、吾等の乗つて居る汽車は、すさまじい汽笛と共に門司驛に

着した。直に連絡船に乗る。約一時間の後、下関に上陸、幽谷の島すてに巢に歸り、總てが寂寥である。只、窓から漏れる燈火が、淋しく吾等を迎へるのみである。颯々吹き来る潮風に、流石に長途の疲を痛切に感ずる。六時三十分宿主に迎へられ宿屋に着く。食後、種々の注意を受け、市内見物をなし、十一時半、遂に最後の眠を求めぬ。

五月十二日。曇

四時起床、愈々、吾等の修學旅行の最終日、鷓鴣幽かに、夜はほの／＼と明ける、その最終日を祝ふ如く。運ぶ膳器の音も喜ばしく聞かれ、外を吹き過ぎる風も樂しげに、小鳥も嬉々として合つてゐる。

五時、宿屋を出發し、停車場に向ふ。汽車は朝の霞を切り割いて進む。少時にして厚板に着す。

此處より復、窮屈なる輕便車に乗り換ふ。

窓外は山走り草行き、居ながらにして黄鳥や雲雀などの音を聞き、活氣に満ちた新鮮な朝の血潮は、一層敏活に廻轉するのを感じる。吾等を迎へる孤村の森、過ぎては又彼方の山、隧道を過ぐれば、又平野がある。谷がある。橋がある。四圍は刻一刻と故郷の色に染つて来る。もう、郷里に餘程接近し

### 錦帶橋 錄舊作

學半 河野 通 毅

星霜二百有餘歲。  
未看奇才題柱句。  
氣晴虹霓猶浮水。  
行客過之驚眼眩。

噴々聲名冠海東。  
堪誇英主濟川功。  
雲斂蚊龍却躍空。  
神機豈讓魯般工。

て来たのだ。そういふ感じが我等の胸裏に閃めく。

「正明市!!」驛夫の聲は驛内に響き渡つて、十時半、汽車は靜かに正明市に着した。驛前に整列し、人員点呼の後、徒歩で歸郷の途についた。其處より、山を越ゆ、谷を越ゆ、遙に見ゆる彼方の一角、曲れば又、遙の彼方に一角は霞んでゐる、疲勞した足を曳き反響を聞きながら山間の小徑を辿る。

午後六時、遂に玉江橋に着す。「お、故郷よ!!」吾等は俄に睜つた者の如く、顔に微笑さへ浮べて故郷の空を眺める。斯くして吾等は萩に歸つたのだ。玉江橋にて人員点呼の後、解散。

あ、!!吾等の萩を旅立ちてより五日。遂に斯くして、吾々の修學旅行も終を告げたのである。(大和正夫記)

今同第五師團發起にて、山口廣島根三縣の學生、學校教員、青年團員より野營團を募集し、島根縣三瓶軍廠舎に野營し、國防思想及團體的訓練の發達、剛健實實の精神、規律節制を重んずる氣風養成等の目的を達せんとの企畫あり。本校よりは五年生、橋本士郎、根来一男、竹内孝雄、四年生永田宗一郎、藤山光雄、鈴木幹六名が参加して、八月八日より約一週間、軍事的教練を受けたり。左の一篇は橋本生の右の要領を記せるものとす。

### 國民野營團參加記

#### 第五學年 橋本士郎

八月八日から約一週間石見三瓶山で、五師團及び其の管下三縣主催の下に國民野營團が催された。本校からの參加者六名である。團員一同、八日、朝、山口聯隊に集合し、武器裝具を貸與せられ、聯隊附中佐、學務課長、中隊長の訓辭を受け山口驛に向ふ。朝霧深い山口の町を進む團員の面は

己未歲暮。余在岩陽客舍。次弟自福岡來。季弟自神戶來。兄弟三人團樂迎年。有感。賦一詩。

學半 河野 通 毅

一弟從西一弟東。  
團樂迎歲足忘窮。  
方知風雨對牀夜。  
蘇子幽懷與我同。

が、或ひは上から、或は左右から、不馴れの體を責めつけ、路は五里の坂路、時は盛夏、我等の困苦想像に難くならう。しかし團員の意氣三瓶山の高さを凌ぎ、途中盛んに遙傳演習を行ひ、陸軍廠舎に着いたのが十時頃であつた。廠舎は板間に藁を敷き、赤毛布銃架がある。これが我等の寢所であり居間である。午後八時指導班長遠藤中佐以下廣島中隊百余名到着す。

元氣と誇りに輝いて居る。集る者七十二名、意外の少數であるが、あの焼く様な炎熱を冒して遠く三瓶の野に奮闘しようとする健兒の集り、行動總て元氣に規律正しい事は、同行の新聞記者も一驚を喫した所である。七時から七時間の鐵道輸送が始まる。和田大尉以下指導班の懇切な御世話には只感謝の外はない。津和野、益田、濱田と移り行く山陰の各驛を輝かしい双眸で送迎し、波路遙かな日本海の壯觀は元氣な我等を喜ばした。午後二時大田着。三瓶山は雄大な姿を横たへて、我等を待つて居る。當日は當地の小學校に宿泊した。一の寢具も枕もない。所謂ゴロ寢である。九日朝二時半起床、いよ／＼三瓶山へ向つたのが三時過、銃、劍、雜囊、天幕、外套、飯盒、水筒、全部約五貫のもの

である。最終日たる十三日は實包射撃及び對抗演習が行はれた。後者は最も壯烈を極めた。彼等の銃聲をきかして三瓶の靈山も震ふばかり、突撃喇叭に勇む勇士の鬨聲は山腹に木魂して坐る青春の血を湧かしめた。團員の行動には統率官も舌を巻いて激賞されたのである。分列式解散式が終つた時には、夕陽を背にした男三瓶の麓には涼しい夕風が吹いて居た。山口中隊は歸途大社に参拜

し、十五日山口で解散したのである。我々は此の儘か肉体的にも精神的にも必要である、ことを確信し、尙將來の發展繼續を祈るのである。

### 大震災當時の追想

#### 第二學年 渡邊 敏夫

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、帝都を中心として、

突如と起つた關東地方の大震災は、僕に取つて如何なる事があらうとも、忘れる事の出来ない大切な日である。丁度其の日は、空はどんより曇り、頭が悪く呼吸がせつない様な感じがした。外出先から親友と一緒に電車に乗つて歸途にいたが、それ迄は何の變りもなかつた。歸宅して洋服を脱ぎ、いざ晝飯にと取掛つた時、恐しい大地震が襲來した。初め戸外へ飛出さうかと思つたが、いやましてばし、壁や棚が崩れる迄出たてはいけないと言ふので、母と二人柱に抱きついて居た。地震は初め上下に揺り、後水平に揺つた。其の日は會社に行つて居たが、身體の具合が悪いと言つて歸へつたけれど、社の鍵を忘れたと言つて再び渡しに行つて歸り、寝ると直ぐだつたさうな。

又弟は駄菓子を買ひに行つて居たので、母は弟の安否を氣遣ひ

### 歲晚感懷 錄舊作

#### 學年 河野 通毅

一 歲如流水。  
弟 兄分三五處。  
後 學却通達。  
庭 前梅樹好。

「久夫ちゃん久夫ちゃん」と呼んだが、唯々家の崩れる音や、瓦の這る音が聞けるばかりで、しばしは何もわからなかつた。段々地震も静になつたから、母と共に戸外に出た。弟は河邊に行つて居て、キヨトンとした目つきで、僕等の戸外に出たのを見て、「母ちゃん此處に御出で早く〜」と言ふので、そこへ行つた。

丁度弟は菓子を買ひに行つた處、地震が始つたので、菓子を口に入れて通をヨロ／＼しながら走つて家歸つたが、隣の家が壊れて來たので、復ヨロ／＼しながら走つて河邊に行つたのださうな。一先づ納まつて父は書斎の叔父さん一所に、二階から降りて來た。叔父さんはそれがら家には入らないで、「荷物を取つて呉れ」と言ふので、僕が家には入つて荷物のトランクと、下輪を入れた行李を一個取つて上げた。叔父さんの行李は目茶苦茶になつて居た。僕の家の荷物は皆折角出したのであるが、残念ながら風向が變つたので皆焼けてしまつた。後で父が徳跡に行つて見ると音器のレコードが一箱残つて居た。幸ひそのレコードは皆完全であつた。これは今郷里の家に大切に飾つてある。そこで、せめては叔父のものなりとも焼くまいと、叔父のトランクは僕が持ち、下輪をきつしりこつめた行李は父が背負つた。叔父は空手で僕の

家の南方藤倉電線株式会社航空機試験場の中には入つて居た。内は鐵筋コンクリートで、側はトタン板であつた。天井の通風口から火の粉が盛んに落ちて來るので、皆は「火の粉を消せ火の粉を消せ」と叫んで消火に三日間も努めた。その三日間、火に包まれて居た時は、地獄の釜もかやくと思ふばかりの暑さ苦しさ、唾は出ないし咽喉は渴くし何とも言ひ様がなかつた。然し一週間は飯の一粒も食へて居ないが、氣が立つて居たので何もなかつた。六日目頃に東京縣に出て始めて一人に一つ宛夢の晝飯を買つた。其時の嬉しさはさて置かす。東京縣に出る時、深川の洲崎から隅田川の下流の永代橋を渡らうと思つたら、電車の線路が二本残つて居た。それも中程は河水とすれ、下つて居て、婦人や子供や小唄な男等は渡る事が出来ない。河には船

が澤山浮んで居たので、一人の人が「渡して呉れるか」と問ふと、「渡すか一人前十五圓出せ」と言ふので、僅か向岸迄一人前十五圓も取ることは随分だ、一人の巡查を見つけた話を話すと、「そんな事はない一つ掛合つてやら」と言つて、「いくらで渡すか」と言ふと、「いねは只で渡します公衆の爲ですから」と言ふので、巡查は「只だから皆乗れ乗れ」と言つたが、僕等は怪しいと思つて乗

### 示諸生二一首

#### 學年 河野 通毅

其一  
孜孜奮勵少年時。  
昨日紅顏今白髮。  
其二  
鄉關一出約功名。  
角觥打球空嬉戲。

歲月真成疾似馳。  
亡羊空嘆路多岐。  
却恐心蹊茅漸萌。  
知不老母倚門情。

皆無事に歸つた我々を見て、祖父の喜びは譬へんに物なしの有様だつた。本年は一週忌を取越して、三十日の祀我々一家内の震災遭難者が集り氏神様の神主を招待して御拂ひをして頂いた。後で父が集つた近所の人等に遭難談をした。今年の九月一日午前十一時五十八分、即ち一週年には上も下も共に謹慎して其日を過すこの事であるから僕も一語に謹慎して慘死者の冥福を祈らう。



# 校報

## 第二十四回卒業式

三月五日午前十時より、第二十四回卒業式を本校講堂に於て行ふ。縣知事代理林阿武郡長初め其他來賓多し。學校長勸語誦讀の後、卒業證書を一括して卒業生總代青木弘に授與し、知事代理及學校長より夫々賞品を授與し、學校長告辭、知事代理告辭、來賓總代山田少將の祝辭、父兄總代津田五百名氏の謝辭、卒業生總代青木弘の答辭あり。午前十一時過終了。

當日卒業生にして受賞せしもの左の如し。

一、學力優秀にして伍長となりては能く其任務を盡し、皆勤五ヶ年に及び難知事より受賞せしもの

青木弘

一、學力優秀にして伍長となりては能く其任務を盡したるもの(以下學校長より受賞)

杉丙三

一、五ヶ年間皆勤し、且本學年間伍長を勤めしもの

來島勝男

一、五ヶ年間皆勤せし者

惠美須屋三吉、森田誠

一、本學年間伍長を勤めし者

池田謙三、鹿島國好、多田義男、波多野爲一、長嶺正博、福田幹雄、伊藤貞一、石丸孝一、迫山六郎、中村靜雄、弘中勝、齋藤彰、濱野三郎、吉村恒助、田原節夫

一、本學年間無缺席なりしもの

大島新三、來島勝男、惠美須屋三吉、青木弘、濱野三郎

一、卒業の際七席以上にして、同窓會より獎學賞を受けし者

青木弘、杉丙三、津田嚴男、福田幹雄、弘中勝、伊藤貞一、多田義男

### 縣立學校生徒獎勵

#### 規程に依る受賞者

四月九日、新學年の始業式後、前年度に於ける第四學年以下の生徒に對し、左の通り賞品、賞狀の授與式行はれたり。

一、筆記帖四冊(特別賞)

三年、田村義雄、二年、小橋一義

平素勤勉にして能く校則を守り、學力優秀にして伍長となり能く其任務を盡したり、依て前記の物品を賞與す。(各通)

一、筆記帖三冊(一等賞)

四年、橫山幸生、山本馨、三年、市原茂樹、岸音熊、二年、永富五郎、一年、池上武夫、板垣禮作

學力優秀にして能く校則を守り伍長となり、能く其任務を盡したり、依て前記物品を賞與す。(各通)

一、筆記帖二冊(二等賞)

三年、有美邊、藤田小太郎、松永哲彦、二年、新山半治郎、久

保一郎、中島眞平、小枝清、木村輝房、一年、大村武一

平素勤勉にして能く校則を守り、伍長となり能く其任務を盡したり、依て前記の物品を賞與す。(各通)

一、筆記帖一冊(三等賞)

四年、倉重達郎、木島俊雄、橋本土郎、吉田勇、大谷正信、林

不二雄、田中勝太郎、山中不二夫、内山誠、谷川清、野村久一

河邊芳太郎、田中松一、山本浩、瀧口三郎、益田篤士

三年、阿武義輔、中津桂三、村木忠治、長濱誠三、松浦兼三郎

山田明、梶村次郎、永見眞人、大島政輔、大和忠雄、香川俊男

廣順一

二年、空戸武夫、宮崎三郎、天野俊雄、藤井勇、野稻清定、村

木七郎、堀源助、小原義紀、大永金太郎、橫山剛熊

一年、山根友信、原一二三、田村久男、藤谷朝吉、詠村洋、柴

田敏夫、田北亨、辻永勝明、水野一郎、峰岡良夫、藤井秀夫、

山根芳郎、河村忠雄、木村好男、厚東晃

本學年間伍長となり能く其任務を盡したり、依て前記の物品を賞與す。(各通)

一、筆記帖一冊(三等賞)

四年、久保田稔人、吉田市丸

三年、永田宗一郎、梶村次郎、松永哲彦、橋本實結、上野眞介

末益清人、窪田壽男

本學年間室長となり能く其任務を盡したり、依て前記の物品を賞與す。(各通)

一、賞狀(四等賞)

一、賞狀(四等賞)

四年、小方數馬、山村清、永松正守、中村義治、常川明、馬來誠、田中誠、龜島皓一

三年、松井利明、吉見立一、三好悅治、村岡幸作、石光仁吉良、今地嘉勝、益田策清、松本博、來島正道、瀧下長俊、田村敏雄

二年、森澤忠朗、時澤信、中原吉秋、關孝哉、原一衛、伊藤滿、本永誠、吉村醇、伊藤徳太郎、津田茂、青木潤次、野中清七、青山常次、土屋秀雄、岡本權兵衛、山縣信夫、阿武茂、中村明井上五郎、増山美雄

一年、阿武嚴夫、佐々木順一、大島次郎、伊藤昇、大村武一、仁保政敏、下部進、橫山治雄、河村一雄、渡邊定、渡邊敏夫、古澤利夫、和田賢、桂良典、楊井勇、山縣仁夫、吉津丈夫、竹原英夫、角木與吉、島尾五郎

本學年間皆勤せしに依り之を賞す(各通)

○縣立學校生徒獎勵規定に依らざる受賞者

一、賞狀(等外)

四年、田中勝太郎

三年、市原茂樹、上野武、竹内武熊、藤村和輔、宮田節美、廣順一、小崎一郎、田村俊彦

二年、藤井直介、田中秀雄、伊藤滋

一年、大深了三、内藤由幸、栗屋彌太郎、岡良夫、金田延佑、江川三雄、河村忠雄、木村好男、田阪守典、齋藤勇、新庄博

本學年間皆勤せしにより之を賞す(各通)

同日同窓會より各學年成績優秀なる生徒に獎學賞の授與あり、姓名は同窓會誌に譲る



◎先生の更迭

大正十二年十一月以後(前號報告後)先生の更迭せられし者左の如し。  
△伊藤恒先生 大正十三年九月、福岡縣小倉商業學校に榮轉せらる。  
△三井義實先生 大正十三年九月、徳島縣立徳島中學校より來任せらる。英語科擔任  
昨年より先生の御更迭の少きは、誠に喜ぶべきなり。

◎校誌(節畧)

(自大正十二年十一月至大正十三年十月)

- 蘇町招魂祭、十一月三日蘇町招魂祭舉行、各年級伍長參拜す。
- 教科書寄贈、十一月十六日、數學科、地歴科、圖書科、及生徒の寄附圖書を集め、東京府立第五中學校を経て東京市及附近震災地學校に寄贈す。
- 松陰先生追慕會、十一月廿一日、午前十時四十分より民力作興に關する證書の捧讀式を行ひ、後松陰先生追慕會を開き、香川先生の講話あり、午後一時より職員生徒一同松陰神社に參拜す。
- 宇佐川氏講話十二月六日、世界一週旅行家宇佐川政輝氏講話あり。
- 武道寒稽古開始、一月十一日より。(一月廿四日終了)
- 皇太子殿下御成婚奉祝拜賀式、一月廿六日、講堂にて舉行、校庭に記念樹を植う。



校友會報

◎辯論部記事

輝かしい若人の抱負、眞正を誤らざる自然のまゝに伸びた思想、美はしき強き希望。  
若人の胸には熱き血潮のゆきがある筈だ。この思想、抱負、希望を露らす吐露するため、指月山の緑輝く陽春六月二十日、本年度春季辯論部大會は、部長の開會の辭に初つた。各辯士の鋭くが如き舌端は講堂の空氣を嚴肅に緊張せしめないではおかなかつた。

當日のプログラム左の如し。

- 一、開會の辭 部長 岩武輝彦
- 二、資金の洪水 三井正治
- 三、責任と勝利(二等) 山本千八郎
- 四、品性 石川滿雄
- 五、克己 田北敬三
- 六、うるほ(三等) 柳井敬三
- 七、立志論(三等) 阿部悌甫
- 八、眼を太平洋の彼方に 福田壽雄
- 九、我が長所と短所 田中助一
- 十、發明家の卵

○古谷實氏講演、一月廿九日、本校卒業生にして下關青年團主事なる古谷氏の講演を行ふ。

○衛生デー、二月九日、講堂にて山本校醫の衛生講話あり、引續き生徒個人別に扁桃腺検査を行ひ、罹病者には投薬せり。

○卒業式、三月五日舉行(別項參照)

○入學試験、三月廿五日より施行、廿七日入學許可者氏名發表

○入學式、四月十二日舉行、入學許可者百三十七名、十四日補缺入學者十名の入學式舉行

○松林桂月齋伯講話、四月十七日講堂にて行ふ

○修學旅行、五月八日、四年生修學旅行にて九州方面に出發す。

○海軍記念日、五月廿七日、記念式舉行、式後競技大會を行ふ。

○皇太子殿下御成婚奉祝式、五月三十一日舉行

○橋本大佐講話、六月十日、午前七時學校長より東京觀察あり九時半より明倫講堂にて入港中の軍艦球磨艦長橋本大佐の講話を聞く、後委員と武道練習をなす。

○水泳練習、七月十五日より菊ヶ濱に於て水泳練習開始。

○伊藤恒先生告別式、九月四日、先生は小倉商業學校に轉任せられたり。後任三井先生の新任式は八日舉行。

○大不敬事件に就ての祈誓式、九月廿一日舉行

○體育大會優勝祝賀式、十月六日舉行、四日、五日の本縣體育大會に於て優勝旗を得しを以てなり。

○父兄保證人會、十月廿七日第一、第四學年生徒父兄保證人會開催、展覽會をも併せ開く、出席父兄保證人百六十一名。

十一、白晝ながら夜中同然 後 藤直人

十二、日本の將來と使命(一等) 山本 浩

十三、無題 小林 祥介

十四、徒に激する勿れ 田北 泰

十五、路上雜感 小方 忠勝

十六、閉會の辭 部長

又討論は「排米平親米乎」の題下にて、四年生が論争したが、討論題發表の余りに過かつたためか、論徒に非論理的に、又問題の意義を自ら辨せざる者のあつたのは遺憾であつた。猶當日は在米多年、奮闘されし現圖書館司書の「時山氏は所感の二三」の題下にて、経験より見たる米國の真相を、ユーモアに満ち諷刺的に熱心に講演せられた、會は午後二時閉會。(山本誠誌)

◎書道部記事

十月二十七日、吾が部は、舊講堂に於て、成績品展覽會を催し、午前十時より午後四時まで、公衆の觀覽に供した。陳列品は、例年の如く、昨年十一月以降本年九月に至る間に於て、前學年に三回と、本學年に四回と、教師監督の下に課書せしめ、其の中より佳良なるものを選抜して、之に等級を附せられたるものである。今其の成績を記せば、左の通りである。

一等 梅屋藤郎、池上武夫、田中敏亮

二等 十六人、三等 二十一人。

此の日朝來、多くの觀覽者ありたるは、我等の喜ぶ所である。將

來益我部の隆盛に赴かん事を切望して止まぬのである（池上武夫誌す）

### ◎書道部記事

今年の本校書道部展覧會に就いて感感を述べたい。會場の光線は作年比して遙かによかつたが、少し狭過ぎた様に感じられた。作品は昨年よりも非常に良くなつて居た。繪を描く人々の此の一年間の努力の結果だと思ふ。然し出品者の全部が昨年と同じ人々ばかりなのには眞に心細い氣がした。來觀者も可成多數であつて我々の展覧會が有意義に終つたのを何よりも愉快に感じる。先づ大和君の繪である。これは總て油繪であつた、昨年比して非常に上達したと思ふ。君の繪の自由なタッチと、フレンシユな色調が君の繪をして君獨特の繪たらしめる所以である。暗い内に君の繪と反對の對象を示したのは、村上君の作である。暗い内に静かな氣分が漲つて居る。君の繪は一寸見た處ではわからないが、靜かに永い間觀て居ると、頭腦に強く響いて來る繪である。次は中村君の作品である。二三の小品に過ぎなかつたが、君獨特の細心な注意が拂つて描かれて居る。君の觀察は他の人々の追従を中々許さない。

次に四年の中村十郎君の作品である。君のテンサンは修君の公正反對に餘りに粗大で、他人には危險を想はせる。然るにその危險は君の天分と努力との結晶である、精練された技巧と色彩とに依つて充分に補はれて居ると思ふ。今回の展覧會中に最も異彩を放つたのは、小野靜雄君の作品である。君の作品が最も多かつたが、

その總てが華やかな色を放つて、多數の來觀者をして君の繪の前に立ち留らした。君の色彩は實に華美だ、そして柔かい技巧。然し遺憾に思つたのは君の繪は餘りに華美で少し甘く思はれる点である。重味を感じたを充分に表現するところに研究の餘地が有りはすまいか、三年の小橋君の數枚の作も發見した。尙も研究されん事を希望する、

自分は今後も諸君の研究と努力とを切望して止まない。最後に甚だ遺憾に感じたのは、同室の無線電信の發信の感々しい八釜敷い音が靜寂を根本から破つてしまつて、來觀者をして靜かに觀賞せしめなかつた事である。（三原生誌す）

### ◎山口師範展覧會出品

十月十七日山口師範學校創立五十周年記念の爲め同校に於て展覧會開設につき、書道部よりは左の通り出品した。

油繪二点	大和 義男	油繪二点水彩畫一点	村上 三郎
油繪一点	三原 清治	水彩畫一点	中村 修
水彩畫一点	小野 靜雄	水彩畫二点	中村 十郎

### ◎理科部記事

神無月廿七日我部は昨年の例にならひ、一、四、年保証人會を期して展覧會を開催した。此の日は晴雲低く垂れ、展覧會には不向きな日であつたが、午前十時から午後四時まで一般の觀覽に供した。

一、博物部

例の如く博物教室に陳列。只常識油養が目的であつて、小規模のものである。本校誇りの「ばんぼう」かものほし」等動物の標本、又生徒出品の羊齒の標本等を陳列したのみ。受賞者として、四年永見君、一年田中君、二年河村、古澤君等を見る。然しこの陳列場に道入つて行くと、自然の眞中に、ほふり出された様な氣がして自然趣味も自と起るのを感じるのである。

### 二、理科部

昨年に比べると非常な發展。理科學の恐しい進歩及び人類に關係する事の如何に偉大なるかを一般の人に知らしめて十分であると思ふ。

A、生徒實驗室、各種生徒諸君の特製品及び常識油養の目的を以て活動寫眞器等を陳列。大きい物と云へば飛行船、輕氣球、風車小さい物と云へば飛行機、水車、軍艦、モーターボート等無數四年林君の飛行機は電氣應用の最新式巧妙なもの、中には奇想天外より落つるもの製品もある。三年清水君の架空線はその一つ。特種な考案と技巧には感ぜざるを得ない。然し中には大工や、ぶりき屋で拵へた物の様なものがあつたのは遺憾、研究的態度を以て製作せられて欲しい。

B、講堂、近來世上一般にラヂオ熱が盛んになつて來た。我部は此の趨勢に鑑み、無線に熱心なる諸君の絶ゆる努力と研究の結果として此處に幼稚ながら無線電話を設置して、一般に無線を了解して貰ひ、併せて世人の無線欲を満足させる、ことが出來た。無線電話の發信器を設置すること、到底不可能であるから、無線電信の發信器に變へ、受話器は二つ三つ備へ、一般

の求に應じた。又無線の説明書なども置いて了解に便ならしめた。風月堂主人の如く、中には色々深く研究せられて、説明に窮したこともあつた。なほ此の室に備付けておいた蓄音器が評判が好かつたのは意外である。長日月無線を研究せられ、今此處に發表せられた諸君は、瀧口、山本、橋本、谷川、岩田、三島、永松、大谷の諸君である。來年は無線同好會なるものを作られるとか、發展を望む。

### C、理科機械室

如何なる水が飲料に良きか、水中には如何なる微菌が居るか、何處の水が良きかと云ふことは衛生上極めて重要なことにてなくてはならない。我部此の室で、水質の試験をすることにした。先づ我地方各所の水を試験し、その結果を培養器に入れ、地圖を以て示した。又空氣中の微菌も培養した。水に含有せられて居る、鐵、クロール、アンモニア、硝酸、炭酸、有機物等を著色する化學實驗は特に父兄の賞讃を博した。此日二十一人も水の試験を頼まれた、約四十日間絶ゆる奮闘を續けられた諸君は藤田、中村、堀、山村の諸君である。

D、特別教室、此の室は電氣應用の物を集めた。イルミネーション、三個出た。觀衆の注意を大いに引く、殊に藤村、河野兩君は少數なるにか、はらず新規な大きなのを造られたのは殊勝努力が思ひやられる。又田中、寺戸、恒藤、小方、吉船諸君のもたじかに異彩を放つた。

B、パノラマ、疊三枚敷大、ベニスの夕を背景にした一大異彩、觀衆の喜ぶこと。これも相當の努力。作者は大和、根來、村上

君こそしてかくいふ予である。  
C 畫問色電燈

文化は文化をもちたらず。普通の電燈は書と夜とで物の色合が異なるのであるが、此の畫問色電燈は變らないのである。觀衆は非常な興味を引いて居た様子。反物の片の余りさなかな色の相違に若い婦人達は驚異の眼を見張つてゐた。尙説明中はからずも河村店の廣告になり電燈の笠の破損の辨償をよして貰つたのは喜劇と云へば喜劇、山中、藤井、山崎、中野諸君の努力。此のイルミネーション、パノラマを作るに當つて電燈會社からの懇切なる世話を感謝してやまない。因に云ふ。技師さんは來年鐵道開通祝日の時は中學校からも手傳つて貰ひ大規模のイルミネーションを作る云つて大變乘氣になつて居られた。

E 賣店、ソース約百五十本、香水三十本を賣却、香水は評判よく飛ぶ様に賣れるのには惜しい様な氣もした。

元氣漲つたる青年の胸に燃ゆる研究心は總てを解決しなければやまないものであらう。この展覽會に五年生諸君の大いに活動せられたことを感謝する。諸君の絶えぬ努力の結晶である云つていい。この未附有の展覽會に見物人が多數であつたこと廣言せられたいのは、秋晴の小春日和であつたなら、天氣かうらめしかつた最後に來年否永遠に我部の發展せんことを祈る。(竹内孝雄誌す)

### ●地歴部記事

我部は十月廿七日をトシ地歴部成績品展覽會を開催せり。出品物の製作は一、二、三、四年生にかゝれる物にして、我が部の標本は陳

- 走幅飛 恒遠(五米五九)
- 走高飛 宮崎(四呎六吋半)
- 棒高飛 岩田(九呎三吋)
- 山縣(九呎)
- 圓盤投 寺戸(二二〇九四)
- 藤村(二二〇一五)
- 砲丸投 新山(八〇八三)
- 寺戸(一一米一五)
- 槍投 村木(四〇〇〇四)
- 山田(三八八一)
- △第二回競技會
- 五月廿七日施行、レコード左の如し
- 百 米 藤田(十二秒五分一)
- 二百 米 阿武(二十七秒五分一)
- 四百 米 藤田(一分三秒五分二)
- 八百 米 末永(二分三十秒五分二)
- 千五百 米 吉田(四分五十二秒)
- 低障礙 益田(三十二秒)
- リレー 三中隊選手(一分五十三秒五分一)
- 走幅跳 能美(五米六六)
- 走幅跳 米廣(五呎五吋)
- 棒高跳 岩田(九呎六吋)
- 圓盤投 米廣(二七米二五)
- 能美(五米四一)
- 河内(四呎一〇吋)
- 河内(九呎)
- 村木(二二米一七)
- 角屋(七米八二)
- 佐伯(一〇米〇一)
- 阿武(三八米九六)

列擧の都合上遺憾ながら二三に止めて、多くを陳列せず。當日は晴天にて、保證人會等の催もありて、諸友の夏季休暇以來の努力の結晶を保證人を初め一般公衆に十分に觀覽せしむることを得たり。出品中第一等賞は各學年より一名づつを擇びたるものにして、四年田村季雄君作「世界に於ける我國の現狀」三年中原吉秋君作「森町模倣」二年吉田豊君作「日本アルプス」一年中原吉季君作「朝鮮模倣」なり。何れも精巧緻密、努力の跡歴然として、異彩を放ち、觀衆の注目を引けり。

### ●競技部記事

- △第一回競技會
- 四月九日施行、レコード左の如し。
- 百 米 仙波(十三秒五分一)
- 益田(十二秒五分一)
- 二百 米 仙波(三十秒五分一)
- 四百 米 村木(一分五秒)
- 八百 米 小林(二分五十二秒五分四)
- 藤田(二分三十五秒五分四)
- 千五百 米 吉田(五分十七秒五分一)
- 低障礙 益田(三十三秒五分三)
- 板垣(十三秒五分二)
- 能美(十二秒五分一)
- 能美(二十八秒五分一)

- 砲丸投 寺戸(一一米三三)
- 山田(四二米六八)
- 槍投 山田(四二米六八)
- 吉田(二五二分二秒五分四)
- △第三回競技會
- 六月廿八日施行、レコード左の如し
- 百 米 能美(一一秒五分四)
- 益田(二六秒五分一)
- 二百 米 藤田(一分一秒五分二)
- 四百 米 中村(二分三秒五分四)
- 八百 米 中村(四分五秒五分一)
- 千五百 米 中村(四分五秒五分一)
- 低障礙 金森(三〇秒)
- リレー A組(一分四七秒)
- 走幅跳 能美(五米九〇)
- 走幅跳 山田(五呎五吋二分一)
- 棒高跳 岩田(一〇呎三吋二分一)
- 大田(商業)(九呎八)
- 圓盤投 米廣(二六米四五)
- 砲丸投 寺戸(一一米八三)
- 山田(四二米一〇)
- 槍投 山田(四二米一〇)
- 吉田(二四分一二秒五分一)
- △第四回競技會
- 九月十三日施行、レコード左の如し
- 百 米 益田(一二秒)
- 二百 米 益田(二五秒五分二)
- 四百 米 藤田(六〇秒五分三)
- 能美(二五秒五分四)
- 山縣(六一秒五分四)

八百米 中村(二分二五秒五分四)  
 千五百米 中村(五分三秒五分一)  
 低障碍 金森(二九秒五分二)  
 レー A組(一分四秒五分四)  
 走幅跳 能美(六米〇四)  
 走高跳 米廣(五吹二吋二分一)

秋山(三〇秒五分四)

◎山口縣教育會主催競技大會

遂に雪辱の日は來ました。諸選手の奮闘を祈る、この激勵の辞におくられて、十月三日、吾校選手は山口に向ひぬ。

明くれば四日、午後一時百米豫選を以つて、大會の幕は切つて落されぬ。能美、益田兩君、一二着にて共に選に入る。續いてハードル豫選あり。金森君二十八秒五分二の良好なるタイムにて一着、秋山君二着にて入選。林君二百米にて二着となりて入選、藤田君僅の差にて三着となりて落選せしは残念。

フィールドにては、砲丸投、走高跳行はる。寺戸、佐伯二君砲丸投に出場し寺戸君一等、佐伯君四等にて一擧に六點を得。之に加ふるに八百米リレ

棒高跳 岩田(一米呎五吋)  
 圓盤投 米廣(二七米六〇)  
 砲丸投 寺戸(一米三六)  
 槍投 山田(三五米八五)  
 マラソン 吉田(五八分六秒五分一)  
 註、砲丸ハ四回共十二ギンド

山縣(九呎六吋)

第一豫選に一着にて入選するあり。全軍の意氣大に振ふ。此の日の得点我校六點、山中六點、山口師範八點にて、勝敗の豫測をゆるさざるものありき。

五日劈頭百米決勝に益田、能美、二君一二着を占め、八點を獲得す、前日の喜び未だ消えざるに、又此の痛快味を味ひ、歡喜の聲、朝の静けさを破りてひびく。次に棒高跳あり。吾校の花形岩田君の妙技に逢ひ觀衆醉ゆるが如し。山縣定芳君大いに力戦し、三等となりしは天晴れ。之にて七點を得、更にハードル決勝にて六點を加ふ。金森君一着、秋山君四着なり。時はうつりて、リレー第二豫選は開始せ

られぬ。一回、二回、三回、四回、榮あるテープは吾校益田君によつて切られぬ。タイム一分三十九秒五分二。二百米決勝に林君力走して四等に入賞す。山村君、能美君走巾跳に出場三四等となりて三點を増す。八百米タイム決勝に山縣、中村二君出場せしも惜しいかな入賞せず。太陽は中天を過ぎぬ。フィールドにては槍投振はず。中村君千五百米、タイム決勝に四等にて一點を得。マラソンの吉田君如何と案せしに四等にて入賞二點を得。溝部君惜しくも七等にて落選。フィールドは轉回してリレー決勝となりぬ。時は刻々に迫り殺氣漲りし頃、肺胸を衝くが如き銃聲にスタートを切る。トップの能美君鮮なるスタートにて忽ちにして十米をリードし、金森君これにツイで大いにつとめ巨離益々大となる。サードの藤田君よく守りてバトンは益田君にわたされぬ。凄い程の其のスビート、美事なる其のフォーム。テープは遂に益田君によりて切られぬ。歡呼の聲、場内に轟き渡り、喝采する事極度に達す。折から圓盤投げにて昨年のレコードホルダー米廣君一等

を得、寺戸君力戦して二等に入賞し八點を得たるの報あり。嗚呼吾校遂に勝ちぬ。燦として輝く名譽の表象、を無言にて仰ぐ選手の胸中や感慨無量、頭上にひらめく優勝旗、夕陽に映ゆる花環、そは吾が選手諸君一年間の努力の賜にあらずして何ぞや。嗚呼努力なる哉。終りにのぞみ、山口高商、山口高校、其他先輩諸兄の深甚なる援助を深く感謝す。

種目	人名	得点	レコード
百米	益田 兼清	50点	十一秒五分四
二百米	能美 誠一	13	
	林 正次郎	1	
	藤田 鶴雄		
四百米	山縣 順一		
	山縣 勝		
八百米	山縣 順一		
	中村 四郎		
	中村 四郎		
千五百米	中村 四郎	1	
	吉田 勇		
	吉田 勇		
マラソン	吉田 勇	2	
	渡部 菊雄		

砲丸投	益田 兼清	10	一分四十秒
砲丸投	寺戸 英雄	5	一一米四五
砲丸投	佐伯 義治	1	二七米五五
砲丸投	寺戸 英雄	3	二八米四六
砲丸投	米廣 松王	5	
砲丸投	山田 哲	3	
砲丸投	阿武 省三	2	三米一五
砲丸投	岩田 貞夫	5	
砲丸投	山縣 定芳	2	
砲丸投	山田 哲	1	
砲丸投	米廣 松王	1	
砲丸投	能美 誠一	2	五米七五
砲丸投	山村 治郎	1	
砲丸投	一等救中	五二点	
砲丸投	二等山師	三五、五五	
砲丸投	山中	二一点	

因に本年一月施行せられたる縣下中等學校學力比較試験に於ても、本校は第一位を占めたり。學力に於ても、競技に於ても本校の名譽は極めて大なりといふべし。今後此の名譽を持続するは後進の者の一大責任といふべし。

●明治神宮競技豫選會

明治神宮競技會陸上競技參加者中國區豫選會に出場のため、相島先生、岩田君余の三名は十月十一日早朝萩を出發遠征の途に上つた。午後三時過廣島着、先づ競技場たる廣島師範學校のグラウンドを檢分す。

明ければ十二日午前八時半、女子五〇米第一豫選を以つて競技は開始せられた。我々選手の參加競技の棒高跳は午後でしが最終にあつた。參加人員十四名、其の大多數は高サ三米にてオミツトせられ、萩中、岩田、廣陵中學内田、青年團員秋光三人の接戦となつた。

岩田君三回中二回フワウルをやり一時は危惧の念を抱かしめたが三回目に首尾よくパスして更に美事に三米一〇を飛び越すや、拍手四方に起る。内田、秋光二君は三米一〇にてごちらもオミツトされた。

岩田君はレコードを取る事を希望したが、閉會式を急ぐ爲め三米一〇アルプアーにて中止するのやむなきに至つた。

◎競技大會記事

十月十八日、開校記念日をトして、競技大會が開催せられた。前日は氣掛りの天氣であつたが、當日は曇も名残なく消れて、絶好の運動日和となつた。午前九時運動場に集合し、校旗を迎へて、開校記念歌を合唱した。競技は百米より始まり、生徒各自の自覺と、各係員の勞により、プログラムは、豫定以上に進んだ。山口に於て優勝した吾が健兒の意氣と妙技とは、各競技に發揮せられ、縣下の覇者たる面目の躍如たるものがあつた。殊に岩田君の棒高跳は、中等學校のレコードを破り、金森君のハードル、山田君の走高飛は、共に優秀なレコードであつた。四月以來、風雨寒暑を物ともせず、毎日精勵せられた結果に外ならぬのである。番外に小學校選手の競技が行はれた。今年にリレーレースのみに止めず、五十米(尋常のみ)百米、二百米、四百米、八百米、走中跳(高等のみ)も行はれた。參加學校は明倫、椿東、椿西、白水、越ヶ濱、奈古、大井、明木、佐々並、川上の十校に及んだ。最後の勝利は、尋常科も高等科も明倫の手に歸した。

中隊選手は去年の通りで採点された。午後四時中隊選手のリレーレースを最後に、競技は終つた。優勝旗は四中隊の手に歸した。一同整列、校歌を合唱し、萬歳聲裡に解散した。本年よりは、從來の

運動會の名稱を改めて、競技會とせられた。規律正しく眞面目に競技を行ひ、緊張した氣分が漲つて居た。觀覽者の氣分も大分變つて、競技に熱心で、よく理解された方が多い様に見受けた。喜ぶべき傾向である。當日のレコードで優秀なる者は左の通りである。(山中不二夫誌)

百 米	十二秒	益田 兼清	
二百 米	二十五秒五分ノ四	益田 兼清	
四百 米	一分五分ノ四	益田 兼清	
八百 米	二分二十五秒	中村 四郎	
千五百 米	四分四十五秒五分ノ一	横山 剛熊	
低障物	二十八秒五分ノ四	金森 幸一	
槍 投	三十七米八二	阿武 省三	
砲丸投	二十八米二三	米廣 松王	
砲丸投	十米九六	米廣 松王	
ホ、ス、ジャンプ	十二米七〇	山村 治良	
走高飛	一米六七	山田 哲	
走幅飛	五米九〇	常川 明	
棒高飛	三米二五	岩田 貞夫	
中隊成績は左の如し			
一 等 第四中隊	二五點	二 等 第二中隊	二〇點
三 等 第三中隊	一六點	四 等 第一中隊	一四點
小學校選手競技成績左の如し			
高等科の部			
百 米	一 等 明 倫	松岡 殿(二三秒五分二)	

四百米 一等 樺東 山本 助一(二分九秒)

八百米リレー 一等 明倫 吉井、來島、高村、松岡(二分)

走中飛 一等 明倫 松岡 巖(五米二二)

八百米 一等 白水 岩本 誠(二分五秒五分二)

尋常科の部

五十米 一等 白水 中村 廣政(七秒五分三)

百 米 一等 樺東 山本 明(十五秒)

四百米 一等 白水 中村 國政(一分八秒五分四)

八百米リレー 一等 明倫原、末武、齋藤、山根(二分九秒五分)

各小學校成績左ノ如シ

高等科 一等 明倫 二四點 二等 樺東 一八點

三等 白水 一七點

尋常科 一等 明倫 一八點 二等 白水 一六點

三等 樺東 九點

明倫高等科は引續き三ヶ年優勝旗を獲得せり。

○武道部記事

寒稽古

一月十一日より、同二十四日迄柔剣道部共に寒稽古を行ふ。廿四日には武道部大會を行ふ。試合後、寒稽古皆勤者及精勤者に賞狀を授與す。

寒稽古出勤状況左表のし。

武道寒稽古出勤状況表

(甲)出席者一日平均數調

年 度	延人員	一日平均	部人數	百分比	期間
大正十一年	三六六	二二三	三二三	七一	一四日
大正十一年	減増三六	增	增	增	
大正十一年	元二六	減	減	減	
大正十一年	減増九	減	減	減	
大正十一年	元二六	減	減	減	
大正十一年	減増九	減	減	減	
大正十一年	元二六	減	減	減	
大正十一年	減増九	減	減	減	

〔大正十一年度全生徒毎日平均七割七分強 出勤期間十四日〕

〔大正十一年度全生徒毎日平均七割七分強 出勤期間十四日〕

(乙)皆勤者及精勤者數調

年 度	皆勤者數	精勤者數	百分比	期間
大正十一年	三三三	三三三	一〇〇	一四日
大正十一年	減増七	增	增	
大正十一年	元二六	減	減	
大正十一年	減増九	減	減	
大正十一年	元二六	減	減	
大正十一年	減増九	減	減	
大正十一年	元二六	減	減	
大正十一年	減増九	減	減	

〔大正十一年度全生徒ノ五割二分強 皆勤期間十四日〕

〔大正十一年度全生徒ノ三割六分 皆勤期間十四日〕

○春季大會

六月二十七日、柔剣道部共に春季大會を開く。演武者一同の比較的規律ある。諸動作は一段の進歩と見做さる。將來も部員各位の一層の努力を望む。

○京都武徳殿演武大會

大正十三年七月下旬 京都武徳殿に於て、第二十五回青年演武大會開催せらる。本校出演選手氏名及成績左の如し。

劍道部 宮崎農 武田 奈良一中 玉置 木 武村 廣田

富田林中 野水 徳島商 阿陽 武村

勸學院 山縣 三重神戸中 弘長 長邊

柔道部 本 校 八幡商 川 不二雄 和歌山商 守重 光雄

○本 校 竹内 六郎 高岡 中 長 沼 沼

○金澤一中 武 佐 高岡 中 長 沼 沼

× 本 校 村木 喜八 京一商 校 新山半治郎 本

○山口縣體育大會

夫正十三年十月四五兩日、第十回山口縣體育大會を開催せらる。今回武道部の試合組合せ方法も大改革せられ劍道部は山口高女講堂に於て舉行選手氏名は左の如し。

上野繁、野稻清定、田村義雄、弘長賢一、下瀬知雄、久保一郎(補)

校	本	大將守重光雄	中晋	師山	中山	中徳	中防	商裁	工字	中鴻
(先) 永田宗一郎	○	×	△	△	△	△	△	○	○	○
(補) 林不二雄	○	×	△	△	△	△	△	○	○	○
新山半治郎	×	×	△	△	△	△	△	○	○	○
山根 文作	×	×	△	△	△	△	△	○	○	○
山根 文作	×	×	△	△	△	△	△	○	○	○
新山半治郎	×	×	△	△	△	△	△	○	○	○
山根 文作	×	×	△	△	△	△	△	○	○	○
山根 文作	×	×	△	△	△	△	△	○	○	○
山根 文作	×	×	△	△	△	△	△	○	○	○

本校選手の奮闘努力も出演校十四校中第八位の結果と表はれしが、然し大なる賜は出演生徒一同の敗因に對して深く平素の演練の如何に必要且つ重大なるかを自發的に感銘せらるにあり。

柔道部十校参加。各校大將は將、前將は副將、先鋒は先鋒と、各同順位者全部と試合。勝を一點として採点。

山中29点 大將二段、中堅初段

山師28点 大將二段、副將先鋒共に初段

萩中22点

曹中18点 大將初段

徳中17点 (第一選手)

鴻中13点 中堅初段

守重が山中山師の二段と勇戦、竹内、新山、山根の奮闘、永田が初段に勝ちしは偉、而かも皆四年以下、來らん近き將來期待せら

るゝ多し。

◎秋季大會

十一月三日、體育日として大會を行ふ。

柔道部は各學年別身長順に組み、優勝試合を行ふ。(總延組數二百八十)各學年多數舉つて出場、一年生は初めての試合なるに試合振佳良、愉快なりき。受賞者左記

- 五年一等賞 田中(勝)、二等 齋木豊、三等 岩田
- 四年一等 山田哲、二等 藤田定、三等 上野
- 三年一等 新山、二等 仙波、三等 藤本、井上五郎
- 二年一等 白石、二等 板垣、三等 小林、末成、溝田
- 一年一等 田中(敏)、二等 田中(仁)、三等 山田(只)、堀(三)、大橋(久)

◎大正十三年度中隊幹部

- 第一中隊長 山本 馨
- 第二中隊長 田中勝太郎
- 第三中隊長 小方 數馬
- 第四中隊長 林 不二夫
- 小隊長 藤田 鶴雄
- 手 橋本 土郎
- 分隊長及旗手 護衛(省略)

◎大正十三年度校友會役員

- 會長 岩田校長
- 副會長 駒田先生
- 創道部 部長 岡部先生
- 委員 安達 丙作、廣田 一雄、田村 義雄、下瀬 知雄、高橋 博
- 柔道部 部長 青野先生
- 委員 田中勝太郎、林 不二雄、守重 光雄、森澤 史朗、原 一二三、瀧口 三郎、有美 邊、河野 三郎、田村 久夫、泳村 洋
- 辯論部 部長 伊藤(徹)先生
- 委員 福田 幸雄、原 一二三、角尾 與三、香川先生
- 書道部 部長 金子先生
- 委員 山根 芳郎、厚東 晃
- 市原 茂樹、波田 繁夫、大和 正夫
- 岩田 貞夫、上田 光雄、中野 芳郎
- 窪井 爲貞、金子 矩郎、長屋 修
- 田中 仁、窪田 壽男、山田 明
- 川津 文雄、津森 剛、守重 信雄
- 中村 博、田村米太郎、瀧田 春雄
- 野球部 部長 船木先生
- 委員 中塚 俊二、田中勝太郎、西田 義雄
- 藤井 武雄、岡部 順一、平田 光雄
- 永田宗一郎、上野 貢介、阿武 省三
- 仙波 尊一、脇本 元、稻田 敏夫
- 器具係 河野先生、副部長 近藤先生、板垣先生、三井先生
- 委員 藤田 繁一、柳部 要範、河野 健夫
- 吉屋 壽、吉崎謙一郎、根來 一男
- 阿武 義輔、廣 順一、末永 備
- 字田川重雄、藤村 和輔、澄川 操
- 褒賞部長 藤井先生、副部長 空橋先生、中津江先生
- 委員 本間先生、郷田先生
- 三好 治男、永松 正守、長瀬 誠
- 小方 忠勝、山村 清、常川 明
- 田村 義雄、厚東 重雄、藤田小太郎
- 競技部 部長 山本(百)先生、井村先生、相島先生
- 委員 岩田 貞夫、河内 政一、寺戸 英雄

畫道部 部長 田總先生

- 委員 藤岡 良文、藤井 秀夫、池上 武夫
- 中村 修、三原 清治、大和 義男
- 馬來 誠、河邊芳太郎、阿部 悌市
- 富田 節美、玉置 馨、中村 十郎
- 小野 靜雄、松井 利明、松浦兼三郎
- 小原 美紀、小橋 一義、秋山 晃
- 永宮 三郎、片岡 恒夫、大永金太郎
- 新庄 博、柴田 敏夫、河村 忠雄
- 久志 敏範、水野 一郎、金田 延祐
- 地歴部 部長 古川先生、副部長 香川先生
- 委員 井岡 清榮、橋本 士郎、中村 義治
- 大和 忠雄、香川 俊男、田村 季男
- 濱村 伸、宮崎 三郎、久保 一郎
- 香川 保政、三浦 彦八、和田 賢
- 理科部 部長 村岡先生、副部長 田中先生
- 委員 高尾 延彦、三島 文平、松本 武夫
- 竹内 武雄、村上 景介、三元 堯
- 廣 順一、村木 忠治、林 一象
- 梶村 次郎、藤村 和輔、山本 伸七
- 雜誌部 部長 河野先生
- 委員 山本 馨、谷川 清、山中不二夫
- 吉田 勇、田中 松一、久保田 積
- 中津 桂三、有美 邊、大島 政輔

市原 茂樹、波田 繁夫、大和 正夫

- 委員 岩田 貞夫、上田 光雄、中野 芳郎
- 窪井 爲貞、金子 矩郎、長屋 修
- 田中 仁、窪田 壽男、山田 明
- 川津 文雄、津森 剛、守重 信雄
- 中村 博、田村米太郎、瀧田 春雄
- 野球部 部長 船木先生
- 委員 中塚 俊二、田中勝太郎、西田 義雄
- 藤井 武雄、岡部 順一、平田 光雄
- 永田宗一郎、上野 貢介、阿武 省三
- 仙波 尊一、脇本 元、稻田 敏夫
- 器具係 河野先生、副部長 近藤先生、板垣先生、三井先生
- 委員 藤田 繁一、柳部 要範、河野 健夫
- 吉屋 壽、吉崎謙一郎、根來 一男
- 阿武 義輔、廣 順一、末永 備
- 字田川重雄、藤村 和輔、澄川 操
- 褒賞部長 藤井先生、副部長 空橋先生、中津江先生
- 委員 本間先生、郷田先生
- 三好 治男、永松 正守、長瀬 誠
- 小方 忠勝、山村 清、常川 明
- 田村 義雄、厚東 重雄、藤田小太郎
- 競技部 部長 山本(百)先生、井村先生、相島先生
- 委員 岩田 貞夫、河内 政一、寺戸 英雄

益田 兼清 能美 誠一 阿武 省三  
 下瀬 知雄 植田 讓 山本 信雄

◎大正十二年度校友會經常  
 費收支決算書

收 入		支 出	
前年度繰越金	高	職員生徒會費	高
金八拾壹圓六拾四錢也		劍道部	
金四百拾壹圓拾九錢也		柔道部	
金千八百五拾五圓五拾壹錢也		庭球部	
一金貳千參百四拾八圓參拾四錢也		野球部	
內 譯		短艇部	
金貳百參拾七圓九拾貳錢也		遊泳部	
金百九拾七圓四拾五錢也		雜談部	
金貳拾五圓五錢也		辯論部	
金貳拾圓也		書道部	
金百四拾八圓五拾錢也		書道部	
金八圓參拾錢也		運動部	
金百六拾六圓拾錢也			
金參圓五錢也			
金五拾錢也			
金七拾五錢也			
金五百六拾六圓六拾八錢也			

金貳百拾四圓八拾八錢也  
 金五百參拾六圓參拾錢也  
 金七拾圓也  
 金百五拾貳圓八拾六錢也

◎大正十二年度校友會基金收支決算書

收 入		支 出	
前年度繰越金	高	經常費ヨリ蓄積	高
金九千百七拾五圓壹錢也		預金及証券利子	高
內 譯		寄附金	
金六千貳百參拾四圓四拾七錢也		經常費ハ流用	
金貳千五百圓也		金四百五拾圓貳拾七錢也	
金七拾圓也		金八千七百貳拾四圓七拾四錢也	
金參百七拾圓五拾四錢也		以上	
金九千百七拾五圓壹錢也			
內 譯			
金九千九百七拾五圓壹錢也			
金四百五拾圓貳拾七錢也			
金八千七百貳拾四圓七拾四錢也			
以上			

附 錄 其 一

同 窓 會 報





同窓會誌

(自大正十三年十一月  
至大正十三年十月)

□新入會員歡迎會

三月五日、母校第二十四回卒業生の入會歡迎會を卒業式後、母校道場に於て開く、主人側として菊屋孫輔、和田準介、田坂信一、長井寛治、伊藤通利、田淵武彦、堀幸一、福田信彦、山本百合熊、中津江延彦、板垣克、河野通毅諸氏出席せらる。新入會員は二三人の缺席者あるのみ。河野幹事の開會の辭の後、岩田會長の告辭あり。折ふし歸省中の和田準介氏は壇に登り、氏が洋行中セントヘレナ島を訪問して、日本最初の遣歐使節の同島寄港の際の遺跡を探索せり極めて趣味多き談話あり。次で田坂信一氏も洋行中羅馬訪問の談話あり。二氏の談話は史的趣味極めて津津たるものあり。且二氏共に史料たるべき寫眞を母校に寄贈せられたり。折詰辨當の要應ありて後、福田信彦氏の發聲にて萬歳を三唱して閉會せり。

□會員小集會

三月九日、歸省中の和田準介君を中心として、有志の小集會を高大亭に於て開催す出席者左の如し。

岩田會長、和田準介、和田港、菊屋孫輔、田坂信一、厚東太郎、長井寛治、山本百合熊、中津江延彦、石原忠亮、堀幸一、河野通毅

和田準介君、田坂信一君の外遊中の奇談珍聞興を添ふるこゝ大なりき。

□名簿發行

四月五日、會員名簿第八號印刷出來、到着す。本號發行に就ては下關市在住の會員古谷實君の多大の盡力あり、深く其の厚意を謝せざるべからず。

□獎學賞授與

三月五日、母校卒業式に際し、七席以上の者に獎學賞として寫眞一葉宛を授與す(姓名校報欄参照)  
四月八日、新學年始業式に際し、各學年五席以上の者に獎學賞として本立一組及賞狀を授與す、愛賞者左の如し。  
四年 山本 馨 横山 幸生 瀧口 三郎 大谷 正信  
三年 阿部 暢甫  
田村 義雄 岸 音熊 永見 眞人 市原 茂樹  
松浦繁三郎  
二年 小橋 一義 永富 五郎 野稻 清定 大永金太郎  
新山半治郎  
一年 池上 武夫 板垣 禮作 山根 芳郎 水野 一郎  
峰岡 眞文

□特別會員溝部先生逝去

六月十七日、特別會員溝部壯六氏逝去、幹事その宅に弔辭を述べ、供花一對を贈る。

□評議員及委員の相談會

七月廿日、評議員及委員の相談會を母校に於て開く。定期大會の件、會費の件、評議員及委員改選の件等に就て相談す。

□第九回定期大會

八月八日午後七時より、橋本宮月亭に於て開く。出席者左の如し。  
田坂信一、和田港、行本益三、香川景久、中津江延彦、板垣克、小方博、伊藤通利、田淵武彦、玉木正夫、村田了介、能美猛、丸尾誠三、堀元助、齋藤政武、菊屋孫輔、堀幸一、石原忠亮、齋藤壽福、末岡周介、長井寛治、國重敬四郎、中村博幹、幹事長井寛治氏司會者となりて左の件を議決す。  
會費は本年度より従来の貳圓を改めて參圓とする、名簿は隔年に發行するも、毎年發行するも經費の都合次第にて幹部に一任すること。

次に評議員會にて岩田校長を本會々長に選舉せることを報告し、本年評議員半数改選期なるを以て抽籤の結果左の五氏退職するに決す。  
和田、長井、齋藤、金子、岡

右五名の補缺は改めて會長の指名と決す。斯くて酒肴出で歡談の後十二時解散す。

□評議員及委員有志會

九月七日午後七時、吉村風月堂樓上に於て開催、出席者左の如し  
岩田會長、厚東太郎、末岡周介、和田港、長井寛治、田淵武彦、高垣重一、伊藤通利、石原忠亮、堀幸一、河野通毅、山本百合熊、中津江延彦、板垣克  
岩田會長の新任就職の挨拶あり、評議員五名は左の通り會長より指名せらる。

末岡周介、和田港、齋藤壽福、石原忠亮、長井寛治  
幹事互選の結果重任と決す。斯くて懇談に移り、十一時頃解散す。

□基金應募狀況

一昨年八月基金募集を開始せしが其後滿二ヶ年を経て、本年七月三十一日現在高登千八百貳拾壹圓貳拾壹錢に達せり。(此の中には利子をも算入す)

□大津郡三隅村同窓生懇談會

八月二十二日午後五時ヨリ在三隅村同窓生懇談會ヲ豐原山徳ニテ開催ス

- 一、森中同窓會三隅支部設置ノ件
- 一、同窓會基金取纏ノ寄附ノ件
- 一、在三隅村同窓生ノ將來一層團結發展ヲ計ルノ件

右三件ニ就キ協議シ後開談ニ移リ在學中ノ滑稽傑作等快談風發時ノ推移モ忘レ談笑裏ニ十時半解散。因ニ同日出席者ハ山一源吾、小枝義雄、後藤琢一、桑原仁作、坂田義亮、辻野有一、宇野徳兄、以上七名(宇野君報)

□上級學校在學者調

母校卒業生にして目下上級學校に在學する者の氏名を調べる爲め上級學校四十餘校の會員に照會しましたが、其中回答のあつたもの左の通りです、何かの参考にもと思ひ掲載します、御回答なつた方には厚く感謝します。

- △東京高等師範學校  
理科一部 一學年 澁谷 辰  
文科一部 一學年 原 吉 雄  
化學選科 一學年 島 居 勝  
△第六高等學校  
文科甲一組 二年 山 中 茂  
理科甲二組 二年 寺 田 俊 三  
理科甲三組 二年 伊藤喜兵衛  
文科乙 一年 内 山 誠  
理科甲 一年 青 木 弘  
理科乙 一年 三浦不二夫  
△海軍兵學校  
一年 吉 津 信 一  
△東京商船學校

機關科第二學期生 守 田 吉 光  
全第一學期生 石丸孝一 全第三學期生 堀 誠

△明治大學  
豫科二學年 丸尾誠二 全一學年 大谷三熊  
專門部一學年 大島新三 全一學年 内藤 昌

△同志社大學  
大學豫科一年 普喜良術 高商部二年 岩田芳夫  
高商部一年 久保田五六

△陸軍士官學校  
本科二年 椿 正義 本科一年 村木 曠  
豫科一年 進藤研治 豫科一年 池田謙三

△廣島高等學校  
文科乙一年 福田幹雄 文科甲一年 杉 丙三

△東京商科大學  
商學專門部三年 坂田武夫 同三年 富田正次  
同 二年 石津有恒 同一年 伊藤貞一  
同 一年 三輪 公 同一年 野村龍介

△明治專門學校  
大學豫科三年 村田春二 同二年 藤野 博  
同 一年 弘 中 勝

△山工學科三年 宮國秀彦  
應用化學科二年 神代龍雄

△神戸高等工業學校  
電氣科一年 津田巖男

附錄 其二 猛省錄

△廣島高等師範學校 理科一部三年 齋藤政武 野科三部一年 香川義信	△第三高等學校 文科丙二年 木原秀雄	△山口高等商業學校 支那貿易科 藤田 良平 英語科三年 平田 信也 同 二年 田中 商一 同 二年 上田 浩一 支那語科三年 江川 精一 同 三年 石津兵太郎 同 一年 石田 明 同 一年 百濟 茂女	△早稲田大學 大學部 商學部 一年 山中 吉郎 同 二年 山本登代治 法學部 三年 武田 正 政治經濟科三年 中村 博	專門部 法科 二年 中村 薰 商科 三年 山根 良一 政治經濟科三年 堀 元介	商科 二年 和田 修藏 同 三年 國弘 重幸 法科 一年 山根 幸雄	同 二年 安藤 次郎 同 二年 上田 信彦 同 一年 津田 龍夫 同 三年 中谷 由路 同 三年 中村 彰 同 一年 濱野 三郎 同 一年 來島 勝男	同 一年 藤原 勝利 同 二年 金子 達一 同 一年 中村 博
---	-----------------------	--	--	--	--	---	---------------------------------------

文科 一年 吉屋 信若  
同 二年 能美 惠市  
理科 三年 田中 文夫  
文科 一年 山根 次郎

▽會員訃報△  
大正十二年十一月以後會員の訃報に接したるもの左の如し、茲に謹しみて哀悼の意を表す  
津時平八郎君(第二十三回卒業)大正十三年一月二十四日病死  
佐古良一君(第三回卒業)二月六日病死  
渡邊寛治君(第十回卒業)四月十四日病死  
山本賢治君(第十六回卒業)四月廿一日病死  
溝部壯六先生(特別會員)六月十六日病死  
伊藤義雄君(第九回卒業)六月十八日病死  
山田昌介君(第四回卒業)十月上旬病死

吉田松陰先生所輯猛省錄、世知之者蓋稀矣。今揭之如左、若其所以錄、跋文詳之矣。

後學安藤紀一識

### 猛省錄

松陰蓬頭子輯

從來惟見<sub>下</sub>何涉學士案上<sub>ニ</sub>惟置<sub>キ</sub>一書<sub>ヲ</sub>、自<sub>レ</sub>首至<sub>レ</sub>尾<sub>ニ</sub>、正<sub>ニ</sub>校<sub>シ</sub>錯字<sub>ヲ</sub>、未<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>卷<sub>ヲ</sub>、不<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>讀<sub>ニ</sub>他書<sub>ヲ</sub>、此<sub>レ</sub>學者<sub>ノ</sub>所<sub>レ</sub>難<sub>シ</sub>トスル也。

范仲淹之<sub>ニ</sub>南都<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>學舍<sub>ニ</sub>、掃<sub>ニ</sub>一室<sub>ヲ</sub>、晝夜講誦<sub>ス</sub>。其起居飲食、人<sub>ノ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>堪<sub>ヘ</sub>。而<sub>レ</sub>公<sub>自</sub>刻<sub>ス</sub>ト益<sub>シ</sub>苦<sub>シ</sub>。居<sub>ル</sub>コト五年<sub>ニ</sub>シテ、大<sub>ニ</sub>通<sub>セリ</sub>六<sub>六</sub>經<sub>之</sub>旨<sub>ニ</sub>。

洵少年<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>學<sub>ハ</sub>。生<sub>テ</sub>一<sub>十</sub>五<sub>歲</sub>、始<sub>テ</sub>知<sub>レ</sub>讀<sub>ム</sub>コト<sub>ヲ</sub>書<sub>ヲ</sub>。其後困<sub>ム</sub>益<sub>シ</sub>甚<sub>シ</sub>。然後<sub>ニ</sub>取<sub>テ</sub>古<sub>人</sub>之<sub>文</sub>而<sub>讀</sub>之<sub>ヲ</sub>、始<sub>テ</sub>覺<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>出<sub>レ</sub>言<sub>用</sub>レ<sub>ル</sub>意<sub>與</sub>レ<sub>己</sub>大<sub>ニ</sub>異<sub>ナル</sub>。時<sub>ニ</sub>復<sub>タ</sub>內<sub>ニ</sub>顧<sub>ミ</sub>、自<sub>ラ</sub>思<sub>ニ</sub>其<sub>才</sub>、則<sub>又</sub>似<sub>シ</sub>夫<sub>ノ</sub>不<sub>下</sub>遂<sub>ニ</sub>止<sub>ニ</sub>於<sub>是</sub>而<sub>已</sub>上<sub>者</sub>。由<sub>レ</sub>是<sub>ニ</sub>盡<sub>ク</sub>燒<sub>キ</sub>其<sub>曩</sub>時<sub>所</sub>爲<sub>リ</sub>文<sub>數</sub>百<sub>篇</sub>、取<sub>リ</sub>論<sub>語</sub>孟<sub>子</sub>韓<sub>子</sub>、及<sub>其</sub>他<sub>聖</sub>人<sub>賢</sub>人<sub>之</sub>文<sub>ヲ</sub>、而<sub>兀</sub>然<sub>ト</sub>坐<sub>シ</sub>、終<sub>日</sub>以<sub>テ</sub>讀<sub>ム</sub>コト<sub>ヲ</sub>七<sub>八</sub>年<sub>ナリ</sub>矣。

胡瑗布衣<sub>タリ</sub>時<sub>與</sub>孫<sub>明</sub>復<sub>石</sub>守<sub>道</sub>同<sub>シ</sub>讀<sub>ム</sub>書<sub>ヲ</sub>泰山<sub>ニ</sub>、攻<sub>苦</sub>シテ食<sub>レ</sub>淡<sub>ナ</sub>終<sub>夜</sub>不<sub>レ</sub>寢<sub>ヲ</sub>、一<sub>坐</sub>十<sub>年</sub>不<sub>レ</sub>歸<sub>ヲ</sub>。得<sub>ニ</sub>家<sub>問</sub>、見<sub>レ</sub>上<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>平<sub>安</sub>二<sub>字</sub>、即<sub>チ</sub>投<sub>シ</sub>之<sub>澗</sub>中<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>復<sub>展</sub>讀<sub>セ</sub>。

范仲淹處<sub>ニ</sub>南<sub>都</sub>學<sub>舍</sub>、晝<sub>夜</sub>苦<sub>學</sub>、未<sub>ニ</sub>嘗<sub>テ</sub>解<sub>レ</sub>衣<sub>就</sub>寢<sub>ニ</sub>。夜<sub>或</sub>昏<sub>怠</sub>、輒<sub>チ</sub>以<sub>レ</sub>水<sub>ヲ</sub>沃<sub>レ</sub>面<sub>ニ</sub>。

以西把尼亞古賢曰多斯達篇。著書尤多。壽僅五旬有二。所著書籍、就始生至一、卒計之、每一日當得二十六章。每章二千餘言、盡屬奧理。後人繪其像、兩手各持一筆。章其勤敏也。

王荆公初及第、爲僉判。每讀書、至達旦、畧假寢。日已高、急上府、多不盥嗽。吳奎始爲少吏。晝則治公事。夜輒讀書、不寐者二十餘年。

陽城性好學。貧不能得書。乃求爲集賢寫書吏、竊官書讀之。晝夜不寐。出六年、乃無所不通。

司馬公幼時、忠記誦、不<sub>レ</sub>如人。群居講習、衆兄弟既成誦、遊息、獨下帷、絕編、追能倍誦、乃止。用<sub>レ</sub>功多者、收<sub>レ</sub>功遠。其所<sub>レ</sub>精誦、乃終身不忘也。公嘗言、書不可<sub>レ</sub>不成誦。或在馬上、或中夜不寢時、詠其文、思其義、所得多矣。

董仲舒以治春秋、孝景時爲博士。下<sub>レ</sub>惟講誦。或莫見其面。蓋不<sub>レ</sub>觀於舍園三年。其精<sub>レ</sub>如此。

柳子厚貶永州司馬、居閑益自刻苦、務<sub>レ</sub>記覽、爲<sub>レ</sub>詞章、汎濫停蓄、爲<sub>レ</sub>深博、無<sub>レ</sub>滯澹。而自肆於山水間。

太孺人中歲寡居、日夜疾一子、有二<sub>レ</sub>建立時、儼<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>愉色。即從遊士數來、殿卿又往往輟<sub>レ</sub>腹迎之、終日不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>惟誦。太孺人始猶對客、詳<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>呵責。殿卿者久之。從遊士復不<sub>レ</sub>謝絕。太孺人則扇<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>門戶、盛<sub>レ</sub>氣厲<sub>レ</sub>辭。鞅鞅去<sub>レ</sub>諸子矣。以<sub>レ</sub>

故殿卿無<sub>レ</sub>擇交。許邦才天下之事無<sub>レ</sub>大小、皆決於上。上至<sub>レ</sub>衡石量<sub>レ</sub>書。日夜有<sub>レ</sub>呈。不<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>呈、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>休息。每<sub>レ</sub>日有<sub>レ</sub>定課。自<sub>レ</sub>鷄鳴而起、終日寫閱、不<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>小齋。倦<sub>レ</sub>則就<sub>レ</sub>枕、既寤即與。不<sub>レ</sub>肯<sub>レ</sub>偃仰。枕上。每夜必置<sub>レ</sub>行燈於床側、自提<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>案。陳瓌匡衡好<sub>レ</sub>學。家貧。庸作<sub>レ</sub>以供<sub>レ</sub>資用。尤<sub>レ</sub>精力過<sub>レ</sub>絕。人<sub>レ</sub>。衡勤學。無<sub>レ</sub>燭。隣舍<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>燭而不<sub>レ</sub>逮。衡穿<sub>レ</sub>壁引<sub>レ</sub>其光而讀之。邑<sub>レ</sub>大姓文不<sub>レ</sub>識名<sub>レ</sub>家富<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>書。衡乃與<sub>レ</sub>其客<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>償。願<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>遍<sub>レ</sub>讀<sub>レ</sub>之。遂<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>大學。孫敬常閉<sub>レ</sub>戶<sub>レ</sub>讀書。睡<sub>レ</sub>則以<sub>レ</sub>繩繫<sub>レ</sub>頸<sub>レ</sub>、懸<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>梁<sub>レ</sub>上。愈之所<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>、不<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>猶<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>也。雖然、學<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>二十餘年。始<sub>レ</sub>者非<sub>レ</sub>三代兩漢之書<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>、非<sub>レ</sub>聖人之志<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>也。處<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>遺、儼乎<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>思、茫乎<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>迷。秦王開<sub>レ</sub>館<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>延<sub>レ</sub>文學之士。杜如晦、房玄齡、虞世南、褚亮、姚志廉、李玄道、蔡恭恭、薛元敬、顏相、蘇勗、于志寧、蘇世長、薛收、李守素、陸德明、孔穎達、蓋文達、許敬宗等爲<sub>レ</sub>文學館學士、分<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>三番。更<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>直宿<sub>レ</sub>。王暇日<sub>レ</sub>轉<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>館中、討<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>文籍<sub>レ</sub>或<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>夜分。使<sub>レ</sub>閣立<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>。像<sub>レ</sub>褚亮爲<sub>レ</sub>贊。號<sub>レ</sub>二十八學士。今茲四月、余歸<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>江戶、屏<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>一室、日<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>古人之書<sub>レ</sub>而讀<sub>レ</sub>之、始<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>古人之深厚該博。大<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>已。徐<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>、考<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>、唯勤<sub>レ</sub>焉耳。因<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>一冊子、每<sub>レ</sub>閱<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>、遇<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>勤學<sub>レ</sub>者、必<sub>レ</sub>摘<sub>レ</sub>錄<sub>レ</sub>之、且<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>猛省。所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>、乃<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>錄<sub>レ</sub>也。近日友人井上壯

太郎學<sup>ハントス</sup>劍<sup>ナ</sup>于坂東<sup>ニ</sup>。乃改<sup>ニ</sup>寫<sup>シテ</sup>一本<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>贖<sup>ト</sup>。蓋<sup>シ</sup>欲<sup>シ</sup>察<sup>ス</sup>于此<sup>ニ</sup>也。若<sup>シ</sup>曰<sup>ハ</sup>所<sup>レ</sup>錄<sup>ス</sup>皆<sup>ナ</sup>屏處讀書者之事<sup>ニ</sup>、與<sup>テ</sup>往<sup>ニ</sup>來<sup>シ</sup>于<sup>ニ</sup>二千里外<sup>ニ</sup>而學<sup>フ</sup>劍<sup>ヲ</sup>、初<sup>ヨリ</sup>沒<sup>ス</sup>交涉<sup>ヲ</sup>、吾<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>曰<sup>ハ</sup>、書<sup>ナ</sup>也、劍<sup>ナ</sup>也、階<sup>耳</sup>、府<sup>耳</sup>。階<sup>ハ</sup>非<sup>ス</sup>堂<sup>ニ</sup>、而府<sup>ハ</sup>非<sup>ズ</sup>財<sup>ニ</sup>。士之所<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>爲<sup>レ</sup>士<sup>、</sup>非<sup>ス</sup>書<sup>ニ</sup>也、非<sup>ス</sup>劍<sup>ニ</sup>也。然<sup>レ</sup>而業<sup>ハ</sup>博<sup>ク</sup>惟<sup>レ</sup>勤<sup>ム</sup>。錄<sup>ス</sup>僅<sup>ニ</sup>二十條<sup>ニ</sup>、未<sup>ダ</sup>敢<sup>テ</sup>博考窮搜<sup>セ</sup>。然<sup>レ</sup>トモ、孰<sup>レ</sup>讀<sup>ム</sup>深思<sup>セ</sup>、亦<sup>ハ</sup>有<sup>ラ</sup>嚴<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>所謂<sup>ル</sup>朴<sup>爲</sup>ニ<sup>、</sup>教<sup>刑</sup>者<sup>上</sup>。

壬子九月

松陰蓬頭子識

○按壬子者嘉永五年先生二十三歲時也、紀又識

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible due to fading and ink bleed-through.)

大正十三年十二月十五日印刷納本  
大正十三年十二月二十日發行

發行兼 編輯者	山口縣阿武郡萩町 三輪 勘
印刷者	山口縣阿武郡萩町大字西田町 荒潮 徳治
印刷所	山口縣阿武郡萩町大字西田町 信清 舍印刷所

